

# 1 哲学という希望

## はじめに

哲学は、いつの時代も果敢な企てであることを願い、それを実行してきた。ある哲学者がある構想を述べれば、別の哲学者はまったく別の位置から別の構想を立てていくという仕方で、さまざまな構想を展開してきたのである。それぞれには同時代的な限界がいやおうなく含まれる。哲学は、みずからの途を進むことが、最善であるという確信と覚悟をもった取り組みである。その多くは、やがてみずから可能性を使い尽くし、歴史の傍らに追いやられる。だがそれでも何度も別様に読み直されることがある。

哲学のなかには、同時代や先行する時代の構想を網羅的に整理し、配置する作業も行われることがある。アリストテレスやヘーゲルが典型的である。こうした作業は見通しを良くしてくれるが、たんに整合的な議論の配置のレベルでは、個々の構想の内的な可能性を引き出す作業からは隔たってしまう。そんなときには、ひとたび配置された知識を捨て、既存の学説の解釈を捨て、個々の学説で捉えようとした経験のエッセンスを、再度可能性へと向けて開いて行く作業が必要となる。

哲学の言葉は、その言葉をつうじてそこに籠められようとした経験を獲ることができれば、その言葉じたいを廃棄して行かなければならない。極端な言い方をすれば、哲学の言葉は、捨てるために修得するのである。また捨てることによって、はじめて明らかになる経験があり、言葉を捨てることをつうじてはじめて獲得される経験がある。言葉を捨てる作業は、詩人の冒険でもあり、覚悟でもある。まさに言葉を捨てることによって、経験は自分の可動域を拡大する。そしてその後言葉に紡ぐのである。そのため捨てることの技法が哲学には、必要とされる。

哲学の言葉は、一般的には「難解」だと言われる。それは言葉の意味が確定されず、言葉そのものが「マトリックス」として成立しているからである。言葉は、何かについての言葉だが、その何かを一言で言い表すことができるのかどうか、どのような保証もない。言葉は、どこまでも言葉であり、経験に対応しているのかどうかさえ不明である。そのため言葉は、経験の比喩、もしくは経験の影として活用される。言葉は、経験を前に進めるための手掛かりにしかならない。

哲学には奇妙な特質がある。哲学は、特定の専門領域ではない。経営学には経営哲学があり、法には法哲学があり、社会学には社会哲学がある。科学には科学哲学があり、知には知識哲学があり、道徳には道徳哲学があり、歴史には歴史哲

学があり、芸術には芸術哲学がある。さらには生きていくことには、人生哲学があり、勝負には勝負哲学があり、臨床にも臨床哲学がある。哲学は、特定の領域を占めることはなく、また特定の専門領域をもたないことが「哲学」の特質でもある。

哲学は、特定の事実を解明するような実証科学ではない。実証科学は、特定の領域で、データを取り、そのデータをもとにその領域でのなんらかの規則性を示すことを課題とする。毎日の天気予報も、数十年のデータを元に、予測を立て、明日もしくは1週間程度の天気予報を提供してくれる。多くの場合、確率的予想である。この天気予報は、当たることもあれば外れることもあり、予報された内容は、真偽としては、いずれかにわかる。だがほとんどの人にとっては、明日への対応の手掛かりとなり、気持ちの準備の手掛かりとなる。つまり多くの人にとって、毎日の天気予報は役に立ってくれる。

哲学には、こうした意味での実用性はない。ある意味で、哲学は、短期的には「役立たず」なのである。天気予報は、ほぼ毎日必要とされる。予報された内容の耐用年数は、ほぼ1日であり、これを伸ばしたものが1週間、1月、半年のようなスパンでの「長期予想」である。データで示されていることの耐用年数はまったく別のものである。

哲学は、現代の情勢をより広い視野で分析する。しかしこの作業においてもジャーナリズムのようにはならない。哲学には、事実を切り取るさいには、独特のセンスが必要とされる。もっとも見えやすい場面で言えば、その事実の持つ意義の耐用年数にかかわっている。ジャーナリストは、現在の情勢報告とそこから生じるさまざまな判断を行うことが必要条件である。事実を知らせることと、それに付帯するコメントを付けることである。ただし事実の切り取りにも、ジャーナリストに固有のセンスは必要である。そこにさまざまな思いが込められており、多くの場合には、公共化されるさいのメディアに左右されるような価値判断が込められている。メディアはそれに固有の色を出すために、バイアスをかけていることがほとんどである。それが「売り」なのだから、すでにしてバイアスがかかるように作られている。たとえば新型コロナウイルスの発生起源については、動物を介した自然発生説と武漢ウイルス研究所からのウイルス流出説は、何度も起伏を繰り返しながら、目新しい事実が出るたびに、センセーショナルな話題となる。こうした場合、話題の出現そのものに特殊な理由付けがあれば、なんらかの哲学的テーマになることはある。だが競合する主張の判定者を務めるほどの知識や判断材料を哲学は持ち合わせてはいない。

哲学が世界情勢のようなテーマで分析を行うさいには、真新しい事実や現状の情勢を知らせるような報道が目指されているのではない。少なくとも、報道の役割を担うほどの調査能力を哲学は備えていない。また特定の立場からの論評を行

うことが求められているのでもない。哲学は、時事評論風の卓見を提示するためには、ほとんど訓練が足りておらず、正直、このタイプの問題については、物の役には立たない。

少なくとも、そこで起きていることの構造的な基盤や、あるいは何か大きな変化が起きるさいの転換点となるような、見えにくい「きっかけ」を明るみに出すことが必要となる場合には、その内実を明るみに出すために、素材の切り取りを行うことはある。出来事(事件)のような事柄では、そこで何が起きたのかは、歴史の後にしかわからない。時間的な距離が、系列の分析を生み、「不連続点」の分析が進む。時点と時点をつなぐ基本的な紐帯が、「物語」である。物語は、未来予測には不可欠だが、それを実行することは未来学者の仕事であって、哲学固有の課題ではない。もちろん素質と環境と、そこでの訓練条件に恵まれれば、哲学者も未来予測を行うことはできる。だが床屋談義のような噂話をするとは、別段求められてはいない。そうした作業を行うためには、別の相応しい部門がある。

## 1 問題学

哲学が現実直面したとき、問いの設定に「哲学らしさ」は付き纏う。問いの設定の仕方が、哲学の訓練の場所でもある。たとえば誰もよく知っている「浦島太郎」の話がある。助けたカメに連れられて、竜宮城で楽しい日々を過ごすあの浦島太郎である。あのタイプの話で、現在まで残っている話は、いわば伝説であり、どこかに謎が含まれている。人間である浦島がどうして海の中にいられるのかというようなことではない。竜宮城では楽しい日々を過ごす、竜宮城のスタッフからは、本当は「早く帰れ」と思われていたのではないかと、というようなことでもない。

問いは、展開可能性を含む必要があり、そこから謎そのものの奥行きと深さを感じられるように設定されることが必要となる。そうでなければ、ただ言ってみただけに留まってしまう。おそらく浦島太郎の話で、もっとも大きな謎となるのが、帰りがけに渡される、「開けてはいけないお土産」である。玉手箱がそれである。一般には開けてはいけないものを、お土産に渡したりはしない。また「開けてはいけない」と言われれば、渡された側はいずれ開けてしまうということを含んで、渡しているはずである。開けてはいけないものが、実際に開けられないのは、ごく短い間だけだと考えてよい。

まず「開けてはいけないお土産」には何が入っているのか、という問いが思い浮かぶ。渡すべき何かが入っていなければ、お土産にはならない。かりに本人にとって、ただちに実利性のあるものであれば、「開けてはいけない」と伝える必

要もない。せいぜい「どうぞ大切に使ってください」と言うのが、限度である。

浦島は、このお土産を開けてしまうが、そこで煙が立ち、浦島の髪も髭も真っ白になってしまう。つまりまるで忘れていたかのような「時間」が一挙に経過してしまったのである。老いてしまったのである。助けたカメにつれられて行きついたのは、年を取ることを忘れるほどの充実した日々を満たした場所であったのかもしれない。それこそ「竜宮城」であったのかもしれない。経験の時間は、生理的時間経過に並行し、連動して進行するわけではない。数十年まったく年をとらないことは、しばしば起きる。だが何かのきっかけで、一挙に年を取ってしまうということも、時として起きる。蓄積されたものが一挙に形を取るように全体の組み換えが起きる。それが「老い」である。玉手箱とは、「老い」を先送りするための装置であるようにも思える。

時間は、誰にとっても有限であるが、多くの場合残り時間を勘定したりはしない。残り時間を勘定するようになれば、時間を生きる「生」の感覚はまったく別様なものとなる。この分岐点を決めるものが、玉手箱であり、玉手箱の開く時期によって、生の前後は別様なものとなる。

こうした解釈は、玉手箱の人生論的解釈である。問いは、可能な限り、奥行きと広がりのあるところで設定されることが望ましく、一つの解釈を見出したときにもなお別の問いが同時に出現するようなものであることが望ましい。新たな現実が出現するたびに、物語が新たな装いをもち、新たな問いとへ向かうことが、問いの価値であり意義である。

問題を代えてみる。たとえば地球環境問題で現在、排出する「二酸化炭素」量の削減が、多くの場面で語られる。地表付近の大気の温度を上げているのは、大気中の二酸化炭素と水蒸気であることは間違いない。この二つの物質は、熱容量が大きい。たくさんの熱を含むのである。水蒸気は、いずれ大気中で上昇して冷やされ、雨になるさいに熱を大気上空へと放出する。大気上空の熱は、地球表面の温度上昇には直接響いてこない。こうして二酸化炭素が、大気温度上昇の主因のように見なされる。大気中の二酸化炭素濃度の上昇が、大気温度の上昇にどの程度寄与するのかは、事象がマクロすぎて、簡単には判断できない。いまだなお異論を唱える人たちもいるからである。二酸化炭素削減は、一つの政治的ブームのようになることはできるが、それほど明快な理由を示すことができているわけではない。何よりも環境維持のような多変数ネットワークの問題が、放出二酸化炭素量の削減に限定されているところが、問いを狭くしている。

こういうときには、問いの範囲を広げるような別建てのネットワークを介在させてみるのである。はっきりしていることがある。熱そのものはエネルギーのゴミである。ある物質的要素に関し、それ以上に活用しようがなく、それ以上に活用しようとするれば、活用によって得られる利益以上に、はるかに多くのコストが

かかるものを、「ゴミ」だと定義しておく。熱は放置する以外には、活用しようのないゴミである。

二酸化炭素の場合はどうか。かりに二酸化炭素を固定する素材の開発ができれば、二酸化炭素は、その段階で、必要とされるコスト次第では、資源に変わりうる。たとえば二酸化炭素を圧縮し、低温でさらに圧力をかけていけば液化する。液化した二酸化炭素の使い道があれば、場合によっては資源となるかもしれない。また燃やせば二酸化炭素の排出される物質については、燃やさないで小さく砕石し、再度用途に合わせて再利用すればよい。物質であれば、再利用のサイクルは、比較的安価に設定できる。他に水素と二酸化炭素を化合させて、さまざまな炭素化合物を合成して、二酸化炭素を資源化する試みはある。だがこの化学反応にどの程度のエネルギーが必要となるかが、企ての成否を決める。二酸化炭素を資源化するために多くのエネルギーが必要となるのであれば、二酸化炭素化合物を作るために多くのエネルギーのゴミを排出していることになる。

二酸化炭素を栄養源として消費して自分自身の成長資源として活用しているものを探してきて、大々的に培養することで、微生物の活用によって二酸化炭素を資源化できる。たとえば温泉周辺で生息している「水素菌」は、二酸化炭素を栄養源としても活用し、成長を人為的に方向付ければ、炭素の加工物を大量に作り出すことができる。これによって二酸化炭素は、資源に変わりうるのである。日本のベンチャー企業の一つは、CO<sub>2</sub>を栄養源として、24時間で1個体が1600万個に増殖する「UCDI水素菌」を見出している。細菌であるから、変異種はたくさんあり、最も生産適合性の高い水素菌を探してこることもできる。これによってバイオ技術を最高度に利用し、研究開発と産業化を進めている。これらの成果として以下のようなことが期待される。(1)バイオ食材(水産養殖などの飼料用動物性たんぱく素材)(2)高機能プロテイン(3)バイオジェット燃料(4)化学品(生分解性プラスチック等)の各事業部門で食糧問題解決と脱石油社会の実現に寄与すると期待される。おそらくこのあたりの技術は、飛躍的に拡大していくと予想される。

それに対して、現時点では、熱そのものは暖房以外に使い道がなければ、まさにゴミである。そうすると排出されるゴミを減らすことは、地球環境の維持には必要なことであろう。自然エネルギーの活用(太陽光、風力、潮力その他)は、電気エネルギーに変換するさいに、熱に変わる部分が少ない。植物も太陽エネルギーを使っているが、植物の葉が、トタン屋根のように「熱い」という話は聞いたことがない。植物のエネルギー変換は、熱を出さない仕組みである。熱はエネルギーのゴミだから、自然エネルギーの活用が、排出されるゴミの量的な削減に寄与していることは確かなようである。

地球環境で見れば、太陽光エネルギーは、もっともエントロピーが低い。最も

多くのものに変換できる可能性をもつのが、光である。エントロピーの低さを、内在的な選択肢の多さと近似的に読み換えることができる。これに対して、熱には内的な選択肢はほとんどない。光エネルギーは、生命のエネルギーとなり、生命体はエントロピーで見れば、光から熱への途上にあり、エントロピー上昇を限りなく遅らせて、遅延させる仕組みである。子供が生まれれば、母と子供の全体系では、一時的にエントロピーの減少も起きる。

地下に埋蔵された石油や石炭は、地球規模の変動でエントロピーが低いまま保存形態になっている物質で、そのため活用のために対応する技術があれば、資源でもある。これを掘り出して現実の材料として活用している以上、地球全体の潜在的なエネルギーを含めた総エントロピーは極端に上昇している。つまり膨大なゴミを一挙に排出し続けているのである。自然エネルギーの活用は、エネルギーのゴミの排出をいくぶんか抑えるのだから、それじたいは異論の出る選択だとは思えないのである。

この議論は、二酸化炭素排出の削減の主張を、熱というゴミの排出量の削減で理由付けている。この理由付けの変更によってもたらされるのは、二酸化炭素の削減が、エントロピーの上昇をもたらすゴミ一般の削減の視野の中に配置されることである。地球表面のエネルギー系のエントロピーの上昇を抑え、遅らせていることに寄与しているのが、大地に含まれている水であり、そのもとに成長して維持されている多年生の植物、つまり森林である。森林は、少なくとも数十年の生育歴をもち、短期的な毎年のエントロピー増大を遅らせる効果があると考えられる。ところが地表面全体の保水量が減少し、総体として地表面は砂漠化している。灌漑用に地下水を汲み上げて活用したことと、単年の商業用作物栽培に、大量の水を使ってしまったことによるものである。

地表面付近の水分含量の極端な減少をもたらしている最大の原因は、大規模農業、機械化農業の展開である。莫大な肥料と農薬を散布し、単一作物を大量に生産する。この工法を取ると、地表面や地表面近くの雑草や微生物が、根こそぎ根絶させられてしまう。耕作地の表面を少し手で掘っても、カラカラに乾涸びている。これでは保水力が減少してしまう。

地球全体の人口増に対応するために、単一作物の大型生産を繰り返してきたのである。たとえばトウモロコシは、資料用にも人間の食料にも活用できる産物である。世界食糧輸出で見ると、アメリカ、ブラジル、アルゼンチンの3国は、世界中にトウモロコシを輸出し、ほぼそれでまかなわれている。ブラジルは、天然の森林の多くを伐採し、単一農作物用の畑に代えてしまった。工業化、都市化の影響もあり、土壌は単年度作物に切り換えられている。中国のように広大な国土面積のある国でも、米はインドから輸入し、トウモロコシはアメリカから大量輸入している。

地表面全体の水分保存率を示す明確な指標を取ることができれば、ここ 30 年程度で見ても、かなり減少していると推測される。こうした水循環のような大循環に参与するさまざまな事態のうち、一つでも変化すれば、循環全体のモードが変わってしまうと予想される。たとえば地中に保存される水の量が減少すれば、水の大循環の速度は速くなる。循環速度が 1 割でも速くなれば、おそらく地球上では、異常気象が頻発する。地中の水の保存量が減るという事態が、間接的にどのような現象になるのかは、あらかじめ予想することは容易ではない。

こうして哲学は、事象にかかわる問いの内実を変更し、改めて問いそのものをリセットする。それと同時に複雑な問題に対しては、理想的でベストな解決案のモデルを示すのではなく、そのつどの状況下でのベターな選択肢を示し、そうしたベターな選択肢を接続していくような回路を獲ることを促す。たとえば 30 年後に石油の埋蔵量は、どの程度なのかは不明であり、人類が活用できる飲み水の量がどの程度なのかも不明である。ベストな解決案の提案には、ほとんどの場合、プロセスが欠けている。そのためベストだと思われていたモデルが、歴史的事情によってまったく異なる条件下に置かれることはしばしばある。問いをリセットするなかでのベターな選択の継続こそ、提示されるべきシステム・モデルとなる。

## 2 理論哲学

理論哲学は、基本的には物事の真偽の判定にかかわる知である。本当か嘘かを調べるのも理論哲学である。物事の真偽は、本来一つの物事だけでは決まらない。真偽が決まる文を「命題」と呼ぶ。それ以外にも多くの文があるが、これらは「言明」と呼ばれる。天気予報の文は、予測が含まれているが、基本的には明日の用意のための手掛かりを提供しているだけであり、「言明」である。「明日の試合には勝ちます」というのも、覚悟の表明であり、真偽を競うものではない。明日実際の試合で負けた場合でも、「前日に嘘を言った」と非難がましく言われるのではなく、「残念だったね」という対応になる。

命題としても、それじたいは主語、述語のような言葉で作られた文である。そうすると文の正しさは、事実との照合によってもたらされるか、あるいは文の集合を取り、文全体の整合性によって吟味されるかいずれかである。前者が真偽の「対応説」であり、後者が「整合説」と呼ばれる。

たとえば無限論にかかわるような文は、対応する事実を確認することができない。有限の時間で無限の事実を調べることは無理である。宇宙の起源とされる、「ビッグ・バン」も直接調べることはできない。また再現実験も難しい。こういう場合には、理論言語から作られた理論言語どうしの整合性で判定することになる。「種の進化」も現時点では、調べようがない。夥しい数の昆虫が存在するが、

どのようにして新種が分岐したのかがわからないからである。というのも、遺伝子の突然変異が起き、そのなかで、環境内で有効に生き延びることのできたものは、新たな種となるという現在の「総合説」の説明は、説明の組み立てとしては、やはり循環を免れないのである。結果として生き延びたものを「適者」だと認定する以外にはないからである。遺伝子の一部に突然変異で変化が生じたとき、他の部位にも変異がおよび、全体として、有効な生存形態が獲得されたのだとすると、稀な偶然をあらかじめ前提していることになる。

こうして世界は真偽が決まらない事象に溢れていることがただちにわかる。そのときに理論的考察としての哲学は、真偽が決まるためには、どのような条件が必要となるのか、そのさいにはどのような設定の条件下で、どこまでの主張が成立するのかというような事柄について、条件範囲を明示して行くような議論となる。議論は、すべて「理論仮説」であるというわけにはいかない。それらの事柄には緊急に対応しておかなければならない事態も含まれるからである。

**コロナウイルスの発生源** たとえば新型コロナウイルスの発生源起源について、動物を介した自然発生的な RNA ウイルスの変異によって出現したのか、あるいは武漢ウイルス研究所の「機能獲得実験」の途上に、人為的なミスによってウイルスが人間の方へと染み出してしまったのかは、本来は明確にしておかなければならない問題である。

ウイルスそのものの変異については、毎年インフルエンザのようにどこでウイルスの変異が起きたのかを確定することは不可能である。しかしこのウイルスの変異が、自然界の偶然的な突然変異によって生じうるのか、あるいはどの程度の確率で起きうるのかを理論的に推定することはできる。かりに確率的に頻繁に起きうるものであれば、予防の範囲を広げ、ごくわずかな初期状態の変化が起きただけでも、ただちに世界に警鐘をならさなければならない。

また自然的変異であれば、コウモリから人間までの間の感染経路に、中間宿主があるはずである。世界的な大流行(パンデミック)が始まり、現時点で1年半も経過しているのに、この中間宿主が確認できていない。理論的な推定でも良いので、中間宿主の蓋然的な推定ができなければ、自然的変異というのも現実感に乏しい。またウイルスが自然的変異を重ねたとして、変異の連鎖に不可思議なジャンプがないのかを確認する作業は、変異の限界と確率を推定する上で必要条件でもある。

他方、かりに武漢ウイルス研究所の「機能獲得実験」で偶発的な事情が重なって漏れ出したものなら、その研究環境は厳密にチェックされ、再度厳格な管理下に置かれなければならない。というのも現実には第二、第三の新型コロナウイルスが可能であるという環境条件が維持されるわけにはいかないからである。このとき、この研究所の安全管理のレベルが問われる。安全管理体制については、第三



者による国際的な検査機関が行うよりない。

機能獲得実験は、主としてウイルスの感染力を高めるための人為的操作の実験である。このタイプの実験を武漢ウイルス研究所が行っていたことははっきりしている。ただし今回の新型コロナウイルスが、機能獲得実験によるものかどうかを確認するための条件は、ハードルが高い。つまり再現実験が可能かどうかだが、それを確認するための手続きは、リスクが大きすぎて実行するのは難しい。

政治やジャーナリズムで問題となるような、武漢で何が実際に起きたのかについての探索は、それはそれで必要なことではある。ことにこの研究所と人民解放軍との関係は、敏感な問題である。だがそれじたいは中国の研究体制の問題であり、科学研究のシステムの問題である。これはこれで別途、大きな課題を提起している。一般的に考えれば、今回のコロナウイルスによって第二次世界大戦の死者数を大幅に上回る死亡者が出ている。家族兄弟をウイルスによって奪われた膨大な数の人たちがいる。この人たちは、ウイルスの発生源について精確に知る権利があり、多くの国際機関や各国研究機関は、それを明らかにする義務がある。

ウイルスの変異がどこで起きたのかは、最終的には確定しようがない事柄にかかわっている。機能獲得実験から変異ウイルスが形成された場合でも、それが流出し、その後かなり大幅な変異が起きたという可能性は残る。この場合には、自然的に起こりうる変異の幅を塩基配列からおおよそ確定することはできる。そうなればウイルスの流出そのものは、「潜在的な未必の過失行為」である。

現在ウイルスの武漢研究所からの流出性の根拠になるのが、ウイルスの塩基配列から見て、自然的な突然変異ではほとんどの場合、起こり得ないような変化が起きており、それは人為的に引き起こされたものだという結論になっている。これはこれで議論として検討すべきことである。ただし前例のないことが、自然発生的に起きるのが「進化」という事態なのだから、変異の幅の可能性をどのように設定するのかという難しい問題がそこには含まれている。

今回のコロナウイルスのように、RNA ウイルスは、宿主の DNA を活用して増殖する以上、繰り返し変異する。実際にこの新型コロナでも、イギリス株、インド株のような感染力の高い変異株が、自然界で出現している。しかしながら初期段階で、このウイルスの危険性の全貌はわからなくても、新たなコロナウイルスの出現が確認された時点で、このウイルスの塩基配列を含むデータは、ただちに公表されなければならないと思われる。少なくとも今回の初期対応は、十分な科学的対応だとは考えられない。精確に、WHO を含めて、初期対応ではいくつものミスが重なっている。それによって世界史に残るほどの「事件」となった。死者数で見れば、すでに第二次世界大戦での死者数を上回っているのである。

**直線という概念** 概念的な規定をめぐって、哲学はどのような態度を取るのか。たとえば「直線」の定義では、2点間の最短距離を持ち出すことができる。2点

間を最短で結ぶことができるものは間違いなく線分であり、線分は直線の一部である。この点にはまったく異論がない。問題なのは、その先である。点と点を最短で結ぶ線は、一通りに決まるのだろうか。この問題はさらに新たな可能性を提起している。面の曲率次第では、2点間の最短距離は、ひとつに決まらなくなる。場合によっては、面が球面である場合には、たとえば北極と南極とを結ぶ最短の線は、無数に引くことができる。球面上の直線(2点間の最短線)は、大きな円であることがわかる。こうして非ユークリッド幾何学の一部に到達する。巨大な球面では、すべての平行線は交わることになる。

こうした事例にみられるのは、一つ概念を捉える場合には、より広い可能性へと開かれるように事態の局面を捉えていくことである。この場合、哲学はもはや拠点となる事態を指摘することに留まることはできない。生成する世界では、特定の拠点から抑え込むことのできる事象は、ごくわずかである。そうだとすると哲学が背負う課題は、より広い可能性へと開かれるように事象の姿を描いて見せることである。「直線」を真っ直ぐな線だとするのは、言葉そのものの直訳的な経験である。言葉から単純なイメージを受け取ってしまっている。そのため言葉を捨てるのが、哲学の大きな課題となる。

ある意味で次のように語って良い。哲学の言葉は、捨てるために学ぶのである。哲学を学び、言葉から立場や観点を身に付けたのでは、まさにそれによって経験は自在さや経験の可能性を失う。哲学の大半は、こっそりと自己防衛された知であり、立場や観点はすでに自己正当化されたものである。これを捨てて、別様の可能性を開き続けることが、哲学には求められている。そのためには哲学を志すものは、どこかで「詩人」でなければならない。言葉によって事象の経験を取る。そして言葉を捨てて、経験の側にふさわしい言葉を見出していかなければならない。

**時間、空間** より大きな問題は、時間、空間という座標軸の設定が、多くの可能性を排除することにつながっているのではないかという懸念である。時間、空間の設定は、ガリレイーニュートンタイプの科学の基本であり、カントが基礎づけ構想で、感性の基準として、時間、空間を感性の基本的なカテゴリーに指摘したことで、時間、空間は法外な基準となってしまう。もちろん「位相空間」の設定は、多くの領域で行われており、時間、空間がいわば「絶対的座標軸」ではないことは、おそらくほとんどの人はよくわかっている。

時間、空間の根強さは、むしろ測定されるデータが、時間、空間に依存していることである。時間、空間は、時として必要に応じて書き換え可能なたんなる「理論概念」であるだけでなく、測定行為のレベルで、すでに活用され、広大な実務的裾野を形成してしまっている。データは時間、空間の指標で記述することがもっとも簡便である。時間、空間に記された指標や値は、物事の影を見ている場

合の方が圧倒的に多い。位相空間に張り出された事象の像と時間、空間でのデータとの間には、なにかマトリックスの変換が必要とされるかもしれない。哲学は、物事の真偽判定において、つねにより広い可能性のなかで、真偽の条件的成立を論じる。そしてそれが同時に新たな知の出現に向けて、可能性を開くように論じていくのである。

### 3 社会哲学

世界の社会的事象では、意見が両極化する案件が多い。しかも極端に両極化するのである。たとえば通常の性とは異なる性の感触をもつものたちは、人口の1割弱程度存在する。左利きの人や血液型の AB 型と類似した統計的頻度である。自分の性への違和を感じている者でも、そのことを表明しないものの潜在数を勘案すると、実際の数的比率はもう少し高いのかもしれない。いつもマイノリティと呼ばれるが、適当な呼称ではない。こうした場合、社会的な「平等」や「公正」はどのようでありうるかを問うていかなければならない。

自由は、基本的人権として、長い戦いをつうじて獲得されてきたものである。同じように基本的人権の一つである平等や公正は、そのつど現実の内実が吟味され、調整されていかなければならない人権である。形式的な平等が、むしろ逆不平等であったり、無理な要請であることは、頻繁に起きる。またながらく見えていなかった現実が浮上ってきて、新たに平等や公正の基準を考えなければならぬことは、しばしば起きている。

**性の多型** 性のように第三者からはうかがい知れない領域での多様化は、内実の判定が難しい。形式的に多様な性や多様な婚姻関係を認めるべきだという主張は、性の領域では外から物差しを当てすぎている。たとえそれが正しいとしても、現実的な公認までは、程遠い印象が残る。社会的な生活感情から、建前では賛成であっても、祝福を籠めて賛成するところまでは程遠く、さらにこうした形式的な婚姻形態の平等化には、まさに「逆平等」の印象を捨てることができなかなり多くの人たちが、語らないまま残っているという事態が、現況に近いのだろうと思える。

「性」のあり方が多数派と異なる人たちには、一般的に同性愛者、両性愛者、トランスジェンダー（性同一性障害の当事者含む）などが含まれる。少し強調点をずらして、LGBT と呼ばれることもあるが、この語はレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの4単語の頭文字を取った造語である。中国最大の LGBT 向け社交アプリ **Blued**(ブルード)を運営する藍城兄弟ホールディングスは、2020年7月8日、アメリカの店頭市場であるナスダックに上場し、初日に総額100億円ほどの初値が付いた。このアプリの会員は上場時450万人ほど

であり、いずれ 600 万人ほどの会員を獲得できるという見込みが述べられている。統計値そのものをとれば、とても「少数者」と呼ばれるような小さな数字ではない。

国連人権高等弁務官事務所は、2011年11月17日付けで報告書を作成し、LGBTを「少数者」「マイノリティ」「弱者」として社会的に排除することなく、他の人間と同様に尊厳や権利を保障され、社会的に受容される正当性と必要性があるということを述べている。それに反してハンガリーの国会では、2021年6月15日に反LGBT法が可決された。未成年者に対して、同性愛や性転換を助長する情報を流してはいけないとする法である。EU諸国は、ただちにこのハンガリーの立法に反発し、オランダの外相は、ハンガリーはEUから出て行けと演説している。

少数者の人権を考えると、近代の価値基準である「平等」が簡単に実現できない価値規範であることにあらためて気づかされる。LGBTも同じ人間であり、差別されるべきではないという形式的主張はそれとして成立しても、実質的な平等は簡単には実現できない。多くの人にとっては、その人たちにどうかかわれば平等にかかわったことになるかが分からないからである。

平等とは、個々の問題でそのつど最善の在り方を模索する「課題」のことであり、あらかじめ保証されるべき形式的「基準」や「理念」だとは考えにくい。ここには形式的、機械的平等と、実質的な平等内容の乖離が含まれている。その乖離が、平等をめぐる課題である。そしてこの乖離は簡単には解消されはしない。こうした分析は、問題のほぐれにくさを明るみに出すものとなり、問題そのものへの哲学的な構造分析が必要とされる。たとえば性転換を行った転換後の性で、スポーツの競技会に無条件で参加できるかどうかは、かなり微妙な問題である。

生物学的に男の性のものが女性に性転換した後に、女性の資格で競技会にそのまま参加することが、スポーツ競技の公正さに整合的であるかどうかは、相当に悩ましい問題であり、課題でもある。今回の東京オリンピック(2021年)に五輪史上初めて、男性から女性への性別変更を公表したトランスジェンダーの女子選手が出場する。男性から女性に性別を変更したことを公表しているニュージーランドのローレル・ハバード(43)は、重量挙げ女子87キロ超級に出場する。ハバードは国内ジュニア記録を出した男子選手だったが、性別への違和感から選手生活をやめた。性別適合手術を受けて、2017年ごろ女子として復帰した。世界選手権に勝ち進み、五輪にはない90キロ超級で銀メダルを獲得した。だが試合に出ると批判された。実際、他国選手団から出場資格の取り消しを求められた。女性の権利を主張するニュージーランドの団体は、「男性」が女性の機会を奪っていると反批判を行った。そしてこれは簡単に解決できる問題ではなさそうである。

**性** 性の事情は、一般に入り組んでいる。多様性と組み合わせのパターンがかなり多い。たとえば沖縄で暮らすB.RとY.Fのカップルは、自称「男と男のゲイ

カップル」である。だが R は、遺伝子的には女性であり、しかも社会的には男として生きるトランスジェンダーである。R は性適合性にかかわる手術を受けていないために、日本では戸籍上の性別を変更することはできず、戸籍の上では女性である。この二人が結婚する場合には、事務处理的には異性間の結婚であり、当人間では同性婚である。当人同士には違和感の残る事態だが、お役所的には、通常の結婚である。つまり結婚届はごく普通に受理され、当人間の詳細には、お役所は一切かかわらないという基本方針が成立する。

またバイセクシャルは、両性に対して性的指向があるものであり、頻度としてはかなり多い。たとえば三島由紀夫は、通常の結婚生活をしているが、同時にゲイの男とも密会を繰り返していた。死後このパートナーが事実を公にして、生前からなにかと噂されていたことが明確になった。また美輪明宏は見た目通りのゲイで、シャンソンのライブでは怪しい美しさをばらまいていた。見ていて身体の体熱が上昇するほどの怪しい魅力で、美輪明宏の伝えるものは、通常の歌手とはまったく別様だと感じられた。

異性間の普通の婚姻関係があり、かつ妻である女性が、同性のレズビアンとの関係を繰り返していたということで、夫から法的に訴えられたことがある。この場合も、不貞の事実は法的に認定され、賠償を求められた。同性の性的関係も法的には不貞にあたる。

バイセクシャルとはモードの異なる「パンセクシャル」というモードもあるようだ。パンセクシャルは、相手のジェンダーやセクシャリティを問わずに、性的、恋愛的、感情的、身体的、精神的に好意を抱くことだとされている。パンセクシャルは、トランスジェンダーの人などにも魅力を感じるということを公開していることが多く、見かけ上は何でもありである。

だが当人の愛のモードに繊細な違いがあるのかどうか不明である。このあたりのことは、ほとんど明るみに出てこない。性の領域は、基本的に第三者には隠された領域である。その領域が多様化していると、言われている。事態は入り組んでおり、社会的対応にもまだまだ困惑するような準備不足がある。たとえばラブホテルは、男同士の入室は NG で、女同士だと OK だという店舗が多いようである。ホテル従業員にも何故だかわからないが、それでもどこか薄々「そうなんだ」と察せられる。最も身近には、電車の末尾に指定されることが多い「女性専用車両」である。バイセクシャルの人は、この車両も利用できるのだろうか。性に対して限定的に使用可能性を認めると、かなり多くの例外条項が付くことになる。その限定を無条件に外してしまえば、公園のトイレの男女区別も怪しくなる。

それに比べれば法的問題は、第三者的に公開される以上、いくぶんか明確である。最も明示的になるのが、「同性婚」の法的認定の問題である。「同性のパートナーシップ」はすでに認められているが、これは同性の同居暮らしを社会的に公

認するという内容である。同性の同居という程度であれば、さまざまな形態はあるが、従来からも広く認められてきている。兄弟や近親者が一緒に住むという同居は、別段珍しいことではない。ごく親しい知人が同居することも珍しいことではない。

かりに性的により近い関係だとしても、同性の同居程度では、ありふれている印象である。固有の性的関係のパートナーであることの公的認定が行われたとしても、それほどの違和感はない。2015年に東京都渋谷区と世田谷区で同性パートナーシップ制度が始まり、日本にも「同性カップル」という生活スタイルがあることが公的に認定された。この制度は全国各地へと広がり、21年5月現在105自治体で導入されている。だがここにはいまだ「婚姻関係」に見られるような法的な保証はない。

2019年には、全国5つの地方裁判所で、同性婚を認めない現行の民法を違憲とし、国に「立法不作為」に対する慰謝料を請求する訴訟が一斉に提起された。これまでも同性カップルへの法的保護を求める訴訟は何件か起こされているが、付帯的な利害にかかわるものである。たとえば日本人の外国人同性パートナーの在留資格はどうなるのか、犯罪被害者給付金受給資格はどうなるのか、パートナーを喪った場合の同性パートナーからその親族に対する財産引渡請求はどの程度保証されるのか、同性婚の破綻を招いた慰謝料請求はどうなるのか。おそらく社会実験と呼べるほどのさまざまな事態がしばらくは続くことになる。

最初の一審判決は2021年3月17日に、札幌地裁で言い渡されている。同性カップルに法的保護を一切与えない現行の民法を、憲法14条に反すると判断している。立法不作為の違法にもとづく慰謝料請求については、棄却されている。この訴訟は民法の改正を促し、最終的には同性婚ができるように、法的規範を変えることを目的とした「制度形成型訴訟」である。これじたいは実質的な第一歩である。ここには憲法判断が含まれるために、最終的には最高裁の判断を仰ぐことになる。日本では、現在係争中の案件である。

同性婚を異性婚と同様に法的に補償することは、法の下での平等の原則に合っている。多様性への法的なバックアップがあってもよいということは、ごく自然な社会感情でもある。だがそれでもすんなりとはいかない。おそらくここにはいくつもの理由がある。

同性婚の形式的な法的平等を認める場合でも、同性婚の人たちも、ごく普通の社会人であるというようには、ただちには感じられない。やはり異質な人たちだという思いを抱く人も多いと感じられる。これは法的平等と平均的な社会感情との乖離である。もっとも単純には、たとえばある母親が、近所の知り合いに、「私の娘は、渋谷で同性婚をしているのです」とおおらかに話すことは、かなり難しいと予想される。

通常の異性結婚では、やがて子供が生まれ、子供同士の近隣関係も形成され、学校関係での新たなネットワークも形成される。そこに社会資源が投入される。資源には限りがあるので、有効な社会発展のために資源の配分が決められることはやむをえない。こうした社会そのものの持続的な継続と発展のイメージを、同性婚について描くことはなかなか難しい。民法での法的保護については、社会の持続と発展との連動関係をまったく抜きにすることは困難である。ここには法的保護と、社会資源の配分との間の乖離がある。たとえば行政的には、「少子化対策」はさまざまなかたちで講じられている。そうした努力への思いと、同性婚の正当性の認定を、すっきりと整合化させることは容易ではない。

法的な権利は、個々人の人権の擁護が、すべての人に妥当するように設定される。法は万人にとっての法である。ここには個人と普遍的共同体(世界人類)が同じ規則で律せられるという大前提がある。だが二人関係や婚姻関係は、法的な個人の人権や普遍的規則になじむ領域であるのか、あるいは個一普遍というラインと、二人関係は、同じラインにあるのかどうかという疑問がある。かつて吉本隆明が、『共同幻想論』で、「共同幻想」(法、儀礼、慣習)と「個人幻想」(個々人の思い)と対置して、「対幻想」(二人関係)を設定したとき、「共同幻想」と「個人幻想」は変換可能性をもつが、「対幻想」はいずれに対しても変換可能性がないと感じられた。対幻想と、共同幻想—個人幻想ラインとは、構造的な落差があり、乖離以上の深い溝がある。

同性婚に対して多様性の擁護という点で、民法上の権利を認めることと、現実の社会内で上記のような乖離が存在し続けることは、二つの別系列の現実性である。同性婚が法的に保護され認定されることと、同時に乖離そのものは消滅することなく残り続けるという事態が、現在のこの問題の現況のように思われる。そしてこうした二重性を含んだままの現実性をおおらかに引き受けていくしかないように思われる。さらにこの二重性そのものの関わり合いは変化しつづけることも、引き受けるよりないのである。

そのとき同性婚の当事者が、法的に保護・認定を受けたという理由で、同性婚も異性婚とすべての点で対等であると述べることには、やはり過度な自己主張が含まれることになり、他方、多くの異性婚のものたちが、乖離そのものを固定化することも、過度な自己主張となる。そしてこうした過度な自己主張の姿が、両極化である。こうした両極化は、問題を固定化し、拗らせてしまう。二重の現実の宙吊りにされた流動化やプロセスのなかで事象に寄り添うことによって、事態の改善は少し見通しが開けてくる。社会哲学、実践哲学の課題は、普遍的な人間の本性を明るみに出すだけに留まることはできない。社会が流動する以上、人間そのものも変わってしまう。そのときベターな選択肢は何であり、ベターな選択はどのようなものでありうるかに、哲学の力点は移動する。伝統的な哲学は、ベ

ストな解答を求めてきたが、力点の変更が必要となっている。

**異質なシステム** 世界の現実を広げてみたとき、しばしば異質なシステムが出現し、現在でも出現し続けている。現時点で、際立った姿を現しているのが、おそらく「チャイナ・システム」である。そしてこのシステムの特異さは、システム内部に含まれたある種の捩れに起因しているように思われる。中国共産党は、選挙によって選ばれたものではなく、その正当性は、現実の世界で、有効に機能していることによってしか保証されない。自然条件では、干ばつも地震も想定外の大雨もあり、すべてがうまく行く政権の運営は、ありえないことである。その場合、自然災害への対応の有効性によって、政権の評価は分かれてくる。

だが中国共産党は、ここ数年「中華民族の復興」や「中華民族の夢」を語り、そこへと向かう姿を見せることによって、自分自身の正当性を示し続けようとしているように見える。愛国心を呼び覚まし、愛国心が自分自身の正当性を支えてくれるかのような方向づけをあたえているのである。

「中華民族」そのものは、19世紀末頃に作られた造語であり、実質的には漢民族のことである。それによって漢民族は、ウイグル族、チベット族、満州族、モンゴル族を制覇、統合していかなければならないことになる。中華民族の発展を支え、それを実現していくものこそ、中国共産党であることになる。そしてこの前進過程が、同時に中国共産党の正当性の証である。

中国国内には小さな単位を含めれば、56の民族が暮らす多民族国家である。多民族国家では、通常緩やかな連邦制を採用することが、制度的な適合性が高い。だがかりにそうした選択をすれば、中国共産党をささえる理由はほとんどなくなってしまう。鄧小平によれば、共産党とは内戦を避けるための「必要悪」でもある。中国という国の国家建設において、必要悪と中華民族の夢の実現との間には、埋めようのない隔たりがある。こうした国内の内部の軋みそのものは、消滅することはないが、眼を逸らすことはできる。眼を逸らすための持っていき場、それが「中華民族の夢」である。

対外的には、中国は国際協調したほうが良いに決まっている。そして中国そのものも、現状のさまざまな挙動をつうじて、国際協調した気ではいると思われる。それが世界中のいたるところで問題を引き起こしている。そこに大きな捩れがある。その理由は、かなり簡単などころにあると思われる。

中国の挙動は、国家間の協力的な発展だけではなく、同時に中国共産党の正当性を高めるものでなければならない。中国共産党の正当性を高め、かつ国際的な中国の評価を高めるという二重の課題に対応しなければならない。これが中国の抱えている現状である。

その場合、たとえば外国からの中国への評価や注文や課題設定は、たとえば中国への方向付けの有効な選択の提案であっても、中国共産党への批判になってし



まう。少なくとも中国にはそのように受け取られてしまう構造的な建付けがある。中国共産党の自己正当化と国際的な協調は、別枠の二重の課題であって、ただちに整合化できるものばかりではない。実際に整合化できないことも多い。ここに中国の振れと歪みがある。中国は、国家間の協調において、関係国それぞれの利益を最大化するように振舞うだけではなく、同時にそれが中国共産党の自己正当化を図るものでなければならない。そしてそのためには国内向けの発信と国際向けの発信を二重に使い分けなければならない。これではすでに構造的に無理な仕組みを援用していることになる。

世界各国、地域で見られる中国政府への批判的申し入れは、中国共産党への攻撃だとうつり、中国共産党は、過度に反応する。その場合、中国は、政府機関、政府機関の実行者、政府機関内での個別的、各レベルでの対応の選択肢を活用せず、中国共産党の正当化と維持のために個々の選択肢を飛び越えて、一挙に相手を過度に攻撃するのである。そしてそうした戦い方を「戦狼」だと自他ともに認証している。

2021 年にも小さくない事件が起きた。2020 年末に EU 中国間で大筋合意に至った投資協定 (EU-China Comprehensive Agreement on Investment) について、EU 議会は最終合意に向けた審議を停止する決定を下した。

この投資協定は EU と中国間で 2014 年にスタートし、7 年間続いていた大型の投資協定である。2021 年 3 月 22 日、EU 外相理事会は、中国の新疆ウイグル自治区における人権侵害を批判し、同自治区関係者に対する制裁措置を採択した。制裁の内容は EU 域内への渡航禁止、EU 内の資産凍結などであり、対象は新疆ウイグル自治区の公安局長、同自治区党委員会幹部、同元幹部、新疆生産建設兵団の党事務局長の 4 人および新疆生産建設兵団公安局の 1 組織である。基本的にはグローバル・マグニツキー法に沿うような制裁措置である。

これに対して、中国政府は同日、これに対する報復措置として中国への入国禁止などを含む EU 制裁を発動した。対象は、5 人の欧州議会議員、オランダ国会議員、ベルギー連邦議会議員、リトアニア国会議員、ドイツおよびスウェーデンの学者など計 10 人に加え、欧州理事会政治・安全保障委員会、欧州議会人権問題分科会、ドイツのメルカトル中国研究所、デンマークの民主主義アライアンス財団の 4 組織である。

EU 側の制裁が新疆ウイグル自治区の地方政府関係者を対象とする限定的な内容だったのに対し、中国側の報復措置は、EU 全体を代表する政治家、専門家および重要組織が対象となっている。EU の制裁は、新疆ウイグル自治区での人権侵害の実行者と責任者だけに限られている。ところが中国からの対抗措置は、EU 議会そのものの主要なメンバーに及んでいる。事務的にも実務的にも、詳細な区分が働かず、外見は過剰報復である。これを受けて、EU 議会は、2021 年 5 月 20

日に、すでに大筋合意に達し、現在批准に向けて詳細項目について審議中だった「投資協定」について、審議を凍結することを可決した。

中国には、行政的な細かな選択肢がなく、外からの批判や制裁があれば、基本的には中国共産党へと向けられた批判だとする「制度的な直結性もしくは硬直性」がある。中国共産党の信頼を揺るがすものは、その批判をもたらす機関全体への報復になってしまう。中国の過剰報復は、中国国内の制度的な特質である硬直性を反映して、ほとんどの場合、筋違いになってしまう。

中国は、長期的に EU と密接な関係を形成することで、中国-EU 連合体として、アメリカに対峙していくという計画をもっていた。だが中国発のパンデミックによって、イタリア、フランス、ドイツ、イギリスはことごとく困惑するような事態に巻き込まれ、中国との距離感をリセットしなければならない局面に来ていた。リセットのための臨界点があり、その臨界に近づいていたというのが実情である。

また尖閣諸島周辺に出入りする中国海警局の船には、準軍事的な設備、装備が備わっている。海警局と海軍の区別がほとんどなくなっている。これは基本的には海洋にかかわる国際法と整合的だとは言えなくなる。攻撃能力を備えた船が、漁船を取り締まるのである。日本の海上保安庁の船舶も、最低限の防衛能力は備えている。北朝鮮船舶のように、銃器を備えた漁船に対応するためのものであり、警官が防衛のために拳銃を携帯していることと同様である。だがこれは警備船であり、戦いのために設計された軍艦とは質が異なる。

こうした事態に正当化をあたえているものがあるとすれば、中国共産党の言う「核心的利益」である。尖閣諸島が中国の核心的利益だとするのは、中国共産党が言っていることである。他のどの国によっても認められていない。それを中国の当然の要求だとするのが、中国共産党の自己正当化の試みの一つである。ここに乖離があるとすれば、共産党内部の自己正当化ならびに自己正統化の企てと、国際協調との間である。

一般に疑似閉鎖組織の自己正当化の試みと、外的集団(国家、民族、部族、組織)とのかかわりが整合化されることは、容易ではない。その理由の一つは、疑似閉鎖組織は自分自身の選択肢を拡張することができず、他面外的集団とのかかわりでは、選択肢を否応なく拡張せざるを得ないことにある。ここではチャイナ・システムの方程式の組み換えが必要だと思える。そのとき定数となっている中国共産党の自己正当化を、変数に置き代えてしまうことが必要となる。

おそらく中国共産党は、自己正当化された自己維持に必死でもある。2021年7月初旬に開催された中国共産党100周年祝賀の習近平の演説は、「党を裏切るな」で代表される。これは切りつづめれば、習にとって「自分を裏切るな」と言っていることと同じである。そう言わなければ維持できないほどの脆弱さを内部に抱

えた組織、それが中国共産党である。

**ファイヤーウォール** こうしたことの表面的な特徴は、中国政府による情報発信に見られる。中国の情報制御は、二重の機能を帯びている。情報の伝達以外に、情報をどのように政治的に活用するのかという点で、典型的なデュアル・ユースが実行されている。一番見えやすいのは、自分に都合の悪い情報は、すべて間違いだといい、燃やして無くしてしまい、他面では自分の都合の良いように別情報を流し続ける。ここに「情報の壁」が作られている。ベルリンの壁に匹敵する「北京の情報の壁」である。一般には「ファイヤーウォール」と呼ばれる。

ファイヤーウォールは、情報に非対称性を作り、国内向けの共産党の顔と、外国向けの共産党の顔を使い分け、必要に応じてデマ宣伝を行い、国内向けには「愛国映画」「戦狼」を流し、現実と虚構の間の境界を取り払うのである。この情報の非対称性は、中国共産党の自己正当化と外的な協調との軋みや振れを、別の手段で補償するのである。見かけ上は、アクセルとブレーキを同時に踏むことに近い。このとき言葉がどこに向けられた言葉であるのか、言葉の内実のどこに非対称性が含まれているのかを問うてみればよい。

中国共産党には、「北京文法」とでも呼ぶべき独特の語りのモードがある。日本の国会の官僚答弁でしばしば現れることだが、日本の官庁には「霞ケ関文法」がある。同じ日本語であるはずなのに、まったく別の語の活用を行う特異な文法である。特異さにかんしては、中国の「北京文法」は、霞ケ関文法をはるかにしのいでいると思われる。そこにはいくつもの特徴がある。際立ったものだけ取り出してみる。

(1) 大きな話をして焦点をずらす。新型コロナウイルスが、主要には武漢から拡散し始めたことは、間違いなく事実である。そして初期の感染状況について細かな調査と報告が必要な世界史的イベントであることも事実である。そのことを中国はまったく認めようとしない。その話が出れば、管制報道官はまちがいなく、中国は世界各国にマスクや医療用具を送り、人類運命共同体の健康維持に貢献してきたという。医療品が不足しているところに送ることは、人道的対応であり、国境を超えた思いやりである。そのこととウイルス拡散の初期に何が起きたのかを調べることは、まったく別の課題である。かりに習近平の言う「人類運命共同体」がより善良なものであろうとすれば、「ウイルス拡散の初期状況の調査」は、あきらかに貢献度は高い。「初期状況調査」と「人類運命共同体の促進」は、両立するだけでなく、むしろ不可欠の要素でもある。長期的には、この二つの課題を同時に取り組んだ方が、中国の国際評価を高めることに資するはずである。その課題に対して、短期的な言葉のやり取りで事態を抑えようとしている。

(2) 肯定しても否定しても意味がない。南シナ海は、2000年前から中国の領海だと言っている場合がそれにあたる。言葉で言うことによって、肯定も否定も意

味のない領域を作り出す。そしてそこに実効的に制御される現実性を作り出すのである。それは半面、「言葉で言うことが、そのまま事実である」という内容となる。尖閣諸島の周辺の岩や窪みに、中国は中国語で勝手に名称を付けたことがある。自分で最初に名前を付けたものが、最初の所有者であることを言っているのだろうか。たしかにルソーは『不平等起源論』でそんなことを述べていた。それはある意味、不平等の出現の開始なのである。

(3) 言葉の多重活用 こういう社会神経症性の言葉には、隠しておきたい言葉があるというのが実情である。「普遍的価値」「報道の自由」「市民社会」「市民の権利」「共産党の歴史的誤り」「特権資産階級」「司法の独立」という7つの言葉を記事や論文などで使ってはならないという党中央からの指示がなされているという報道がある。いわゆる「敏感ワード」と呼ばれるもので、ネット上に流れれば、ただちに検閲にひっかかり消されてしまう。これは国内向けの対応である。ところが海外向けには、「人類運命共同体」を持ち出すのである。一方では、海外向けに度を越した過激な表現を用いる。それらの多くは、管制戦狼外交報道官趙立堅によって発信されている。海外向けに発信されているように見えながら、これらの言語は、中国の立場を国内向けに流し続け、「愛国心」を擽ってもいる。

(4) 言語明瞭、意味不明瞭 アメリカから圧力をかけられて以降、中国は言葉での仲裁を求めている。王毅外相は「衝突せず、対抗せず、相互尊重」と機会に応じて公式に述べている。王毅は政府側の外務大臣であるから、実質的には副大臣である。党側の外交の代表は、楊潔篪であり、中共中央政治局25名のうちの一人である。政治局常務委員が、チャイナセブンである。王毅は一方で、米中関係をめぐっては「協力こそが最良の選択肢だ」とも言う。言葉は明確である。だが意味が不明なのである。中国式「協力」とは何を意味しているのか。中国式「相互尊重」とは何を意味するのか。これらの言葉は、実質的な内容の決まらない言葉である。

つねに言葉の意味を、自分の都合の良い様に捻じ曲げながら活用している。言葉に付き纏う自己自身への過大評価、それこそ「中華民族の夢」に含まれているものである。王毅外相の言葉は、党内向け、国内向けの言葉であり、それは相手に何かを伝えるための言葉になっていない。

これだけ言葉を作為的に活用できるのであれば、国際的な標準的語感と自国内の愛国的語感を使い分けた方がまだよい。そしてそうした方向へとそのつど対話をつうじて誘導することが必要となる。チャイナ・システムに有効にかかわろうとするなら、個々の場面で、中国の当事者が現状においてまだ多くの選択肢があるのだということを、そのつど感じられるように折衝していくしかない。そしてそのための選択肢の提示を、哲学は行うことができる。問題のあるシステムは、構造的に内的な選択肢が不足している仕組みになっていることが多い。その選択

肢を広げるような提案と方向付けを示すことは、社会哲学でのシステム・デザインの課題でもある。

## 4 制作哲学

哲学の大きな貢献の一つが、現実に対して、より広い選択肢のもとで、現実を捉えることであり、社会的な問題においては、より良い選択肢を提示することである。ベターな選択に向けての道筋を示すことができれば、後にはそのことの意味や意義を説明することはできる。

さらに芸術領域での課題は、芸術作品をどのように鑑賞するかという課題に、もはや留まることはできず、どのような作品において、どのように経験の可動域が広がり、経験の可能性が拡張され、新たな現実へとつながっていきうるかという課題が主要テーマとなる。これはとりもなおさず「制作行為」の課題である。

しかし哲学者が、制作の実技を見に付け、制作を実行することはできるのだろうか。当然無理に決まっている。そんなことはできはしない。かりにできるのであれば、哲学者を返上して、アーティストになったほうがよい。

そうであっても、個々の現場での場数を踏み、制作者と共に、アイデアを出し、制作のコーディネータとして、制作者と共に連動的に経験を積み上げることにはできる。この「コーディネータとしての哲学の仕事」は、制作者と共に制作のプロセスのさなかにあること、そのプロセスのなかにあって、時に応じてさまざまなアイデアを出すことができること、そしてそこから制作が進み、制作物が作られたとき、そのことの意味をできるだけ普遍的に語ることの手掛かりを提供することになる。実質的には、アーティストに対して、「評論家」の位置だけは取らないことが重要である。

アーティストとのコラボとは、口当たりのよい言葉である。しかしこんなことは本当にできるのか。アーティストにとっても有用な能力を備えていない限り、そもそもアーティストに必要とされてはいない。ただの評論家では、アーティストにとっては、いわば「大きなお世話」であり、「お邪魔虫」であり、「足手まとい」であり、見学が終わればさっさと退散すべきものたちである。どのような哲学者にとっても、訓練が必要な場面がある。アーティスト自身にとって必要とされるのでなければ、そもそもコーディネータにもなれず、アーティストとのコラボとは、一つの夢で終わってしまう。アーティストとのかかわりは、哲学者にとって、つねに「一つの実験」なのである。

まず哲学にとって必要だと考えられること。アーティストとの作業で、多くの場合、アーティストにとって必要だと感じられているのは、アーティストがそのつど必要とする課題に対して、対応する応答をおこなうことができるほどの膨大

な知識と、引き出しをもっているパートナーであることだ。アーティストは、作品を作るのが仕事であり、自分で勉強しているのではない。少なくとも勉強すれば、良い作品を作ることができるなどと露も信じていないのがアーティストである。知識を捨てるからこそ創造的であることを良く知っているのもアーティストである。

もちろん例外もある。典型的には、レオナルド・ダ・ヴィンチである。歴史の不連続点になるほどの天才的な描き手であるが、ダ・ヴィンチには絵画を学問として作り上げようとする終わりのないような野心と、絵を描くためには、自然の仕組みを自分で見出していかなければならないという根本的な確信があった。

画家は、言葉から学ぶのではなく、自然から学ばなければならない。だが同時代に利用できるアリストテレス自然学は、ほとんど使い物にならないと感じていた。そうなれば、自分で自然学も形成しなければならなかった。そこで自分で膨大な勉強をすることにして、それをことごとくデッサンと文章で書き残したのである。これが「ダ・ヴィンチの草稿」と呼ばれるもので、信じられないほどの分量が残されている。先行する時代の著作から抜き出してきた部分も多く含まれている。およそ美術史家からすると、こんなことをやって時間をつぶしたのかと、うんざりするような草稿群である。

もちろんそれらの草稿は、アリストテレス自然学のように、概念的配置によって入り組んだ形で整理されたものではなく、また近代科学のように法則を見出すようなものでもなかった。ただいたるところでダ・ヴィンチにしか見えなかったような事柄が書き込まれている。同時代にはおそらく探したとしても、相談できるほどのパートナーはいなかった。そこで描き手と、哲学者・科学者を重ねて、一人で実行したのである。これは間違いなく歴史の不連続点である。

ダ・ヴィンチはいくつか特異な仕組みも構想した。たとえば運動を捉える場合、デッサンで描けば、運動のある局面での切り取りにしかならない。これはどのようにうまくやってもそういうふうにはしかならない事柄である。その局面に運動の前後のイメージや動きのイメージを同時に感じさせるように運動そのものの切り取りを行う技術は、ダ・ヴィンチには卓越したものがあつた。それは並外れたデッサン力によるものである。ところがそれと同時に文章では、運動を相互作用で説明するように記述を行っている。二重の観点で、デッサンと文章を相互補完的に配置している。

これはおそらく運動の記述についての新たな試みだった。運動の記述は、一般的には最終的に完結したものにはならない。ある一面的な切り取りを行うと、運動の一部しか描くことができない。運動の一部を、局面を変えて繰り返し描き、それを連ねると、静止画像がたくさん連なる。しかしそれはアニメと同じで、運動そのものとは別のものだということになる。これがベルクソンの言い分である。

近代科学のように、運動を出発点と到達点で描けば、進行中の運動やプロセスとしての運動は描かれないままになる。そこで運動とは、「それじたいの自己への自己差異化」だと言葉を代えて言ってみたくなる。だがこの言葉が現実化される見込みはほぼない。自己差異化には、位置の移動や、質変化や起滅(出現と消滅)も含まれはらずだが、多くの変化のモードを「自己差異化」から導くことができないのである。こういう「自己差異化」という語は、大問題を別の大問題で置き換えていくようなところがあり、事態そのものはほとんど変わっていない。

ダ・ヴィンチが、こういう難問にかかわった様子はまったくない。だが結果として、運動という難題に対して、一つの解答の方向を示すことになった。ある動作の断片を切り取るように描くことは、同時に前後の運動の推移のイメージをその断片に込めることでもある。あるいは見えない全体的な運動をある断片で描くのである。それと同時に全体のバランスの維持や調整を言葉で力学的に描く。鳥の飛翔については、身体の傾きやバランス維持を空気との相互作用で描くのである。これを二本立てのように描くことが、現実の運動するものに対して、最も有効なやり方だと直示したのが、ダ・ヴィンチ的の科学であった。

物の運動を科学的に描こうとすれば、限界に当たっていた。そのことは、運動がそれじたいの本性として継続するものであること(運動の慣性性)と、運動にはその物以外の物との相互作用がつねに伴うという、二つの内実が含まれていたことによる。そしてこの二つ(運動の慣性性と相互作用)は、一方を他方に解消することも、統合することもできない。

相互作用だけから運動の理由付けを行っていたのが、アリストテレスである。他方運動の多様性の出現を運動だけから導くことは、かなり無理がある。つまり運動は、二重の視点を折り合わせるように描くしかないのが実情である。宇宙空間で、運動だけから物の位置指定を行うことができるが、その場合には相互作用が測定誤差以内にとどまるからである。ダ・ヴィンチが企てたのは、運動の断片をデッサンで描くことによって運動の進行と躍動の姿をイメージとして描くことであり、同時に相互作用を言葉で記述していくことであった。約 500 年も前に、こんなやり方を構想して展開していたのである。ダ・ヴィンチの場合、パートナーと言えるほどの友人は周囲にはいなかった。そこでほぼ独学でこうした仕組みを編み出したのである。

ほとんどのアーティストは、ダ・ヴィンチのようなことはできはしない。そんなときアーティストの周囲にいて、必要に応じて、必要なアイディアの提供と、相談に乗るのに相応しいやり取りができれば、特殊な位置を占めることができる。それはアーティストの創造的な作業の「触媒」として位置である。哲学者がかりに「触媒」としての位置を占めることができれば、それは十分創造的な仕事になっている。だが場数を踏み、ほぼ毎日膨大な勉強をしているのでなければ、「触

媒」の役割を担うことは難しい。触媒とは、知人や友人とは異なる訓練を経た人のことである。また触媒は、いつ触媒としての機能が発揮されることになるのか分からない。偶然のきっかけも大きいと思われる。

ニューヨーク在住で2010年に死去した荒川修作の触媒は、間違いなくマドリン・ギンズだった。マドリンは、広報活動でも、経済的活動支援でも荒川修作を支えていたが、本人自身が詩人であり、多くの本を読み、聞き手としては十分な能力があった。荒川の話聞き、マドリンは自分が面白いと思う方向に誘導するように聞くことができた。荒川修作の場合には、ニューヨークで研究会を開き、月に一度程度テーマを決めて、ともかくなんでも話してみるという研究会をやっていた。

その研究会の成果を部分的にまとめて著作にしたのが、『意味のメカニズム』である。この研究会には、分析哲学者のアーサー・ダントや進化学者のJ.S.グールド、『妻を帽子と間違えた男』で広く知られているオリバー・サックスのような才人、奇人も参加しており、やはり当時のニューヨークは別格だった。その研究会には、多様な触媒が参加していたのである。哲学者は、多くの場合自己主張が強く、分かったようなことをいいたがる本性をもっている。荒川修作は、ダントを微調整のためのアドバイザーとして活用していた節がある。『死なないために』というようなタイプの「次元を超えた主張」をするさいには、ダントに「これで大丈夫か」というような相談を持ち掛けていた。ダントがぎりぎり大丈夫だと言ってくれれば、荒川はそれで前に進むことができた。哲学者は、社会常識の限界のランドマークでもあった。アーティストのことだから社会通念の境界を超えてしまいたいという誘惑に駆られることはしばしばあっただろうと思う。そこまでやってしまえば、「伝説」として名前が残るだけである。歴史上に名前の残る建築家は、多くの場合、設計とデザインだけが残り、実際の建築は実行されないまま、付帯する事柄がいくぶん誇張された「物語」として残ることになる。そうした場面で、荒川修作は、言論や表現の内実とは裏腹に、どこかユーモアに富んだ「常識人」だった。

三鷹に「天命反転住宅」(通称ミタカロフト)という建物がある。住宅地に立っているマンションだが、住宅地のなかの異物という風情である。荒川は、この構想を多くの自治体に申し入れて、建築支援を頼み込む作業を数年にわたって行っていた。多くの自治体は、面白い企画なのだが、複数の企画と比較したとき、最終候補として決定することはできないと伝えていた。そんなとき荒川は、驚くほど相手の言い分を丁寧に聞いていた。そしてこの構想が自治体の企画としては容易には成立しないことを覚悟すると、東京に株式会社を作り、株式会社の私的な企画として実行した。

荒川周作が私に何度も話していたことがある。イタリアの財団から招待を受け、



一年間ノルマのない形でイタリアに滞在してほしいという打診があり、荒川はそれを引き受けて滞在していたことがある。財団の方から、何か希望があるかというという問い合わせがあり、荒川は「ダ・ヴィンチの遺稿を読みたい」と答えている。できるだけ遺稿を英語にしてほしいという要望も付け加えている。時間をみて草稿を読み進めて行くうちに、荒川はダ・ヴィンチの「生命を作る」というメモ風の言葉に触れた。荒川は、「これだ、同じことを考えていたのだ」という確信に近い思いを抱いたと語っている。アーティストによる制作の触媒として、何が機能するのかは、本当のところよくわからない。アーティストにとって、おのずと触媒になっていくような人たちが周囲に残っていくということは起きうることである。だがどうしてそうなるのかは、アーティストにとっても、触媒になった本人にとっても、分からないままなのである。

## 5 健康のための哲学

健康とは、医学的に病気や疾患のないことではなく、本人自身が存分に能力を発揮できる状態のことである。これは何度も繰り返し微調整を行わなければ到達できず、維持することもできない状態である。たとえば中枢性疾患である脳卒中や脳梗塞では、どのようにリハビリを行っても元の状態に戻ることは難しい。医学的な治療は、病気になる以前の状態にまで戻すことを繰り返し試みる。それが建前上の医学の基本だからである。ところがほとんどの場合、一定幅の改善が見られたところで壁に当たってしまう。そのときその状態でもなお本人の最大の能力の発揮の仕方を考えていくような、「能力開発プログラム」があると考えられる。これは病前に戻すのではなく、現にある条件下で、本人が最大限に力を発揮できるようにするためのプログラムである。この場合、病態とは一つの個性であり、個性は繰り返し個体化することによって形成される以上、個体は自分の能力を最大限発揮する方向で形成されるものとなる。こうした健康状態へと繰り返し方向付け、誘導することは、哲学の課題領域として設定して良いと思われる。これによってリハビリの視野と選択肢を拡張していくのである。

精神疾患の場合も、精神疾患を治すというより、その状態でもっとも有効で、本人の可能性を展開させるような方向に引っ張ったほうが良い場合が多い。職業柄、軽度の疾患に苦しむ学生の相談を受けることはしばしばある。ときとして哲学に適応できない学生もやってくる。そうした学生は、研究室に入ると、哲学そのものや哲学教員に対して猛烈な反論、異論を繰り出すことがある。その議論のあまりの激しさに研究室の外側の窓が振動しているほどであった。

こんなときには発言の意味を理解し、それに相槌を打ったり、思いに共感してはダメである。もちろん反論には何の意味もない。というのも本人は議論しよう

としているのではないのである。本人は、潜在的には何とか自分自身の状態を変えたいと感じている。その表層の姿が大演説である。そして大演説してしまう自分自身を変えたいと願っている。

経験の局面を変え、別の局面が出現するような言葉を発しなければならぬ。30分ほどの学生の大演説の後、一区切りが付いたと思えるタイミングがあった。そのとき本人の名前を挙げて、「セント・ナオコ(仮)だよ」と呟いてみた。この学生は5分ほどのままで時間が停止するような沈黙の後、大粒の涙を流し、涙と鼻水が止まらなくなり、打って変わってゆっくりと静かに自分自身の幼少期からのことを語り始めた。本人の思いの籠った大演説に対して、比喩的に「セント・ナオコ」という語を当てて、別局面を出現させようとしたのである。ここでは比喩を、経験の運動局面を転換するための手法として活用している。

統合失調症系の人達のなかには、軽度であれば、不連続なほどの極端な局面を出現させるものがある。ある人は、自分の手がおかしいという訴えをする。「どれが自分の手ですか」と聞くと、私の腕を指して、「それが自分の手だ」と言う。私が自分の手を挙げると、「それこそ自分の手の動きだ」と言う。主体とその属性との間に、何か変異が起きており、私の腕という場合の、私「の」という所有格のあたりに変異が起きている印象である。

その人物は、そういう局面に経験が入り込むことがあり、そこを一度通過すると、3週間とか一月とかは、通常のIT技術者として、しかも有能な技術者として勤務することができる、と言う。ということは、経験の動きになかに、比喩的には複数の「鞍点」のようなものがあり、時々別の鞍点に移動するが、そこを通過するとまた有能な社会人として有効に経験を作動させることができる。

鞍点とは駱駝の背のこぶの谷間のようなもので、最高であり最低でもあるような起伏のなかの谷間のようなものである。なにかのきっかけで別の鞍点に入り込んでしまい、自力では鞍点から峠を越すことができない。そういう状態は、本人の自己治癒の努力の結果出現してきたと仮説的に考えることができる。そうなることを通過することが時々必要とされ、かつ事態を深刻化させず、有効に通り過ぎればよいことになる。そのため本人と私とで、「西城秀樹」と「野口五郎」に仮託して、デュエットで歌を歌い、経験の動きの局面を別様なかたちで通過させれば、再度峠を越えて、通常の場合に移動することもできる。経験の運動性の動きの選択肢を増やしていくのである。

高村幸太郎夫人の千恵子は、夜中に家を飛び出して、山の中腹から「東京市民よ、よく聞け」という絶叫的な演説を行っていたことが知られている。こうした鞍点に入り込むことは、しばしば起きる。そしてそれを止めたり、治したりすることが有効であるとは思えないのである。ある意味で時として起きる精神の発作のようなものだから、その回路をひとたび通過すれば、また通常の日常に戻って

いく。ある意味で平均的な成人以上に多様な経験をしていると言っても良い。全体的な知能低下を招かないのであれば、さまざまなかたちで精神のバランスを取るプロセスの一つだと考えても良い。こうした場面では本人の選択肢を広げ、最も本人の能力が発揮しやすい場所を探り当てるような作業が必要だと思える。

原則的に考えれば、本人の選択肢を増やしてあげることが、同時に本人の能力を発揮できるような場所を探り当てる作業である。ただし個々の場面では、あまりにも多様な課題であり、そのつどの場面で試行錯誤が必要となる。

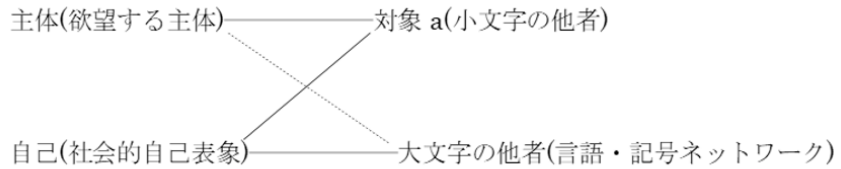
多くの場面で出くわすのが、本人の自己治癒の努力が、事態を振らせてほぐれにくくしてしまい、本人自身をさらに苦しめている場合である。たとえば兄弟間で起きている問題を、個人の問題に帰着したり、普遍的な社会的問題にすり替えようとして、さらに事態をこじらせてしまうような場面である。伝統的に神経症と呼ばれてきた社会的適合不全の問題は、本人自身の自己評価と社会からの評価のずれを埋める手立てを本人が必死で講じたために、ずれが解消されるのではなく、むしろ逆に本人に過剰な負荷のかかった状態だと考えることができる。哲学科の教員のなかにもときどき出現する。「自分は世界一哲学ができる」と本人だけで自称しながら、それに見合う評価が得られていないことに不満を持つような場合である。世界一哲学ができると自称する人についての社会的評価が、どのようなものになるかは、察しは付く。実際に字義通りの評価はとても無理である。この時生じているのは、個体の自己規定と社会的な自己規定の間の解消しにくいギャップである。

ここ数年、哲学を志す学生に、「神」を知りたいと訴える学生が増えたように思う。これは宗教的信仰ではない。信仰をもつ人は、すでに神とともに、神の下で生きている。ある意味で自分自身の経験を神が貫いているとも、経験に神が浸透しているとも言ってもよい。ところが多くの学生は、「神」を知りたいのである。神を知ることと、それとともに生きることは、まったく別の事である。超越という経験を求めているのか、ただの自分自身を律する物語を必要としているのか、それとも有限な自分自身とは異なる無限なものへのあこがれなのか、さまざま動機がありそうである。

ということはこうした場合の誘導の仕方は一通りには決まらない。いずれの場合でも、固着や過度の自己正当化や機械的な反復は起きそうである。本人の経験がもっとも動きやすいところへの誘導が必要だが、最も動きやすい場面が「自己安定化」でもあるように動きを示すことが多い。その場合で、そのつどの試行錯誤は避けられない。

もっとも典型的には、「自己防御的な神」である。ラカンの図式のなかの対象  $a$  は、自分自身の分身として、心が不安定になれば、出現して安定化を図る防衛

的な原理である。ところが自分自身の神をどこかで確信し、恒常的な対象 a とし  
て配置して、自分を支えたいような雰囲気がある。



(ラカンの図式)

構造的に配置された対象 a のところに「神」という名前を配置したいようなのである。これは構造的に安定化された「神経症」であり、神経症であることによって、まさに自分の安定化を図ろうとしているようである。病態としては自己正当化された神経症である。これじたいは一つの代償行為だが、これによって本人にとって釣り合うほどの代償になっているかどうかは、わからない。

さらにややこしいことに、対象 a のところに、アダムという名前や、聖なるものというような言語的イメージが入ると、これじたいは、大文字の他者の「父の名の隠喩」の位置を同時に占めてしまう。個人的な由来から考えれば、大文字の他者で「父の名の隠喩」として実定的な要素として入っていた場合に、まさに対象 a も連動的に占めてしまうことがある。

言語的な理解や表現のネットワークに構造的に保証された原理が入り込むと、その原理に適合的なものは理解でき、そうでないものはおのずと視界から排除されるということが起きる。さまざまな経験のなかで、経験そのものが自在性を持ち、多様な経験を行う一方、時として対象 a で経験を支えるのではない。

大文字の他者の「父の名の隠喩」は、物語によって形成されることが多い。通常は「構造的な空白」である。この構造的な空白を特定の要素が占めてしまうと、その要素が、情報系の選別的、選択的に働くようになる。本人はいつもいくぶんか緊張感を漂わせており、自分の父の名の隠喩に適うものとそうでないものをいつも判別しようとしている。このとき多くのことを分からない状態にして、自分の経験を安定化させているのである。

さらに連動的に、対象 a を同類の原理で恒常化するるのである。そのとき対象 a は作り付けになっており、対象 a の支えとともに、自己正当化された経験が確保されるようになる。これは二重に自己正当化された「神経症」である。その場合、こうした作為的操作の裏側で、当人にとってまったく理解できない広大な領域が

出現する。当人は膨大な言葉を話す、「何も分かっていない」と感じられる場面が、繰り返されるのである。

構造的に保証された父の名の隠喩は、まさに言語・記号ネットワークで統帥権を発揮するが、それが同時に対象 a としても機能しているために、しばしば本人は大演説仕様の発言を繰り返し、まさにそのことによって自分自身を安定化させ、しかも自己正当化も同時に実行されている。こうした事例を治したほうがよいのかどうかは、おそらく各場合の事情による。多くの場合、自己正当化は自己救済を兼ねているので、ここを解除すると、その人にとっては相当に大きな変化が起きる。

一つのやり方は、同一に設定されている対象 a と父の名の隠喩を分離してしまうことである。たとえば言語・記号的な理解の場面で、経済的理解、法的理解のようなまったく異質な言語理解を一貫して行ってしまう、そういうやり方があることを体得するのである。そのことによって経験のモードは変わりうることを修得する一方で、経験そのものが自在さを回復してくる。そうなれば対象 a は、時として不安時の支えとして出現することはあっても、恒常的な自己保障として、前景化しなくなることも考えられる。おそらくこの場合でも当人の拒絶は、小さくはない。自己治癒の必死の努力の結果が、自己正当化された神経症なのだから、簡単に捨て去ることはできはしない。

ちなみにこのラカンの図式は、対象 a は自分自身の分身であるから対幻想領域に相当し、自己像は、個人幻想に相当し、言語・記号のネットワークは、すでにして映像や音楽で複合的に織りなされた「拡張現実」になっているので、共同幻想に相当する。こうして対幻想領域は、新たなモードとして設定し直すことができ、個人幻想は自分自身が描く自己の像と他者から見られた自己の像の乖離の場として、設定される。情報ネットワークを介した大文字の他者の変容によって、このラカンの図式は大きく書き換えられる。それと同時に、吉本隆明の共同幻想論が、別の装いで新たに評価されうる局面に来ていることも確かなようである。対幻想は、本人にとっても何が起きているのかわからない領域である。だがそれが共同幻想に紛れ込むことで、現実性はきわめて単純な形で律せられる。それは多くの場合、由来の見極めにくい「緊張感」として、本人の全身を覆ってしまうのである。

哲学を学ぶためには時間と労力がかかる。膨大な時間と忍耐も必要である。一つ一つ這いずり回るようにして形成する知である。アリストテレスを学ぶにも膨大な労力が必要であり、カントを学ぶにも膨大な時間が必要である。そして言葉で学んだものを、みずから放棄して行かなければならない。知を放棄するとき最も多くのことを修得するのが哲学である。いずれの場面でも、修得したものを捨てていくのかという思いがよぎる。そうである。

捨ててもなお思い出されるものがある。そのときどきの小さな思いのようなものから、理解できず苦勞したり、あるいは感激したり、絶望したりというくつきりと浮かぶ感情であったり、さらには学んだ時の経験の動かし方のコツのようなものまで、何か身に沁み込んだように思い起こされるものがある。このとき知は習得されるだけではなく、内面化され身についている。この段階で知はもはや知識ではない。学んだものを忘れることによって、知は自分自身となる。

知は、個々の知識の習得の場面のように、獲得し積み上げていくことで形成される。多くの視点や観点や考え方を学び、世界や人間について多くのことを知ることができる。だがこれはたんなる物知りである。最新の知識を獲得し、それをひととき応用して、いくぶんか結果らしきものを出して見る。そしてそれは多くの場合、数年後には追憶のなかにしかない。ここでも忘れることが必要となる。忘れるという豊かな空白のなかに身を置くと、誰であれおのずと前に進んでしまう。この前に進むということのなかに、忘れたはずのものが自然と組み込まれ、組織化されていくことになる。これは典型的な哲学の経験であり、個々の場面での試練なのである。

## 2 自然という現実性

### 1 哲学の困惑

#### 新たな現実性の出現

現実性の範囲があらかじめ確定していた時代がある。フーコーが現代と区別して「古典期」と呼んだ時期で、世界地図で世界の輪郭はほぼ決まり、次々と未知の世界に出会う局面が終わった時期である。自然神学は、あらかじめ確定された「力学世界」を基調としていたので、世界はひとたび作られてしまえば、必然性が支配する。神学的な創造と創られたのちの必然的世界というかたちで、神学と力学(科学)は、役割分担しながら無理なく両立する。この仕組みのもとでは、宗教と科学は相互補完として両立している。そして古典力学には、新たな現実性を生み出す仕組みがないのだから、現実性の範囲は確定している。この段階では、現実と虚構、現実と想像性は、明確に区別できる。虚構はあくまで、現実性の向こう、あるいは現実とは区別されるエクストラである。それらは娯楽ともなり余興ともなるが、むしろそれに留まっている。

18世紀末から19世紀初頭に起きた知の再編によって、「現実性」の範囲が変わってしまう。これ以降、新たな現実は際限なく生み出される。フーコーの『言葉と物』では、生物学と経済学と言語学に生じた同型の変換によって新たな知の前線が形成された。そこで起きたことの内実を網羅的に取り出すことは容易ではない。たとえば生物学という語そのものは、この時期に生まれる。しかもほぼ同時期に、複数の科学者がこの語を使い始める。それ以前には、自然界は、鉱物界、植物界、動物界に区分されており、これはアリストテレスが提起した後、2300年引き継がれてきたものだ。そのとき生物体は、器官の関係であれ、機能性の維持であれ、個体がそれとして成立する仕組みが、個体に固有化される。機能性を代表する関係性そのものが普遍化されれば、それが種を決定するものとなる。各個体は、外から割り当てられた基準に照らして規定されるのではなく、みずから自己規定するのである。こうなれば自己規定するシステムは、由来の上からも、向かうべき目標という点でも、あらかじめ外から決められるようなものはなにもない。

ちなみに経済学では、物(財)についての記述から、価値への探求が前面に出る。物についての網羅的で特徴をひとつずつ書き表していく段階から、価値がどのようにして成立し、しかも価値がどのようにして生み出されるのかの考察に進む。また言語学では、名詞が主要な考察の対象であったものが、むしろ動詞と活用形

に力点が置かれるようになる。ここには18世紀的な博物学から19世紀以降の知の仕組みへの変化がはっきりと描かれ、知は外的な支えを失い、それじたいで生成していくものとなる。

自己規定するシステムは、こうして分散的になり、新たな個体が出現する可能性はつねに開かれており、しかも自己規定するシステムはみずから変わり続けることもできるのだから、現実性の範囲は更新され続けるものとなる。こうした変貌し続ける現実性のなかで、「人間」という語が別の意味をもち始め、あらゆる場面で、この「人間」という語が、現実性の限界にも、現実性の可能性の幅にもかかわってくるようになる。「人間」とは、神がたんなる外在となり、出発点も到達点もない時代に作り出され、ある種の虚構としてセットアップされた最後の「現実性の拠点」だったのである。

こうした時代の推移のなかに、大幅で多面性をもつ「仮想現実」が作り出されるようになった。その最大のものが「進化論」である。キュビエは、骨を一本見ることができれば、その動物の全体的輪郭を描くことができると豪語し、どうみても存在しそうな生物の絵を描いてもいる。

進化論の理論的な枠組みは、進化の機構と総体的な図式である「系統樹」からなる。進化の機構は、「用不用説」「自然淘汰」「遺伝子の突然変異」のような進化をもたらす機構にかかわっている。もう一つの系統樹は、生物の系列的な配置を行うもので、ラマルクやヘッケルが詳細に描いているが、いずれも頂点に「ホモ・サピエンス」が置かれている。「人間」は進化史の延長上で、一切の生物系統の頂点に配置されることになった。

それによって「人間」は系統樹の頂点で、ひとしきり安定を得ることができた。この安定は、構造的に確保されている。たとえば生態学では、ユクスキュルに見られるように、各生物は固有の環境世界をもつことが明らかになっている。ダニにはダニの固有世界があり、ハエにはハエの固有世界がある。だからと言って、ダニやハエの固有世界がそれとして多平衡分散的な多数世界となるわけではない。そうした固有世界は、実は人間の捉えている世界から引き算をするように捉えられている。ダニやハエの固有世界も、人間の世界から引き算され、多くの現実性が欠落したかたちで配置された世界なのである。これが「人間」がどこまでも「現実性の拠点」である理由であり、そしてそれは同時に構造的な保証でもある。

「人間」は「現実性の拠点」である、というおのずと成立してしまう議論の枠には、実はこっそりと「利益相反」が含まれてしまっている。その主張を採用することが、おのずと人間の利益にもなっているという利益相反である。人間が現実性の認定を行う以上、その現実性には人間性の利害が含まれるのはやむをえないという主張がただちに聞こえそうである。これが「認識論的利益相反」である。



各種カント主義の末裔には、この主張がある。

また人間から見た世界以外に何が捉えられるのかという主張も聞こえそうである。これは「人間的ローカリズム」という人間辺境主義の裏側で張り付いた「論理的居直り」である。

人間は、現実性の一つの辺境である。この辺境は、構造的に保証されていて、それ以外の可能性が閉ざされているという論理が理由となっている。だがいずれもごくわずかのきっかけで崩れそうな危うさをかかえている。AI がまったく別様な計算を行い、人間には見えていなかった現実性を描き出す可能性は高く、そのとき現実性は、人間が捉えているものとは大幅に異なっている可能性は高い。

AI をはじめとする技術的な進化を通じて、この頂点に置かれた「人間」そのものが、ひょっとして一つの「仮想現実」ではなかったのかという思いが広範に広がり始めている。それは生身で生活する人間が、AI に仕事を奪われ、AI に頂点の位置を奪われるという何度も SF で語られた内容に留まるものではない。

仕事の役割分担の上で、人間がみずからの作り出した AI に仕事を委譲していくことは、技術の進化に照らしてみるとき、不自然なところはまったくない。たとえば稲の作付けで、代掻きも田植えも稲刈りも、現在ではすでに機械が行っている。やがて街中のタクシーも無人タクシーに置き換わっていくと予想される。外科的な手術のかなりの部分はロボットが行っている。こうした場面では、仕事の役割分担の配分が変わるだけのことである。多くの仕事は、AI やロボットが担うようになる。だがこの場合には、現実性の範囲は同じままで、仕事の分担がかわっているだけである。

さらに AI の記憶力と映像分析力とデータ処理力を活用して、業務の細かさが変わっていくことにも、不自然さはない。仕事をより詳細な技能で実行できるのであれば、それを止める理由もない。ただしこのことの延長上で、人間には直接見えない現実が明るみに出て、人間とは異なる計算式で物事が捉えられるようになれば、人間の経験にはそれまでなかった要素が入ってくる。

現実性のなかの仕事の配分の変化によって、「人間」そのものに変化が及ぶことはほとんどないと思われる。仕事を失くすかもしれないという日常生活にともなう人間側の心配は、当然ながら残る。ただしその心配の大半は、たとえば 2, 3 年に一度すべての既得の知識を捨てて学ぶ直すことになるかもしれないという敷居の高さと、それにとともなう不安に由来している。人間は生物的存在として、毎日食べ、眠り、糞をして、ともかく生きていく。だがそれに留まるのではない。むしろ人間は、自分自身のイメージをもちながら、自分を律して生きていく。人間自身もつ自分のイメージが、「人間」である。この「人間」に対応する現実性の範囲がある。

むしろ問わなければならないのは、現実性そのものの輪郭が変わり、現実性そ

のものの範囲が変容してしまう可能性である。そのとき「現実性の拠点」であった「人間」は、少なくとも位置価を変え、場合によってはなくても済む存在になるのかもしれないのである。一般に仮想現実と呼ばれるもののなかに、なにか現実性の範囲を変えてしまうような動向が見られる。

### 認識の限界

このとき哲学は、認識と相関的に捉えられる「世界」というものの安定性を失うだけではない。アリストテレスからカントまで暗黙の大前提でもあった世界の「自然的な現実性」が崩れてしまえば、そもそも認識とは何をする事なのかということが問われてしまう。そして最初にやり玉にあがるのが、世界と認識はそもそも相関的に成立しているのかという問いである。カントが認識論を試みたとき、明らかに認識と世界は相関的である。またその前提を置かなければ、認識の在り方を詳細に論じていくことには意味がなくなる。認識の枠組みを詳細に論じてみても、それが最初から世界とすれ違っているのであれば、いったい何を問題にしているのかが再度問われることになる。

メイヤサーやガブリエルの議論の基調となるのは、「偶然性」の扱いである。そしてそれが知の形成にとってどのような場面で有効に機能していくのか、またどのようにして知そのものの形成が開始されるのかをめぐって、多くの選択肢があり、可能性がある。メイヤサーの場合、「偶然性の必然」を基調としており、どのような場面でも偶然性が内在するという議論の立て方である。他方ガブリエルは、必然性の偶然性を基調としており、どのように必然的に見えようとも、必然性の成立や証明には最終的に偶然性を除去できない、ことを論拠としている。偶然性の必然と、必然性の偶然の間には、大きな隙間があり、この隙間の意義はより展開可能性のある議論によってはじめて見通しが立つような性格のものである。

たとえば何かが偶然に出現するとき、その出現するものに主観性そのものが巻き込まれていくのであれば、その何かを主観性が認識する、ということに留まることはできない。このとき主観に対置されるかたちで「実在」を捉えることはできない。あるいは対象が変化し続けていて、その行き先も予期される結果も見通せないときにも、認識は対象を捉えることはできない。ここに「新実在論」と呼ばれる広範な構想の可能性が出てくる。

無限の問題を扱うさいにも、主観性は主観性に留まることはできない。無限なものは、どのような存在なのかという問いに、哲学の既存の道具立てで答えることは容易ではない。というのも無限性は、認識とは別のオペレーションで成立しているからである。認識の下で行われるオペレーションでは、「加算無限」まではイメージできる。数え上げたり、演算を継続的に行うという操作を際限なく繰

り返すことで、予期された繰り返しの総体をイメージできるからである。しかし非加算無限では認識に対応させることのできる操作は、残ってはいない。

あるいは環境は、そもそも認識の主体を取り巻いているのだから、それじたいは認識の対象ではない。認識がそこで起きている場所は、認識の対象になりえないのである。こうして再度認識の限界という問題が生じてきた。19世紀の終わり近くになって、デュボア＝レイモンが「認識の限界」という議論を行ったことがある。議論の骨子は、認識の延長上では、「物そのもの」と「力そのもの」には到達できないというもので、そのあたりから再度新カント主義と呼ばれる一群の議論が台頭してくる。

物そのものも、運動そのものも認識の限界概念なのだから、認識とは別様に扱うしかない。たとえばエネルギーから物を作り、物からエネルギーを創り出してみる。太陽表面では、重さがエネルギーに転換している。核融合が起きているのである。ところが制作をつうじて物の究極、力の究極に到達しようとしても、制作は認識から導かれたものではないので、認識には回収できない。

相関主義の最大の問題は、認識主観そのものの形成が、事実としても課題としても組み込めていないことであり、またその課題に踏み込むだけの道具立てもないということである。認識する主体そのものは、環境のなかで形成される。この形成過程は、発達心理学とは別の問題を提起している。能力の形成が、理性的大人になるという局面で終わりになり、それで完結するという見込みはほとんどない。世界の現実が変わるだけでなく、認識の主観性そのものも変化する。その場面を組み込んで議論を立てるのでなければ、古典的な認識論そのものも、すでに終わった材料の組み合わせを変えているだけになる。

### 哲学の課題

こうしてかつての「実在」にかえて、変容し続ける「現実」が問われ、認識の可能性の条件であったパック化されたカテゴリー群に代えて、形成され続ける主観性が問われることになった。こうした場面で哲学は、いったい何を課題とするのかが、再度問われるのである。

哲学は、課題が見つかるたびに、それを可能な限り普遍性をもったかたちで定式化する営みである。あるいはそれまで見えていなかった現実を見えるようにしていく営みの総体のことである。さらに現実を解釈することに留まらず、現実そのものを変えていくことが必要だという議論も持ち出されるのかもしれない。マルクスがフォイエルバッハのテーゼで述べたように、現実をどのように解釈するかではなく、まさに現実そのものを変えていくことが緊要だという主張も出てきそうである。だが残念ながら哲学には、現実を変えるほどの力量はなく、現実を変えること自体はやはり哲学の課題ではない。逆にそれほどの力があるのであれ

ば、哲学は危険極まりない。

事実、哲学そのものに、それほど問題解決能力があるわけではない。問題解決は、多くの場合、科学技術、医学、法律、経済に委ねられ、それらの方が圧倒的に優れた能力を示している。また能力を形成するさいにも、哲学そのものよりも、芸術の方が優れた効果をもつことが多い。哲学は、課題を明確に定式化して、指針を立て、複数の選択肢を提示する。それによって有効に手続きを進めるためのコーディネーターなのである。そしてその程度のことしかできないのが実情である。

こうして「変容し続ける現実」に対する新たな「哲学」の課題設定が必要となったと考えられる。ただし変容し続ける現実に対して、もはや伝統的な問いの形では、対応することはできない。たとえば「時間」というテーマや「存在」というテーマについて、「時間」とは何か、「存在」とは何か、という問いのかたちを取ることはできない。何であるかを確定するような問いの立て方が、すでにして事柄とすれ違ってしまうからである。それらを主語のようなかたちで設定することにも大きな問題がある。主語として内実が問われるようなものではないからである。時間や存在は、どのような経験であるのか、あるいはどのような経験を前景化すれば、事柄の際立った相貌が明るみに出るのか、というような問いにかかわっていかねばならないと思われる。こうして哲学は問いの立て方を変えていかねばならず、また言語的に定式化すれば、事柄が捉えられるということでもない。言語は、使い勝手の良い哲学の道具であることを止める時期なのかもしれない。

さしあたり哲学の課題は、(1)変わりゆく現実性のなかのどこにさらに選択肢があるのかを、反省的な基礎づけ構想とともに明るみに出し、(2)その選択肢を有効に展開できる回路についての方向付けを行い、(3)それによって人間や社会あるいは経験の可能性がどの程度拡張されるのかの見通しを示していくことだと考えられる。その場合、22世紀の世界哲学を構想するさいに、どのような設定をしておけばよいか問われる。

## 2 プログラムとしての哲学

イムレー・ラカトシュが、師のカール・ポパーの科学的方法論(反証主義)を批判して、別建てのフレームを設定したさいに、自分の構想を「探求プログラム」だと名付けていた。要点となるのは、たとえ反証がなされたとしても、さまざまな概念やアイディアは放棄されはせず、手直しをされて別様に活用されること、さらにプログラムは前進的であるか後退的であるかによって良し悪しの実質性が判定されるが、そのとき応用事例の蓄積量と決定的な難題を解決しているかど

うかがメルクマールになるとしていた。このときプログラムには、中心にアイデアの集合(ユニットアイデア)があり、周囲には多くの応用事例(保護帯)があるような同心円モデルを想定していた。ニュートン力学では、ユニットアイデアは、ニュートン三法則であり、この部分は反証手続きにかかわらない部分であり、訂正可能性とは別建てで設定されている。応用事例は、物質論や光学のような各領域での周辺の拡大に相当する。こう配置したときに、ユニットアイデアが伝統的には、「第一哲学」や「論理学」に相当し、保護帯が領域的哲学に相当することがわかる。

このユニットアイデア部分が存在することはおそらく間違いないが、その規則群をどのような性格のものとして設定するかで、構想そのものが大幅に変化する。

**古典力学** 古典力学では、規則のもとで初期条件を決めれば結論は決まる。自由落下では落下開始の位置と時間を決めれば、結果までの距離と時刻は決まる。このとき手続きとしては、結果が合うように規則の定数を決めている。重力定数がそれに相当する。このやり方は、結果が合うように出発点を決めておく手続きである。つまり基本的には目的論の一種であり、機械論とは、装いを新たにしたい目的論である。

**保存則** 熱力学の法則は、組み立てが異なる。最初の出発点の状態と最後の状態では、何か保存されるものがあるという大前提を設定する。これがエネルギー保存則のような場面で活用される。保存の発想は古くからあり、「存在の大いなる連鎖」として設定され、運動量保存則、質量保存則、エネルギー保存則として定式化されている。保存の法則の特質は、最初の場面と最後の場面では何かが保存されるが、その間で何が起きるかを指定できないことである。マッチを擦るとき、火がつくこともあれば、煙が立つだけのこともあり、マッチ棒が折れてしまうこともある。エネルギー量で言えば、潜在量も含めればすべてで保存則は当てはまっている。だが現実は何が起きるかを指定することができない。つまり保存系の規則は、「過少決定」という特質をもっている。法則は大外の枠だけ決めており、内的に何が起きるのかを決定することはない。

エントロピー増大の規則は、大域的な閉鎖系では限界規則として当てはまっている。だが大域的な閉鎖系の内部では、局所的にエントロピー低下はしばしば起きる。典型例が、核融合と生命の出現である。

**自己組織化とカオス力学** 紙のような物体を落下させれば、さまざまな落下の仕方をする。落下の仕方をあらかじめ予測することはできない。カオス力学は、数学的に表記されるためにすべては必然的に決定されている。だが個々の運動の予測が効かない。カオス運動とは、非周期的で非規則的な運動の総称である。血流も一定の速さで一定量ずつ流れているのではなく、内部に変動がある。この運

動の特質は、初期条件の微妙な差異に対して敏感な依存性がある。同じオペレーションでもそのつど異なる事態が生じる(パイ捏ね変換)。整数次元とは異なる多くの次元(たとえば2,26次元、3,14次元等)がある。

渦巻や竜巻のような事象は、「創発」の典型例である。特定の運動のかたちが、ただ自然に出現する。なにかが起きることには、特定の理由や原因はない。系内に内在的な偶然(ゆらぎ)が含まれている。内在的な偶然から、特定の運動のかたちが出現してくるプロセスの連鎖が、「自己組織化」である。それが新たな現実を内的に出現させる。

周辺からエネルギーを呼び込みながら「運動を続けるかたち」が、「散逸構造」(たとえば渦巻や竜巻)と呼ばれ、運動が止まり運動のかたちの副産物が残存する場合は、「平衡構造」(たとえば結晶である)。数学的に見れば、新たな変数が出現してくるようなものである。だがこの変数は短時間で消滅する場合はほとんどである。安定した動きのかたちが出現したとき、「新種」の形成と呼ばれる。

**哲学の特質** こうした科学的な定式化の仕組みと特質を傍らで配慮しながら、哲学に必要とされる特質を考えてみる。

第一にプロセスのさなかにあるような経験を主題化することが必要となる。プロセスのさなかにあっては、完備した認識を行うことはできない。むしろ認識と行為が連動するような場面での「認識行為＝経験」が主題化されることになる。

プロセスにさなかにあってなお完備した認識が成立するとした場合、無理に無理を重ねた議論ができあがる。その一例をホワイトヘッドの『過程と実在』が示している。またプロセスとともにプロセスに臨在する経験を主題化したのが、ドゥルーズの『差異と反復』である。そのとき主題化された経験が「強度」である。

認知科学的に見ると、生態心理学は行為のさなかでの認知を問題にしていた。運動を行いながら速度調整や運動方向の調整が行われており、そのときに活用されている指標が「光学的流動」であり、飛んでくる物体への対応や近づいていく物体への対応を決める指標となるのが「行為主体と物体との間の残り時間」である。この時間は、接近の残り時間という特殊な時間のことである。これをギブソンは、生態学的知覚だとしていた。

プロセスのさなかにあって、どのようにして「新たな行為の選択肢」が設定されるのかを組み込んだのが、「オートポイエーシス」である。

第二の特質は、プロセスのさなかにある認知行為＝経験がどのようにして「自己形成」するかにかかわる仕組みをどのように導入するかである。経験が高次なものとなり、あらゆるものを観望する高みに向かうようなことは、経験の可能性をそれじたいで狭めてしまう。起きている事象が何であるかを知るとは、認知行為とは異質な観望するまなざしへとみずからを変容させる。

**観察者が観望するように捉える事象の手前で、事象そのものの出現の可能性**

を残したまま経験を進めなければならない。ここに特殊な「還元＝括弧入れ」が必要となる。これじたいはさまざまな言い換えができて、行為を、観察者を裏切るように作動させること、あるいは観察者の視界のなかで行為の選択肢を増やすように行為すること、行為の可能性を拡張するために、認知的な能力のなかで、イメージを活用すること等々である。

**超越論的経験論** これらの二つの要素を内在化させうる哲学の系譜を、「超越論的経験論」と総称し、哲学史的には、シェリング、ベルクソン、ドゥルーズを継承するような補助線を引くことができる。哲学史とは、補助線を引くための宝庫のことである。そこでこの項目を以下のように設定してみる。

(1)根拠への問いを、知の基礎づけではなく、知にとっての選択肢を増大させる方向で行う。根拠はつねに現実が別様でもありうる可能性の示唆のために用いられる。

(2)そのため根拠は、どこまでも暫定的な設定(措定、定立、セットアップ)として解明され、そこで解明されることは超越論的な相対主義(フッサール)に留まる。

(3)現実性の範囲は、あらかじめ決定されてはいない。むしろ現実性を拡張する方向で、さまざまな素材と経験科学的な知見は活用される。

(4)経験の可能性の条件の解明ではなく、経験の拡張の可能性の条件が問われる。つまり経験そのものの可能性を増大させ、経験の弾力を高める方向で考察がなされる。ヘーゲルの場合、(3)を満たさず、超越論的目的論となる。目的が外に存在せず、目的が体系に内在する絶対的観念論である。つまり事象の範囲はあらかじめ決まっている。

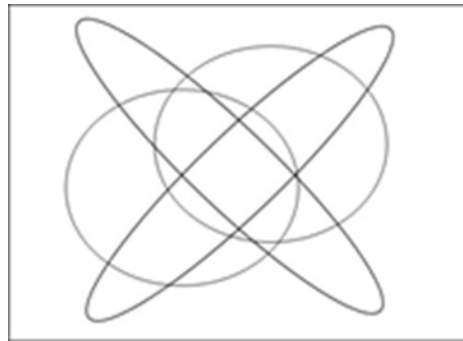
(5)事象は、つねに別様でありうる可能性の下で考察される。論理的懐疑ではなく、さらに経験を前に進めるような選択肢の提示が基本となる。経験科学、芸術家、身体技法等々の領域へとアイディアと靈感をあたえることができれば、おのずと現実性の範囲は変わる。ことに身体に働きかけることは、多くの場合何が起きてしまったのかがわからないために、そのぶんだけ有効である。

(6)考察の仕組みのなかに、どこに選択肢があるのかの注意が必要とされる。たとえば通貨、国家、さらに言語のような対象に対して、それらの本来性は何なのかというように問うことになる。通貨には、法定通貨以外の多くの通貨が実際に活用されており、本来的通貨は決めようがない。また言語の範囲も決めることができない。インスタグラムで音楽を流しているだけでも言語的な機能を果たす。本来の国家が何であるかは決めようがない。サイバー国家がありうる局面には来ている。国家の定義は、主権があること、領土があること、国民がいることである。世界の各地でテロが起きるたびに犯行声明を出す「過激派国家」は、おそらくサイバーという位相領域に存在する。領土という発想が、物理的領土に限定されなくなったのである。

(7)こうした場合、現実の作業は、何をモデルとして活用するかに大幅に依存している。シェリングの場合、不均衡動力学を活用し、ベルクソンの場合、「人間進化論」と呼ぶべきものを活用している。このモデルが容易には解決できない「課題」を含んでいる場合には、奥行きと深さのある哲学となる。ある意味では、こうした課題を見出すための発見的手続きが、このタイプの哲学の成否を決める。

以上のような項目が、超越論的経験論のユニットアイディアとして設定される。これらの項目は、必要に応じて追加でき、部分的に書き代えも可能である。そして個々の領域的システムが周辺に形成されていく。周辺のシステムは固有の領域を形成する。精神医学的システム、地経学的システム、生態システム、情報システム、倫理システム、芸術システム等々であり、これらは増大する方向で推移する場合には、このシステムは成功する。

各領域のイメージ図は以下のようなものである。超越論的経験論のエンクロペディーはこうした図柄となる。図柄そのものは「絶対的な多元論」であり、各領域は果敢な企てと展開可能性に応じて増えていく。



哲学は、この図のなかには直接は出てこない。さまざまな部分的領域システムを動きながら、そこからそれぞれの領域を横断的に活性化し(コーディネーターの行為)、新たな領域が生まれる場合には創発に寄り添い(発見的行為)、停滞するシステムでは別様の選択肢を再発見的に見出し、総体として新たな現実を創り出していく。哲学は、個々の領域的経験を通過しながら、そのつど経験のかたちを変え(メタモルフォーゼ)、経験そのものの進行のモードを改善しながら進む。この姿を変えながら自己陶冶していく「経験の主体の名前」が必要であれば、それこそ「精神」という名称が相応しいと思われる。

(1)なんらかの手掛かりや素材を活用しながら、持続可能なシステムを形成する営みが制作的行為であり、システムそのものの出現と持続にかかわっている。たとえばハビリの新たな技法を見出し、それが持続可能な作動を続けられれば制作行為であり、芸術的制作の技法を見出し、一貫して作動を続けられれば制作行為であ



る。また既存のシステムの作動のさなかで、システムの動きに臨在しながら、作動のさまざまな方向付けを行うことが、調整的行為であり、伝統的には倫理学の拡張となる。さらに個々のシステムの動きに規則性が見いだされ規則が取り出されれば、そこに真偽の問いが出現する。それが認知的行為である。規則そのものは、各システムの作動にとって影の領域を形成する。規則の前提となる最低限の論理性は、システムの作動の前提条件である。

(2)これらの行為は、前進/停滞、自在/非自在、真/偽のコードを形成し、個々のコードのもとでさらに細分化される細目となる。それが各システムで分岐しながら形成されるプログラムである。これらのコードは、伝統的には美、善、真に対応し、真善美を逆転させて、経験は進むことになる。

(3)個々のシステムはみずからの作動をつうじて、自己と環境をおのずと区分する。観察者は、「環境の環境」とでも呼ぶべき、個々の環境の総体を指標し、象徴するようなある種の「全体的表象」を手にすることができる。これが「世界」である。「世界」はシステムの創設、形成、システムの作動の調整、方向付け、システムの妥当性の判定にさまざまな手掛かりをあたえることができる。世界のほうから、システムの作動が導かれることはなく、システムの作動はつねに世界を括弧入れしながら進むよりない。これが「行為的還元」であり、還元をつうじて、世界は外的な密接性(外密)に留まる。世界の像は、システムの作動に応じて、そのつど姿を変える。



### 3 世界という現実性 ——一つの科学哲学的考察

哲学は、何を語ろうとしているのか。哲学が開始され、アリストテレスが基本的なモデルを作り上げ、その後 2500 年も続いて、なお終わろうとしない。この学問はいったい何を目指し、何をを行っているのか。しかも当面、哲学探究は終わる気配さえない。

哲学の主要な場面は、あくまでも人間が作り上げた「言語」である。そして経験が哲学の現場である。ところが哲学の言語には、通常の社会生活ではほとんど使用されないようなものが含まれている。しかも意味不明な活用法も繰り返される。そのため哲学は、何を言っているのか不明だと言う敬遠に近い感想をもたれる。敬遠されることは、それじたいは一般には問題ではない。むしろ問題なのは、哲学が前に進んでいるのかどうか、どのようにしても回答が得られそうにない点にある。当初言語という特質から、哲学が何をを行っているのか、一度整理してみることから開始したいと思う。

人間の言語以外に、現在では多くの材料が活用できるようになっている。また哲学が活用できる素材や題材も時代に応じてどんどん変わっていく。人間の言語の範囲で考えてきた伝統的な哲学が、いったい人間の経験のどの程度の範囲を覆うことができるのか。あるいは人間の経験の可能性をどの程度拡張してきたのか。哲学である限り、人間の経験の可能性を拡張し続け、人間の経験の弾力を高めていかなければならないはずである。その課題に資するためには、つねに試行錯誤が必要となる。この論考は、その試行錯誤の試みの一つである。

いくつかの理由から、この先の哲学というプログラムの大枠を形成しなければならない。それはある種資金の出し手の希望に応えるように作っておかなければならないのである。

#### 1 哲学という試み

##### 哲学の道具立て

言語学者のソシュールの説では、言葉は二つの要素からなる。海という語は、ウミという音と、この音ともに喚起されるイメージであり、多くの場合青々と広がった情景が浮かべられる。音のまとまりがシニフィアンと呼ばれ、喚起されるイメージがシニフィエと呼ばれる。日本語にすると「意味するもの」と「意味さ

れるもの」という訳語があたえられ、そうした区分だと思われがちだが、そのような意味合いはまったくない。音とイメージという異なる質がつながってひとつになっているものが、語である。喚起されるイメージは、通常は視覚イメージであれ、聴覚イメージであれ、具体的なイメージである。

音のまとまりと喚起されるイメージの間には一対一対応はない。実際青々と広がったイメージを、日本語ではたまたま *umi* と呼んでいるが、他の言語ではまったく異なった音のまとまりが対応付けられている。こうした事態が「対応恣意性」と呼ばれるソシユール言語学の基本規則の一つである。歩行という語は、音のまとまりと動作イメージがつながっている。

こうした言語の規則性を前にしたとき、哲学が頻繁に活用する語には、奇妙な特徴があることがわかる。大別して、そこには二種類の奇妙な語群がある。

第一に、世界(宇宙ではない)、存在、物自体、神、無のように本性上、具体性をもたず、具体性を持ちようもない語群である。ほとんどが有限の事象ではないために、具体化すればごく一部を切り取っているか、なんらかの比喩に留まるような語である。こうした語は、それじたいは具体的なイメージとはならず、具体化したとしても、その具体化されたイメージと「そのもの」との関係をおさえることができない。こうした語のシニフィアンは確定できないが、世界各国の多くの言語には、こうした語が含まれてしまっているのである。

こうした語は、ある意味で未規定的で、それじたいが何であるかを確定することができないような語である。これらには、特有な偶然性が内在しており、本来的で解消することのできない偶然性が含まれている。こうした偶然性を「無限性」に置き換えて議論する仕組みを考案してきた前史もある。そうした語をむしろ積極的に活用してきた哲学の前史がある。語の内実が決まらないのだから、どのような意味を盛り込もうとそれじたいは偽ではない。とするとこうした語群は、どのように有効に活用するかが決め手になっている。

たとえば「存在」という語は、ヘーゲルの『論理学』では、「一切の内容を欠いた、ただ在る」という事態として配置されている。こうした配置には、「存在」という語そのものは、単独では意味を持ちようがなく、それじたいで見れば空虚になってしまうことが含まれている。だから存在の近傍には、「無」がある。無は、何物でもなく、何もないが、「在る」という語とは区別されていることによってかろうじて内容を備えている。そのため無は、在ることと同じであるが、区別されているという事態によって内容をもつ。そのため在ることと無は、同じ一つのことだがまさに区別されることによって反対のものである。これに対して、ハイデガーの「存在」は、万物の根源そのものという伝統的意味合いが込められており、場合によっては「エネルギーの場」というような意味合いで活用される。一切の存在者にともなっているが、それじたいは姿を現すことはない。

いずれの議論も「存在」という語が何を意味しているのかが確定できないことを、逆手に取っている。一方では、存在という語を可能な限り薄めて、実質的な内容を持たせない方向で、他方では意味内実の可能性をすべて含ませる方向で活用されている。

いずれにしろうとした語が意味すると想定されるものは、確定されることはない。そのため語と、語の言い表していると思われるものとの関係は、言表に含まれる経験が、それをつうじてどの程度の展開可能性をもつのか、あるいはそれまで気づかれていなかった経験をどの程度さらに明るみに出すかだけが問われることになる。真偽で見れば、どのようにしても真偽を確定できないが、この確定できなさをさらに逆手に取る哲学が出現することを妨げるものはなにもない。だがおそらくそこには耐用年数というものがあり、使用耐用年数を過ぎたものは、当面「哲学用語」の埒外に置かれる。

語は、ある意味で人間的な人工的造形物である。由来も分からず、その意味も確定できない。しかも語は、何かについての語でもある。語はつねに語以外のものにかかわり、語そのものを超えていく。ここに語の超越性が含まれている。語はつねにみずからを超える。語の自己超越性を、語とそれが表そうとするものとの関係に置き換えようとする、ウイットゲンシュタインの言う「内的関係」以上の事態が出現してしまう。内的関係は、語とそれが結びついている事象との関係をどのように詰めても、それを詰めることができないことを意味する。「椅子」という語を四本足の物体と関係づける関係づけそのものの正当性も由来も決まらないことになる。それを超えて、世界や存在は経験の片隅には引っかかっているが、語が結びつこうとするものが決まらない。「・・・についての語」という語の超越性は、実は行き場がない。だがこの語の超越性が止むこともない。語は、つねに何かを指すが、何であるかが確定できない。

第二に、心、魂、本能等々の語群である。これらの語群は、活動態を表そうとしている。活動態だから、人間の眼には見えない。不思議なことだが、活動はそれじたいでは見えず、活動の結果や活動にともなう物しか見ることしかできない。脳は見えるが、心は見えない。物体は見えるが、エネルギーは見えない。これが人間の眼の不思議なところである。これらの語群でも、シニフィエは決まらない。具体的なイメージがないからである。しかも調べることもできない。

魂という語は、現在でも魂のシュートとか、魂の籠った低めギリギリのストレートとか、比喻として活用されており、何となくだが分かる。それぞれの事象で「魂」と感じられるものを「魂」の典型的な活動だとすることはできる。川辺で死んだワニが死後4日も経つのに、近くを通りかかった人に噛みついた事例をヘルダーが取り上げている。気持ちは分かるのだが、これでは死んだ後でもしばらくは身体に住み着き、身体を動かすもの程度の意味合いしか残らない。そのため

魂の内実はどのようにしても確定できない。それどころか医学的に見れば、「魂」という実態(実体)は存在しない。「魂」は複合的な活動態だと考えておくのがよく、かつ合理的である。これらの語は、特殊な活用法を見出す方向で使用できる場合に、新たな比喩を創り出す方向で活用することができる。

意味内容が決まらない語については、それを活用するさい、文や文章で表すことになる。主語—述語形式で、書き表すのである。ところが活動態では、主語が決まらず、主語の内実が次々と変化していくこともある。たとえば渦巻を例にすれば、渦巻には特定の運動のモードがある。それを写真にとることもできれば、絵にかくこともできる。だがそれは活動の断面もしくは活動の結果であって、活動を行う当のものではない。活動態は、活動の産物を創り出すことはあっても、産物が活動の主体であることはない。こうした場合には、主語が決まらないのである。

活動を、主語—述語形式に落とし込んだとき、活動そのものは主語ではありえない。むしろ活動から主語に相当するものが作り出される。こうした場面では、活動態を名詞(主語)で表現することが不適當なだけでなく、そもそも主語—述語関係が、活動態の表現として、事態を歪めてしまうことにもなる。主体が何かを行うのではなく、ほとんどの場合、主体こそ活動の結果であることになる。「述語的世界」と言いたくなる気持ちは、理解可能な範囲にある。

だが活動態は、動詞で表現されるようなものではない。動詞は、基本的には主体が何かを行うような場面で作られている。「私は歩く」「私は考える」「私は散歩する」というように、主体の意図や意志にかかわる範囲で、動詞は作られている。その範囲内の動詞でまかなえる事象はごくわずかである。

かりに動詞の一つとして産出という動詞を持ち出す場合でも、産出関係はどのように「産出的因果」に落とし込もうと、そこには本来的な偶然性が含まれてしまう。活動態は、主語に相当する実体を創り出すことを必要条件とはしていない。いまエネルギーの場から粒子が出現する場面を想定してみる。エネルギーの場の局所的な歪みが、運動の滞留を生み、そこから粒子が出現すると考えてみる。この場合、「エネルギーの場が粒子を産出した」、と考えることはできない。たとえ局所的な運動の滞留があったとしても、それが解消してしまうこともある。もちろん粒子になることもある。そうした事態を表すのが、「ゆらぎ」である。その意味でエネルギーの場は、粒子を生み出すような仕組みが備わっているのではなく、産出関係というより、場そのものの自己組織化の一断面だと考えたほうがよい。こうして本来的な偶然性を、むしろ積極的な創造性へと転化することができる。

活動態を捉えるさいには、原因—結果、根拠—帰結の関係は、カテゴリー・ミステイクであった。また産出関係は、一つの比喩としては有効だが、そのうちに

は何段階もの仕組みがある。つまり産出関係の詳細な内実が問われるのである。そして「ゆらぎ」のような不確定性や自己組織化のような創発的な事態を捉えるためには、主語－述語関係で組み立てられる文の構造を手掛かりにすることは、まったく適切ではない。

哲学の主要な道具立てとなっている「言語」(普遍化されたものが「概念」)は、哲学の手掛かりとして有効に機能しないという面が多々ある。少なくとも、主体そのものの出現と形成、主体の行為としての動詞の自律性と自律性のモード等々の課題に光をあてながら、記述していくための仕組みを考案していただくの構想が求められることになる。そのとき論理の内実に新たなカテゴリーを追加しながら進むよりない。

歴史的経緯で言えば、20世紀の「構造主義」は、論理のモードに新たな項目を追加した。それが言語学由来の関係のモードであり、基本的には隠喩・換喩である。ここには要素的言明の真理値を確定しながら、真の言明を積み上げて行く論理実証主義への異論と、要素間のネットワークを取り出すと言う経験科学の延長上の手法がある。真理要求と事柄の確定を同時に保証するのが、構造的なネットワークである。

そのためこの場合、反省への信頼は、個々の事象をつねに超えていく全体性と対になったものである。しかも哲学が鳥瞰的な視座の確保を行ない、経験科学が実証的な実績を積み上げて見せるという、哲学と経験科学の蜜月が容易に形成されたのである。

事柄の関係としての隠喩と換喩の威力は、凄まじいのもがあった。レヴィ＝ストロースは、フランス語の馬の命名で、馬と人間との集合関係が換喩的であれば、命名法は隠喩的になり、馬と人間との集合関係が隠喩的であれば、命名法は換喩的になるという命名のダイアグラムを導いている。たとえばシャハヴァンテという馬の名前であれば、人間の芸名の延長上に人間の名前と共通の集合に属している。このとき馬は人間から観望される存在である。人間と馬の生活圏は相互に独立になっており、生活圏が隠喩的であれば、命名は換喩の延長上に配置される。ここでは隠喩、換喩が集合の関係として拡大使用されている。

複数の集合が、部分－全体関係に入らず、にもかかわらず密接な関連にある場合が隠喩であり、部分－全体関係で配置できるものが換喩である。馬の命名規則の一部がこうしたものである。このことの意義は、通常規則があると思われていないようなところに規則のネットワークを張り出して見せるという発見的な手続きである。

またヤーコブソンは詩的言語の分析で、詩の言語は、語の選択の軸を、結合の軸へと投影したものだという。語の集合をとれば、換喩的である語相互を、隠喩的關係に投影し、変換するのである。換喩と隠喩には当初より、未決定性と偶然

性が含まれており、構造的ネットワークの特質は、未定、未了、未完である。構造主義は、科学的探究という手続き的な単純さと、その内部に含まれた偶然性をむしろ構造そのものの出現と変容として扱うという果敢な企てをやったのである。

だが構造的ネットワークはそれじたいでみずからを組織化することもなく、みずからを動態化することもない。そのためこのネットワークと並行して、構造改革やパラダイム転換を標榜する科学革命、あるいは構造の剰余が繰り返し主張されることになった。これらの構造の動態化は、構造的ネットワークと並行して主張され、相互に外在する。唯一それらをつなぎとめているのは、視座として確保されている主体としての「人間」である。

だが「人間」こそ、内実が決まらない典型的な語でもある。人間は、それじたい何になり続けているかが決まらないのである。生物学的には、人間の範囲は決まるのではないかと思われるかもしれない。つまり人間の集合は確定でき、馬や豚やクマやイノシシや鶏とははっきりと区別できる。この区別が行われる限り、人間の集合の範囲は決まるように見える。だがこれは外延の範囲を決めることにしかなく、それによって、人間の内包(内容)は残念ながら確定できはしない。人間は、みずからの内包を更新し続ける存在だと考えた方が、人類史の実情に合っている。

フーコーは、『言葉と物』の後半で、古典期と現代の間にある大きな裂け目を経て以降、現代の知性の張り出す位相空間の結び目に「人間」というある種の「代表象」が生み出されたと考えた。その結果、知の枠取りが変容すれば、人間そのものが消滅するという予言めいた発言を末尾で行うこととなった。実際構造主義的な発想からすれば、そもそも人間とは、構造の作動の下で浮動する変項の一つでしかなかった。つまり「人間」とは、こうした構造のネットワークのもとで張り出される「浮動体」でしかない。そのことと、ともかくも毎日、食べ糞をして生きていく生存体としての人間とは、明らかに位相が異なる。それは人間像の乖離であって、リスクともチャンスとも言えるような新たな局面なのである。

## 哲学の選択

哲学の思い込みの一つが、拠点の確保であり、物事の始原、物事の究極への探求だと思われている。そしてそれは人間の基本的欲求でもあり、それじたいは解消されるような欲求ではない。さらに真への欲求も根強いものがあり、それは同時に「根拠」への問いとなって表れている。

個々の経験にあらかじめ前提されている根拠を明るみに出し、それを一揃い整合的に整えることがカント哲学の課題であった。昨晚の晩御飯には、鰻と刺身を食べ、その前の晩御飯にはうどんを食べ、その前の晩御飯には牛ステーキを食べ、



その前にはスパゲッティを食べたとする。個々の晩御飯をくつきりとあるいはうっすらと思い起こすことができる。そして前後関係で配置することができる。そのとき配置を可能にする共通の座標軸が前提されているはずである。それが「時間」であり、個々の晩御飯を前後関係で配置するさいの共通の前提である。そのとき3日前の牛ステーキをたまたま思い起こせないこともある。それはブランクとなって、配置のなかから具体的項目が空白となる。また思い起こせないだけではなく、人為的にそこを空白にすることもできる。それと同じように、共通の座標軸となっている時間そのものを取り除いて空白にすることはできるのか。これは実際にカントの行っている論証の一部である。そして時間そのものは取り除くことはできないのだから、それは経験に先立ち(先験的)かつ知性そのものにあらかじめ備わっている(アプリアリ)ことから、人間の経験には、個々の経験に先立つ広大な根拠の領域があることになる。

しかしこの場面で、鰻と刺身やうどんが前後関係で配置されるという配置の行為とともに、そこに共通の座標軸も同時に形成されていくと考えることもできる。事象の認識とともに同時に根拠となる共通の前提も形成されると考えていくことができるのである。根拠という前提があらかじめどこかに存在すると考える必要もない。そうだとすると経験は進行しながら、みずからの根拠も生み出し、その根拠をさらに更新しながら進んでいくこともできる。こうなると根拠という意味合いが変わってしまう。一切の手続きのプロセスとは独立に、どこかに拠点が存在するという思いを残すための場所が、もはや存在しないのである。それと同時に根拠(前提)への問いはそのまま残り、根拠への問いを内部に含んだまま、「拠点論」とは異なるかたちの議論が成立することになる。こうして経験とは切り離された叡智界を独立に設定しなくても、根拠への問いを経験の形成にとってより有効に活用することができる。

この場合、根拠とは、「超越論的相対性」でしかない。それでも根拠への問いは内的に含まれている。それが超越論的経験論と経験科学との違いとなる。もっとも優秀な経験科学者は、おしなべて「根拠への問い」を併せもっている。根拠への問いは最終的に行く果てがない。それはヘーゲルの言うように「没落への道」なのである。だがヘーゲルの場合、没落への道は、最終的には知の総体性として、別様の救済を受けることになる。それによって知と相関する現実性の総体は、ヘーゲルの場合たとえ無限性をもとうとも見かけ上あらかじめ決まっているように見える。

こうした事態は別様なかたちで、フィヒテの当初の議論の立て方にもみられる。『全知識学の基礎』の原則論は、認識論と実践論の共通の前提を取り出す試みとして、構想されている。本人がそう述べてもいる。そして「自我」が設定される。この自我は、通常感じているような「私」というような経験的浮動体ではなく、

「みずから自身をセットアップする働き」のことである。この働きは、自我を産出する。セットアップする働きも自我であり、セットアップされたものも自我である。ここではある種の循環が生じているが、もはや反省の循環ではない。むしろ産出という事態を、働きと事象に区分したうえで、それを一つの事柄にまとめ上げているのである。それが「事行」と呼ばれた。

普通に考えれば、セットアップする働きは、セットアップされた事象よりも広範な可動域を備えている。産出する働きとしての自我が、産出された事象としての自我と、同じ一つのものに成ることはあり得ないのである。ところがそれを認めると、出発点が確定できなくなる。かりに出発点がそれとして確定できなくても、それを「設定する」ことはできる。この設定が、「措定」とも「定立」とも訳されている。

出発点は、一つの設定でよい。問題は、むしろこの設定から「どこまで進むことができるか」である。あるいはこうした設定をすることで、どこまで原理的な課題を取り出し、それに対して考察を加えることができるかである。どのような拠点を設定しようが、それ自体が問われるのではない。またそれは問いようがない。出発点の背後や外に、それを問うための助走路も余白もないはずだからである。

そうだとするとそこからどの程度のことを明るみに出し、新たな現実が見えてくるかが、議論の成否を決める。この力点の移動によって「体系」(システム)の意義が異なってくる。見かけ上拠点哲学だと見えているものは、正当化の拠点を確保して、そこから正当性を維持しながら進んでいく議論である。

しかし正当性の保証はなくても、前に進むことはでき、前に進むことによってだけで明らかにできることだけが、この哲学の成果となる。こんなふうと考えていくと、デカルトの「思う我」も、拠点としての重さを持たせる必要もない。思う我から、どれだけのことが明るみに出たのかだけが問われることになる。事実、そこから解析幾何学という巨大な成果が得られているのである。こうして本人がどのような思いを込め、どのような意図で開始された議論であっても、そこから進んでいく議論の内実の豊かさだけが、この議論を支えることになり、それが議論そのものの成果である。どのような根拠も、そこからの展開可能性によってだけ支えられていることになる。拠点ではなく、経験の進展とプロセスの豊かさだけが、実質性をもつのである。

根拠への問いは、たんに根拠そのものを暫定的なものにとどめるだけではない。前提を別様なものに置き換えたとき、いったい何が起きるのかを試行錯誤する回路が拓けている。幾何学の定義に、直線とは2点間を最短で結ぶものというのがある。点から線を考えていくときの基本なる定義である。しかし最短距離で結ぶ線は一つに決まるのだろうか。一つに決まる場合には、すでになだらかな「平面」

が前提されているはずである。2点の記された面が、曲率をもった面であれば、2点を最短で結ぶものは、一つには決まらない。かりに球面をとり、両極に2点をとれば、2点間の最短距離は無数に引くことができる。こうして「最短」という事態に異なる可能性が開かれてくる。こうした議論は、実はカントに出てくる。

ライプニッツが、神による世界の創造を考察したとき、神が無駄なことをするとは考えられないので、世界を作るさいの建築コストは、最小だと述べている。建築コストが最小だとして、建築のプロセスは一通りに決まるのだろうか。世界を作るさいの最小作用には、力学が貫いていることは間違いがない。だがコストは、最初の開始と最終の産物との間の落差でしか決まらない。その間でどのようなプロセスが進行するかを決定しているものは、何もない。こうして前提を別様なものに変更し、世界の可能性を別様に開いていくことが、超越論的経験論の特質なのである。超越論的哲学は、経験論へと接続されるとき、もっとも豊かな姿となる。

## 2 哲学はなお何をなしているのか

### ガブリエルの思い出

マルクス・ガブリエルという才人がいる。ドイツ観念論を母体として広く分析哲学にまで及ぶ議論を展開している。この才人の特徴は、事柄以上に事態を過度に鮮明に描く能力を持ち合わせ、トリックすれすれの論証能力を使うことができること、この論証能力を活用して哲学は「前進」できるというおおらかな確信を持ち合わせていること、そしてどこまでも言語と解釈が哲学の主要な場であり、この場に限定して哲学はなお進歩できると確信していることである。

ガブリエルの哲学史の素養は、十分に蓄積されたものである。だが哲学史の素養に溢れていることと、哲学として魅力あるかどうかは、まったくの別問題である。ガブリエルの『なぜ世界は存在しないのか』は、「新実在論」を標榜する著者の一般向けのサーヴィス精神にあふれた本である。この本を傍らに置きながら、現在哲学が何を課題としうるかを考察したいと思う。

存在と呼ばれるもののなかにはどうみても疑わしいものはたくさんある。近世のイギリスで見られた魔女裁判のさいの「魔女」や、幼いころ村のはずれに住むと言い伝えられた「山姥」や、突如雨が降り気温が下がると「子供の臍を取りに来る鬼」という類の伝承のなかにある個物は、言い伝えのなかだけに存在する。そこで疑わしいもののなかから、哲学的な誤謬を取り出し、それを「偽」(間違い)だと明言することで、哲学は前進できるという思いがガブリエルにはある。

その誤謬を断ち切ってしまうと、哲学は足元を掬われることなく、また壁にあたったまま停滞するような議論を中止させることができると考えているようで

ある。その代表が「世界」であり、物事の一切の総体性を表す語である。この語を存在の一覧表から取り除くことで、多くの偽を取り除くことができるというのが、ガブリエルの主旨である。そしてそれ以外の存在は、可能な限り広く取るのである。

なぜ「世界」がターゲットになるのか。認識の仕組みのなかに出てくるある誤謬を取り除くためである。世界をカントの物自体に置き換えて考えてみる。人間の認識は、認識のなかで捉えられた表象であり、その場合にはある物についての表象とたんなる幻覚とが区別できなければならず、そのためにも表象はなにかについての表象でなければならない。この何かについてのという場合の「何か」が物自体に相当する。認識が知りうるのは、表象までであり、物自体は知りようがない。だがそれを無しで済ますわけにはいかない。要するに認識の背後世界のことであり、この背後世界はまさに認識からは届かないと設定されているのだから、認識にとっては一つの壁である。同じようにして認識からは届かないと仮構された「世界」も存在しない。これらは認識が、まさに認識であることによって仮構されたものであり、認識がみずからのうちに作り出した剰余であり、それは存在しないということになる。

ガブリエルが取り除こうとしているのは、認識が壁に当たることによって停滞するところのものであり、認識そのもののなかにあるある種の誤謬である。ドイツ哲学のなかでは、「限界概念」と呼ばれてきたものであり、限界概念は個々の事物や事実とは同じ扱いができない。

ガブリエルが断ち切っておきたいとおもっているものがもう一つある。それは一切の事実や事物をそこへと帰着する基盤を想定して、そこから一切の議論を組み立てようとするある種の「還元主義」であり、本のなかでは「構築主義」と呼ばれている。心は脳のさまざまな働きからすべて説明しようというのは、手続き的なプログラムであり、それはそれで成立するのだが、それが最初から立場として設定され世界像となるような立論に反対しているのである。

こうしてガブリエルが排除したいと考えているのは、世界を像として捉える「世界像」としての世界観であり、科学的な世界像も像である限り、間違っていることになる。そして芸術や宗教にも固有の経験があるのであり、その固有性をそれとして認めることで世界の多元性を認めようとする。このとき哲学は、余計なこだわりを持たず、余計な壁に直面せず、多様性をそれとして受け取るような豊かさを回復することである。ガブリエルの描いた世界は、つまるところそうした精神の豊かさを回復するためのいわゆる「人生哲学的解釈学」だと考えてよい。そしてそのことを立場として主張する限りは、おそらくほとんどの人には「常識」もしくは「異論の余地なし」だと思われる。

ところが他面では、意味として捉えられるものは、それはそれで存在し、対象

領域をもつ。語りとして成立するものも、映像で描かれるものも、意味として捉えられたものはすべて存在することになる。この場面の議論では、性急な「存在」の拡張がなされている。言語的に語られ、対象領域として意味の場をもつものは、すべて存在するということになる。このことに関連して、領域の領域としての世界は、それを語るための領域が、世界の外には存在しない。つまり語りようがない。そうしてみるとこうした議論の延長でも、世界は「存在しない」ことになる。実際には、基礎づけの正当化にさいして、「世界」をどのようにしても「基礎づけることができない」ことを基調としている。

これじたいは乱暴な議論だが、この乱暴さを上回るほどの議論のうまさ面白さをガブリエルの話は持ち合わせている。この場面では、ガブリエルはすでに才人というより反射神経抜群の哲学的タレントなのである。このタイプの哲学者は稀に存在し、日本では故大森荘蔵がそれに近い。大森荘蔵は、ときとして「哲学の仕事は、人々にぐっすり安らかに眠ることの条件を作ってあげることだ」と言っていた。まさにこれが「人生哲学」の基本となる。ただしこうした議論にはいくつも論証の隙間があり、丁寧に詰めて見なければならぬ箇所は多い。

ガブリエルは、一切の背後世界と科学的な還元主義的世界像(構築主義)を取り除き、直接的な事実や物があるという。認識とは表象することではなく、直接知ることである。そして事実や事象は、領域(意味の場)に現われ、しかも多くの領域(意味の場)に出現する、というものである。これがガブリエルの多元論の骨子である。

伝統的には、直接認識は、直観に委ねられ、直観の働きだと考えられてきた。これを感覚的直観に拡大して多用したのが、現象学である。感覚的直観が、「知覚」だと呼ばれている。知覚は、物を直接知覚するのであって、物についての表象を形成したりはしない。知覚では、意識極と対象極に分かれ、こちらから向こうというつながりはあるが、どこまでが意識で、どこから先が物かという区分があらかじめ決まっているわけではない。あらかじめ確定された意識と物を志向性によってつないでいるわけではない。現われは体験的直接性であって、すでにして成立している世界のことであり、そこには体験的行為を行う身体や時間がおのずと含まれている。こうした現われの出現においてすでに含まれている身体や時間を、新田義弘は「現われの媒体」だと呼んだ。端的に言えば、フッサールの行った「現われ」という領域の設定が、途方もない深さをもっていたのである。

こうした現象学から見れば自明の事態を、認識論で語ろうとすると、意味から語り、意味の場を語り、意味の場の多元性を語るようなことになる。意味の場とは、現象学で言う「地平」のことであり、地平は知覚の継続のなかでそのつど変貌していく。これはすでに見飽きた「地平主義者」の言い分である。むしろ現われは、生存の重さと深さをかけておこなわれてしまっている体験的現実である。

その現実の内実に迫るような探求をすつとばしてしまうと、どうしても「地平主義者」に行きついてしまう。新田義弘以降の日本の現象学第二世代には、こうした「地平主義者」がかなりいた。地平主義者には好都合なことだが、世界とは「地平の地平」のことであり、地平相互の移り行きや地平相互の比較が必要な時に、どこかで想定されているもののことである。人間の言葉にはうまい言葉がないので、とりあえずそれを「世界」と呼んではいけない理由はない。

地平主義者は、たとえば統合失調症タイプの世界の不連続点にすでに過度の自明さをもって生きている人や、脳神経系の疾患を背負い固有の世界を生きてしまっている人たち、固着を体験の基本的なモードにしている人たちに対して、世界は多元的であるなどという言い分が、ことごとくすれ違ってしまうことに思い至ることがない。あるいは思い至ってもそれに対してどう対応するのか選択肢を設定することができない。世界は多元的であるという言い分がまったく通じない人たち、多元的であることにことごとくすれ違ってしまう人たちは、実はたくさんある。

ただし1箇所、ガブリエルの議論にも、こうした体験的現実にも迫るような箇所がある。それは末尾に近い「感覚」を論じた部分である。ここでの議論は、意味や意味の場やそれらの多元性とはまったく異なったことが語られている。「感覚」は意味の母体ではあるが、それじたいはいまだ意味ではない。

わたしたちの感覚はけっして主観的なものではない、ということです。わたしたちの感覚は、わたしたちの皮膚のしたに、あるいは皮膚の表面に挿入された添加物ではありません。むしろ感覚とは客観的な構造であって、わたしたちのほうはそのなかに存在しているのです。

(マルクス・ガブリエル『なぜ世界は存在しないのか』288頁)

主観と客観の区別をおこなっておくと、感覚は配置に困るようなものである。感覚は、主観から客観を感じ取るような働きではない。だからと言って、感覚は「客観的な構造」というわけにもいかないのである。眼を開ければ外界が見えている。眼という働きは、すでに視界一面に広がっている。眼球の構造は、身体の一部に属している。眼球という器機と眼の働きは区別して考えたほうが良い。そのとき感覚という働きこそ、はじめて「内外の区分」を行っているのであって、それはすでにして世界の現実と地続きなのである。感覚は、主観、客観の区分以前の働きであり、まさに感覚をつうじて現実のなかに区分が生まれてくる。感覚には、本来「内部も外部もない」。そしていまだ意味もない。感覚はそこから意味が出現してくるさいの母体であり、意味の場の形成に不可分に参与している。

ガブリエルの論証的な議論の多くは、カテゴリーの論理的誤謬を取り上げてい

る。存在者の存在と「存在」そのものを同列に同じカテゴリーで扱うことはできない。脳神経系の事実をどのように積み上げても、現われや意味をそれで置き換えていくことはできない。それぞれは意味の領域を異にしており、あるカテゴリーを他のカテゴリーに置き換えたり、あるいは帰着還元できない。それはその通りである。

そのとき同時にカテゴリー間の関係は、どのようなものかという問いは残されたままであり、その場面でそれぞれが固有の対象領域だとすると、そこに「多元論」が出現していた。奇妙なことにこの多元性を見極め、多元性のなかを自由に移動していく「人間」(主観性)だけは、多元的ではない。この「人間」がこっそりと前提されながら、なお多元性の間を自由に移動する主観として最大限の働きをしてもいる。この人間の行っていることこそ、意味や意味の場とは独立の「経験」なのである。この経験こそ、哲学の現場である。

あるいは多元論という事態には、多元性を見分けている人間という主体が多元性の外に暗に前提されている。多元性の主張は、まさにそのことによって多元的ではない。こうした議論そのものは、実はすでに手の込んだ冗談に近い。

こうしたガブリエルの議論に乗りかかりながら、こうした多元論の哲学が論じ残している当面の課題を設定していくつもりである。

### 哲学の当面の課題

(1) 存在には、さまざまなモードがある。存在という名詞の手前に、「存在する」という動詞的な働きがある。存在にさまざまなモードがあることはすぐわかる。伝承や文書のなかで描かれた「悪魔」という存在は、眼前の物体の存在とは、存在のモードを異にしている。「存在する」という動詞には、働きとして多くのモードがあるはずなのだが、それを分析することは容易ではない。

眼前一面の過飽和の水蒸気に満ちた道路がある。そのとき「ヤッホー」と叫んでみる。それによって一挙に霧が出現し、視界が不透明に白濁し、道路さえ見えなくなることがある。この霧の存在は、いったいどのような存在なのか。過飽和の水蒸気に満ちた大気は、流動し運動を続けているが、そこに別の働きが関与したとたんに、相転移が起きている。この相転移は、事象そのものの変化であって、突然現実性そのものが変化したのである。それは意味が変化し、それにもなつて意味の場が変化し移行したようなものではない。存在するという動詞は、ひとつの変化であり、変化そのものを感じ取っているからこそ、霧のなかを進む歩行をしばらく中断したり、元来た道を逆走することもある。少なくとも意味と意味の場が出現するのは、ほとんどの場合、変化の結果を認識したときである。変化の結果だけを認識している場面では、「存在する」という活動をそれとして捉えたことにはならない。

こんなふうに考えていくと、流動体の存在、物(剛体)の存在、有機体の存在、心の存在、物語のテーマキャラの存在、論理的カテゴリーの存在、理念の存在等々は、存在するという活動態のモードがそれぞれ異なっている。たとえば魂については、多くの人がそれとして論じ、対象領域を形成している。ところが医学的に見れば、魂は活動の複合体であり、それが語られるのはひとつの比喩としてだけである。中世の文献のなかでは、「魂」という語は意味を形成し、対象領域を形成している。ところが現代医学のなかでは、比喩としてだけ活用され、比喩的な意味ではあるが、医学という対象領域には「魂」は存在しない。意味の場が異なれば、魂は存在しなくなる。この場合には、意味の場そのものの相互の比較が必要になる。だが存在の数や原理の数を増やしてはならないというのは、オッカムの鉄則でもある。

同じようにカントが『純粹理性批判』で取り上げているような、燃素(フロギストン)の話がある。これもひと時語りのなかで存在していた。燃焼時に物体から飛び出る何かである。燃焼とは物体から燃素が出ていくことだと考えられていた。そしてこれは多くの燃焼の現実に適合するのである。まだ化学元素の整っていない時期の話で、これはこれで成立している。後に燃素は存在せず、物体から出ていくのは、炭素や水素であり、そのさいに二酸化炭素や水蒸気のような化合物となる。酸素の化合と燃素の発出は表裏の関係だが、意味の場は異なっている。とするとこの場合には、たんなる多元論ではすまない。燃焼という意味の場そのものが変容し、存在すると思われていたものが、端的に消滅する。ガブリエルの「新實在論」は、むしろどこかかつてのパラダイム論に似てくる。

物(剛体)の存在は、ひとつの活動態がある場所を占めることである。ガラス窓では主要成分である珪素が600年程度の周期で運動しており、そのことによってガラスは維持されている。この維持の仕方が、ある場所を占めることにつながっている。ガラスは光を通すほどの隙間に満ちているが、水を通すことはない。この通過できなさが、ガラスという個物の位相領域を形成している。そのため物の存在は、ある場所を占め、かつその場所を他のものによって代替的に占有されないことである。これは物がそれとして在ることの仕組みにかかわっているのであって、意味と対象領域にかかわってはいない。

有機体の場合には、占有する場所をみずから変える。植物は成長し身体を変えることで場所を変える。動物は移動することで占有する場所を変える。それをつうじて場所をみずからに固有のものに作り替えていく。それが「生態的地位」と呼ばれている。有機体は、場所をみずからに固有の位相空間に換えてしまう。それが、有機体がそれとして「みずから生きている」という意味である。

それでは心とはどのような存在の仕方をするのか。最も安直な答えは、心は活動の複合体であって、単独活動態ではないとすることである。そのため特定の存



在の仕方をするわけではないことになる。心は一つの働きであり、働きは通常は持続的な活動態の場合には、場所を占める。あるいはみずから場所を指定する。ところが心のなかでも、「主観性」ともなれば、そもそも場所を特定しないことが特徴となる。デカルトの定式化と同じように、精神の本性は、「思うこと」であって、「位置を占めること」ではない。主観性は、どこにあるのかという問いが主観性そのものとすれ違うのである。こうした人間の主観性を暗に活用することで、実際のところ、対象世界の多元論が成り立っている。

こう考えていくと、一つの重要な帰結が生じる。活動態がそれとしてみずからを個体化するという場面が、「存在する」という動詞の必要条件であることだ。このことを軸として考えてみると、映画や文学作品のキャラは作品という場所に、それじたいでどこかを占有したとき、「存在する」ことになる。そうなると何かが存在するかどうかは、むしろ個体化という活動の副産物であることになる。有機体の場合には占有する場所をみずから変えていくことが個体化に含まれている。このとき存在とは、実は派生的な問題の一つである。問わなければならないのは、個体化そのものの仕組みだったのである。

シェリングが、初期の自然哲学で、絶対的産出と阻止から、物質を導き出していた時、物質の個体化と現実性の出現をともに合わせて処理できるような構想を立てていた。絶対的産出や阻止は、動力学の仕組みを使っており、時代の制約下でなされた構想である。だがたとえば仮構された仕組みがどのようなものであろうと、個体化と現実性の出現は、同じ事態の二つの側面であるというシェリングの構想は、おそらく決定的に重要なものである。

世界が存在するかどうか。それはエネルギーの場が存在するかどうかという問題に似ている。個体化以前の場面では、人間の能力では存在するかどうか答えようがないのである。

(2) 物事も事象も生成する。意味も生成する。おそらく世界も生成する。生成するものはいまだ意味は決まらない。意味になるかどうかもわからない。そもそも生成は、認識の対象にはならない。また理解してそれとして捉えられるようなものではない。生成もプロセスも、そこになにかは感じ取られてはいるが、意味が分かるというようなものではない。

認識は、すでに生成の終わった後の結果しかとらえることはできない。それが認識の宿命であり、認識とはそれが成立したとたんにすでに終わった場面から物事を捉えようとする営みである。認識そのものの出現では、日常的な言い方をすれば、何が起きているのかわからないという場面を通過するはずである。その場面が「経験」(途行き、行為)の本来の姿である。

このとき何が起きているのかわからない途行きを進みながら、どこかの段階で経験の進行の予期が働き、中途の安定場所(経験の踊り場)で認識が形成される。

これを認識の獲得だとして、途行としての経験を認識へと回収していく作業が、ヘーゲルの議論の要となる仕組みである。何かが経験に起きる。起きている事象をやがて出現する認識に包摂する。この包摂をつうじて、認識はより包括的で、高度なものになっていく。この場面で、認識を獲得したとき、認識そのものをひとたび括弧に入れ、次の途行への多くの選択肢を思い描きながら、さらに別様に継続可能なありかたを模索し、試行錯誤することもできる。認識に包摂することに代えて、認識の安定そのものも一つの副産物だとして括弧に入れ、その場面で再度途行の可能性を拡張していくこともできるはずである。これを「プロセス的還元」と呼んでおこうと思う。

この試みに敢然と挑んだのが、シェリングの「思考以前のもの」にかかわる考察であり、思考から見れば、すでに忘れてしまっている経験の層を思い起こすようなものである。思い起こすことのできない過去は、「先験的過去」と呼ばれ、想起するとは別の仕方でも思い描くことができるとシェリングは確信している。それが「神話学」である。こうして経験を集約することに代えて、経験の多次元性を前面に出すことになる。

ここから結果として、副産物としての多次元論が成立する。多次元論は、論証の最終目標ではなく、経験の途行の副産物でしかない。これがオートポイエーシスの世界である。こうした方針を採用する理由ははっきりしている。芸術家の創作の場面では、認識のなかに制作行為を包摂したのでは、すでに創作ではなく、評論家に転化してしまう。芸術的製作を、作られた作品の鑑賞に押しとどめてしまうことになる。これではほとんど経験が前に進むことはない。また障害者の行為形成を行う治療では、認識で自分をわかっていても治療が進むということにはならないのである。

オートポイエーシスで副産物のように形成された多次元世界が、こうした図である。これは副産物であって、こうした図柄を見て認識の成果だと考えたのでは、ただちに筋違いとなる。こうした認識を括弧に入れ、行為(途行)へと戻っていくことが、「プロセス的還元」である。こうした図柄は、あくまでも世界観であって、世界の見方にすぎない。「世界観」こそ、初級者の誤謬である。ゲーテが言うように、分かるということは、まさにそれによって何も分からないのである。そこで「行為することが必要である。」認識の反省によって形成されたこうした多元論の図柄では、反省をつうじて反省そのものを括弧入れしていくことが必要となる。こんなふうを考えていくとこれは世界観レベルの哲学ではなく、むしろ「職人の哲学」である。多くを語らず、黙々とみずからの制作物に工夫を続けるものこそ、職人である。芸術家や優秀な科学者や稀な哲学者が、遂行しているものこそ「職人の哲学」である。

生成の感じ取りに対しては、多くの場合、身体行為とともにすでに対応してし

まっている。変化率に対しては、ともかくも何かを行ってしまう。これが生きていることの本性である。ゲーテは、「眼は光によって光へと形成される」と述べていた。認識そのものの出現の場面は、いつもどこか神秘や奇跡に満ちている。出現の姿を、ゲーテは「色彩論」で論じようとした。光と影の条件を代えて、次々と色彩を出現させていた。色彩は意味ではない。見ることの出現の姿こそ、色彩である。だから空の青こそ、色彩の法則だと言い、空の青の背後に何も探してはならない、とゲーテはいう。とすると意味の形成以前の広大な体験世界があることになる。

これをどのように扱うかは、現在でも確定できない。手法としては、体験的世界の解明的方法的な手続きである現象学を活用することになると思われるが、同じ手法を何度もただ適用するような現象学が求められているのではない。

意味の手前の世界には、さまざまな事象が含まれている。たとえば身体である。身体は、どのように語られようと、意味ではない。語りのなかで捉えられた身体は、「身体について語られた意味」である。どのように語られようが、それについて語られている身体そのものは、体験的な直接性である。つまり生身の身体であり、直接的な事象である。認識された身体は、生身の身体とは別のものである。

身体はみずから動き、身体はみずからを感じ取っている。しかも心のような反省的にみずからを捉える仕組みはない。だからと言って、身体はたんなる物体ではない。自己反省のような仕組みはないが、物や意味のように対象領域を形成するわけではない。身体は心のように自己制御できるものではないが、さりとて心から切り離して別物扱いできるわけではない。

身体については、圧倒的に語るための言語が不足している。人間の言語は最初から対象についての名前と記述か、感情を整えるための音楽性を帯びた言語か、いずれかである。つまり人間の言語の成り立ちからして、対象記述か内観記述になってしまう。人間の言語は、最初から主観、客観に分離するように作られている。この言語を用いたのでは、身体についてはうまく語れないようになっている。この人間の言語のおかげで、残念ながら人間の能力は構造的に抑え込まれてしまっている。

この言語の現状に対して、メルロ＝ポンティの取った戦略ははっきりしている。比喩で言い当てるというやり方である。よくもまあこんな表現を思いつくものか、というほどうまい比喩を繰り出すのである。ひととき分かった気になることができるが、さりとて何が語られたことになるのかがわからない。言葉を置き換えようとする、メルロ＝ポンティの記述したこととは異なることになってしまう。メルロ＝ポンティは綱渡りのような比喩で、身体を描こうとした。

身体を描くためには、言語の限界で言語を活用する能力が必要となる。つまり身体を論じる哲学者は、詩人でもなければならない。一人の人間の言語感覚から

見て、メルロ＝ポンティの夥しい量の比喩は、どこかから借りてきたものだという思いはすぐに浮かぶ。しかもすぐ近くに優れた言語能力を備えた詩人がいた。それがポール・ヴァレリーである。ヴァレリーからメルロ＝ポンティは大量の比喩を借りている。メルロ＝ポンティには晩年の『見えるものと見えないもの』という優れた著作がある。そこに「キアズマ」(交叉)という優れた論考がある。視覚と触覚のような異なる働きは、共通の第三者によって統合されるのではなく、どちらかがどちらかを制御するのでもなく、一貫してそれぞれは働き、かつ交叉しているという内容である。「キアズマ」という語も、ヴァレリーから借用したものである。その語を、ヴァレリー自身は「不倫」の心性を表すために使っている。

意味の手前にある事象の一つが「環境」であり、「環境世界」である。人間が生きているとは、環境内を生きることであり、環境は認識対象ではなく、人間の生を取り巻いている。視覚的な比喩で言えば、人間を取り囲むように広がる世界である。環境世界は圧倒的に多様であるが、この多様性は、対象として捉えられた意味と意味の場の多元性とは異なったものである。ここが多次元性が出現してくる場所である。人間は、ハエにはハエの固有世界があり、ダニにはダニの固有世界があるということを推し量ることはできる。だがそうした固有世界に、視点を移動させるようにしては、住まうことはできない。魚は4原色だから、人間の見えている海とは異なり、圧倒的に鮮やかな環境世界を生きているはずだが、人間が実行できるのは、それをシミュレーションすることだけである。つまり薄々分かってはいてもそれを実行することができない多くの多様世界を、人間は周囲に抱え込んでおり、それと共存していることになる。

環境は、どのような意味でも対象に落とし込むことはできない。そのため意味ではない。その分だけは、環境への考察は、二重に視点を移動させるような工夫が必要とされる。当の個体からどのように環境が捉えられているかという当事者への視点移動と、当事者がすでに自明な形でそこで生きてしまっていて、当事者さえ認識の手前ですでに生きてしまっている環境への視点移動である。

(3) 世界観を軸に哲学を展開していくと、決定的に欠落してしまうものがある。認識は、言語と視点移動によってだけなされるのではない。そこには身体とともに行われる多くの「手続き」がある。見方や観点で置き換えると、哲学的世界観や宇宙観、科学的世界観のような議論になりがちである。いずれもただの「観」である。観を競ったのでは、なにか現実性とすれ違い、まったく別のことを情報と言語と論理だけで論じていることになる。

ガブリエルは、メイヤスの主張を「偶然は必然である」と要約し、みずからの主張は、「必然は偶然である」と要約している。概念の比較だけであれば、必然が成立するためにはそれに対置される偶然をみずからに不可欠なものとしな

ければならず、まさに必然は偶然に対置されることではじめて成立することになる。ここが最初の概念操作である。

メイヤスの主張は、どのような現実であろうと、つねに別様になる可能性がある、というものである。現実とは、それとして別様になる可能性を内在させているのだから、つねに偶然性を本来的なものとして孕んでいる。これが偶然は必然的であるという意味である。これに対して、ガブリエルは物事を必然だと記述できるためには、必然性(最低限の条件は無矛盾)を証明するための証明の枠がなければならない。ところが必然的な言明の証明を同じ言明の集合から行うことができない。そうすると必然性の証明は、それとして閉じることができない。必然性そのものは、偶然性にかかれてしまう、ということになる。これが「必然は偶然である」ことの意味である。どのように強力な概念的規定(英語では概念的決定としか訳せない)であっても、それじたいは偶然性にかかっていることになる。そしてガブリエルは、自分の主張はメイヤスよりも、より強力な立場だということである。

こうした議論に直面したときには、そこからどのような持続的な課題が取り出せるのかを考えてみるのが肝要である。メイヤスの場合、数学的な無限性において、つねに新たな現実性の局面が出現するかもしれないことを立論の基調にしている。「無限性」そのものを人間は捉えることができない。だから無限性という言葉は、ひとつの大雑把な要約にすぎない。構想を課題へと転換していくために、この場面で「手続き的な経験」が必要とされる。それがだせなければ、ただ言ってみただけである。

ひとつだけ取り上げてみる。人間は一応3次元物体である。いま腸の襞を被覆法で一つ一つ覆ってみる。四角か円の面を使って、繰り返し襞を覆い、面の量を確認していく。面だから2次元である。このとき四角や円で覆うことのできない剰余の部分が大量に残る。この剰余の部分を足し合わせてみたとき、無限に発散したとする。すると2次元の延長で2次元に回収できない領域が生まれる。これは2次元の延長上にはないが、しかしいまだ3次元ではない。とすると2次元と3次元の間には、現状ではいまだ人間が確定することのできない小数点以下の次元があることになる。たとえば2,67次元や2,83次元が存在することになる。次元と次元の間には、際限のない隔たりがあり、その隙間で何が起きているのかはわからない。またそれぞれの固有の次元をどのようにして確定できるのかもわからない。無限を問題にすれば、こうした持続的で展開可能な課題が出現してくる。これはメイヤスにとっては、有利な事例である。こうしたことが手続き的な経験である。

自然現象から取り出してみる。お椀をかぶせたような半円球の真上から、水滴を連続して流してみる。水は半円球に当たって右か左かに分かるとする。確率

的には、右半分、左半分に分かれて落ちるように設定しておく。落ちてくる水は、左右均等に分かれてもおかしくないが、実際には一方へ9割、他方へ1割のような落ち方をする。最初の水滴が右に落ちるか左に落ちるかは、確率的な偶然である。つまりそこには「揺らぎ」が含まれる。この揺らぎはメイヤスの言う「偶然」の物理的な事例である。そしてひとたび右左のどちらかに落ちれば、水滴の落ち方にはっきりとした傾向が出てくる。水滴の落下に「履歴」が関与するのである。この事例の場合には、自然界には論理的な意味での絶対的必然も絶対的偶然も存在せず、そのため必然や偶然という概念を振り回すことが、事態を混乱させていることになる。起きていることは、現実の手続き的な進行であり、そこで起きることの仕組みである。

ガブリエルの行っていることは、正当化(基礎づけ)の手続きが、完備しないということに集約される。 $78+65=143$ は正しい計算である。だがなぜ正しいのか。 $1+1=2$ という基本的な計算の仕組み(加法の定義)を入れておけば、この定義のもとで導くことができる。だがなぜ $1+1$ は2なのか。それ以外でも良い。 $1+1=3$ として定義すれば、その定義の延長上でそこから導かれる解は決まる。 $1+1=2$ の正当性は、演算の枠内では決まらない。これが必然は偶然だということの手続き的な意味である。だが $1+1=3$ だとすることの意味は、 $1+1=2$ を対照とし、そこからしか決めようがない。 $1+1=2$ はたんなる定義の一つではなく、加法という手続きの意味を担うためのモデルケースなのである。

そして加法という手続きが、どのような操作なのかが決まらないという事態を示したのが、クリプキである。

答えは正解であっても、そこでなにが起きているのかは決まらない。内在的な未決定性が残ることを、クリプキの議論は示唆している。実際に人間でも同じ答えを出していても、同じオペレーションを行っているかどうかは不明であり、コンピュータの計算では、同じ回答であっても異なるオペレーションを行っていることは明らかである。クリプキの議論は、必然性のなかに偶然が含まれることを示していることになる。

クリプキの議論によれば、たとえ解が正解(必然的)であっても、そこには偶然が含まれる。この議論の立て方は、ガブリエルが持ち出すような必然的正当性の証明が完結しないという場面ではない。正当であることをあっさり認めても、なおそこに内在的な偶然が含まれるという事態である。これはガブリエルが持ち出している事例以上に、ガブリエルにとって有利な事例である。正当化論証が完備したものにならないという話題は、ミュンヒハウゼンのトリレンマとともに、ゲーデルの「不完全性定理」ですでにさんざん議論されてきた。だが正当化論証とは、本来異なるところに問題があったのである。これらの事例は、反省的な多元性に代えて、むしろ多次元性を示している。

数学や物理学は、哲学に似て、根本のところを探し出すような作業である。最も基本的なところで世界の成り立ちを支える原理を取り出す手続き的な作業である。それを科学的な世界観と言ったのでは、たんなる評論家の言い分になってしまう。そして素直に認めた方がよいと思うことだが、優秀な数学者や物理学者は、哲学者以上に哲学的である。哲学者だけが哲学をやっているわけではない。ガブリエルには、どこかで哲学者だけが哲学を行っているという暗黙の思いが前提されている。そこから「自然主義」や「科学主義」への無理解による余分だと思えるほどの批判が繰り出される。

科学は、世界観ではなく、どのように成果をだしても、世界観を目指してはいない。測定器具を作成し、測定のための理論を作り、そのうえで仮説を立てて事実を確定していく。すべて手続き的な行為である。それまで見えなかった現実を見えるようにし、ときとして新たな現実を創り出しても行く。科学を世界観として捉えたのでは、こうした手続き的行為は語られることもなく、傍らを通り過ぎられてしまう。

(4) 哲学の進歩(前進)はどのようなものか。これは奇妙な問いなのだが、哲学は多くの場合、命題を扱い、命題形式で叙述する。命題では真偽が決まる。そして日常言語の大半は言明であり、真とも偽とも言えない。「私は、明日の試合には勝ちます」という言明は、決意や覚悟の表明ではあっても、命題ではない。たとえ明日の試合に負けても、誰も嘘を言ったとは言わず、残念だったねとねぎらうことになる。偽の命題を排除し、偽を訂正して、真の命題だけを集約すると、哲学は前進することになる。本当にそうなのか。

たとえばデカルト的世界観では、世界は二つの原理(思うことと延長すること)で設定されている。ここで言いがかりに近い議論を向けてみる。なぜ原理は二つだけで、二つだけにとどまるのか。これが世界観レベルの言いがかりであることははっきりしている。哲学的にはおかしくても、そこから派生的に巨大な変化をもたらしてしまうことはいくらかでもある。延長は、条件を変えて圧縮すれば、点になる。点から成る世界は、幾何学の世界である。そこからデカルトは、独力で「解析幾何学」を作り上げている。たとえ世界観レベルで奇妙な世界を描いたとしても、そこから持続的で発展的な展開が生じれば、それは大きな前進をもたらしていることになる。デカルトの「機械論」はさらに圧倒的な派生效果をもっていた。インドにも中国にもこうした機械論は存在しなかった。ところが機械論は瞬く間に世界を制覇したのである。デカルトは、死体解剖から人体を細かくとらえることの限界を知り、たとえば心臓の仕組みを知ろうとすれば、井戸のポンプを調べた方がよいとやり方を変えている。それによって心臓の解剖に代えて、ポンプを見ることで、仕組みや働きを「拡大鏡」にかけるように捉えていくのである。これが機械論の骨子である。現実性のなかに視覚的な比喻の自在さをもたら

したものが「機械論」である。光が当たって反射していくさいの規則は、テニスボールの跳ね返りから定式化している。機械論は世界観ではなく、一つの手続き的な経験だったのである。

この時期、哲学はいまだ職業的な専門としては成立していない。哲学とはある意味「何でも屋」であった。スピノザはレンズ磨きをやり、ライプニッツはハノーヴァーの行政官だった。カントの頃から哲学が専門職業化して、それ以降哲学という特殊領域が形成されるようになった。哲学はこれ以降、もっぱら「概念」(言語のなかでも普遍性をもつもの)を扱うようになっていく。カントは大学の教員として、立派な職業的哲学者であった。要するに哲学で食べていけるようになったのである。これは普通のことではない。哲学が職業的な専門性として成立することが、哲学にとって良いことなのかそうでないのかは、よく分からない。また善悪を決めるようなことでもない。

哲学はいつも時代の子であり、多くの隣接領域のなかでしか、前に進むことはできない。哲学は隣接領域に巨大な変化をもたらすこともあれば、芸術家に靈感をあたえることもある。逆に、隣接領域から多くのアイデアをもらうこともある。レヴィ＝ストロースは、多くの神話を収集し、そこに含まれる規則性を明らかにしてくれた。そこには当然のことながら規則には収まらない事例も多くある。絵画の制作や身体表現(舞踏)の制作の現場に立ち会うことは、機会さえ求めればいくらかでも可能である。制作のプロセスそのものを作品とするような作品もある。

はっきりと分かることがある。哲学は哲学だけに留まることはできず、哲学に留まってはならないのである。哲学は経験の弾力を回復し、経験の弾力を高める営みである。この経験の弾力を高める試みが、反省の実行と反省の限界の認識からだけもたらされるとは、とても思えない。ガブリエルの才気は、素直に認めてもよい。だがそれ以外にも、哲学は多くの課題領域に開かれている。際限のない課題に開かれてしまう局面に立ち会うこと、それこそ哲学が終わることのできない理由である。

## 参考文献

河本英夫『オートポイエーシス-第三世代システム』(青土社、1995年)

河本英夫『メタモルフォーゼ——オートポイエーシスの核心』(青土社、2002年)

河本英夫『システム現象学：オートポイエーシスの第四領域』(新曜社、2006年)

河本英夫『経験をリセットする—理論哲学から行為哲学へ』(青土社、2017年)



- 河本英夫『哲学の練習問題』(講談社学術文庫、2018年)
- 河本英夫「方法としてのオートポイエーシス—体系とは異なる仕方」(村上勝三編『越境する哲学』春風社、2015年)73 - 93.
- 河本英夫「ゲーテ自然学とオートポイエーシス」(『モルフォロギア』第38号、2016、11)24-36.
- 河本英夫「自然という現実性——一つの科学哲学的考察」(『国際哲学研究紀要』別冊Vol.9、2017)27-52.
- ガブリエル『神話・狂気・哄笑 ドイツ観念論における主体性』(大河内泰樹、斎藤幸平監訳、堀之内出版、2015年)
- ガブリエル『なぜ世界は存在しないのか』(清水一浩訳、講談社、2018年)
- クリプキ『ウィトゲンシュタインのパラドックス—規則・私的言語・他人の心』(黒崎宏訳、産業図書、1983年)
- メイヤス『有限性の後で：偶然性の必然性についての試論』(千葉雅也、大橋完太郎、星野太訳、人文書院、2016)
- ヤニツヒ『制作行為と認識の限界：行為としての自然科学』(河本英夫、直江清隆訳、国文社、2004年)



## 4 経験という現実性

哲学は何を課題とするか。これはいつの時代でも哲学に向けられる疑念であると同時に、哲学そのものが自分自身に課す課題でもある。事実の精確な認識と確定では、科学技術にまさる手続きがあるとは思えない。だが科学的方法が、一切の知の基準になるのであれば、哲学には、周辺を埋める落穂拾いのような作業だけが残されているのか。

哲学の課題は、経験の可能性の範囲を広げ、経験に弾力をもたせ、経験の可動域を広げていくことである。カントが哲学を「経験の可能性の条件」の解明だと設定したとき、すでに人間の可能性はあらかじめどこかで決まっているという前提を置くことができた。だが人間の可能性があらかじめ確定しているという前提こそ、「古典期」に特有なものである。むしろ必要とされるのは、「人間の経験の可能性の拡張の条件」の解明である。そのためにどのようなプログラムを組み立てて行けばよいのかを事例とともに示してみる。このタイプの哲学は、経験科学で言えば、「医学」にもっとも近く、さらに使うことのできるもの、有効に活用できるものは、何でも使うという、ある意味での「何でもあり」が指針となる。

### 1 何を手掛かりとし、何を材料とするのか

知的探求全般を自然科学的な手法を手本として実行するやり方を、「自然主義」と呼び、知に対しての反省の仕方までも科学的手続きで実行する仕方を、「科学主義」という。自然主義と科学主義の仕組みを明確に区分しておくことが重要であり、「科学主義」は、論理実証主義やカール・ポパーに代表される「反証主義」に見られるように、知を方法的な制御下で判定していく仕組みである。そして「科学主義」は、反省の仕組みさえ科学的に実行する方法的な手続きであるため、むしろ経験そのものを狭めていくことになる。歴史的事実として、成功した「科学主義」は存在しない。

**科学主義** 反証主義は、二つの基本項目、(1)個々の事実に対して批判的な検討を試みること、(2)さらに大胆な仮説を提示することからなっている。事実や理論仮説を批判的に検討するさいには、物事の真偽が決まるはずだという大前提が置かれている。偽であると証明されれば、それを放棄し、さらに大胆な仮説を提起すべきであることになる。しかし精神分析や進化論のように、簡単には真偽が決まらないものが圧倒的に多い。真偽が決まるのは、「排中律」が維持されている

場面だけである。ところが排中律が当てはまるかどうか分からない事象は、無数にある。そもそもヘーゲルの弁証法は、排中律を放棄することで成立している。

一般的には基本的な科学法則は、真偽の判定ができないものが多い。たとえば力学のなかの最も基本的な法則である「慣性法則」は、さまざまな吟味を行うさいにすでに慣性法則そのものを前提にしている。時計を用いて計測を行うさいにも、秒針の運動が刻一刻同じ間隔であることを前提にしている。ここにはすでに慣性法則が前提されている。実証的な計測手段では、慣性法則そのものの真偽を決めることはできない。

そのため慣性法則は、法則というよりむしろ近代の公理に近い。そして慣性法則の意義は、この法則によって歴史的に難題だとされた多くの問題が消滅したことである。この法則は、多くの問題を解決したのではなく、それらを疑似問題だとして、消滅させたのである。

(2)の大胆な仮説の提示とはどうすることなのか。進化論的に見れば、突然変異によって新たな新種のきっかけは確率的偶然によって、しばしば起きているに違いない。だがそうして新種がたとえ出現したとしても、既存の安定した種の前に圧倒され、またたくまに消滅してきたというのが事実に近いと思われる。そのため大胆な仮説は、それだけでは意味がないのである。それに代えて、「持続的に展開可能な仮説」の提示が必要となる。そのときどきの時間的な場面では、個々の仮説は「大胆」であるかどうかは決まらず、また展開見込みのある仮説であるかどうかも決まらない。

こうして反証主義にしたがう、科学的な方法による知の吟味は、おそらく成功しないのである。というのも知の吟味に科学的方法が適応されるさいに、方法の適用に相応しい対象がすでに選択されていなければならず、適用する行為そのものは、科学的方法の枠内に留まることはできない。

知一般への反省は、真偽の吟味だけではなく、知そのものの展開可能性を含まなければならない。また同時にそのことをつうじて、経験そのものの可動域を拡張し、経験の弾力を高めていかなければならない。

科学主義は、科学そのものの成り立ちを誤解している。近代科学は、おそらく3つの座標軸で張り出された位相空間で営まれる作業である。運動とは独立の時間が設定され、物質とは独立の空間が設定される。そこでは「極限化」という操作を行う思考法が前景にでる。それを現象学者のフッサールが「理念化」と呼んだ。極限が、現実のさなかに存在するという途方もない仕組みをガリレイが導入した。そして極限そのものをあらかじめ存在する座標軸のように、当初に「設定」できる、という設計を行ったのである。「設定」という語は、含みが大きく、一番近いニュアンスは、「セットアップ」である。

このことによって測定を座標軸に結びつけることが可能になり、量的科学のな

かに「測定の度合い」、すなわち「測定単位」をさまざまに変更できるという仕組みが導入された。実は時間、空間も測定をつうじて用意されてきたというのが実情である。しかし測定のなかでの時間とは、指標に留まっている。その指標を独立の座標軸として取り出したのが、極限化である。ここで座標軸と測定が内的に結びついている。そしてこれらは、当時いまだ「私家版」にすぎなかった「代数学」と結びつくことになった。X—Y 座標(デカルト座標)の誕生である。ここに書き込まれたのが、各種物理学の法則である。極限化による座標軸の設定、すなわち変数の設定、測定単位の任意の変更、数学的表記の三位一体が、近代物理学の構造的な枠を決めている。こうした仕組みそのものが、新たな課題として問われるときには、科学そのものが、別様の可能性への展開圧力に晒される。既存の枠組みの中で、真偽を問うことは、ほとんど筋違いの議論となる。

**自然主義** 自然主義は、ヘーゲル没後、19世紀の半ばから急速に拡大し、それは探求手法だけではなく、知的態度にまで変更が及んだ。手本となる手法を提示していたのが、化学者リービッヒ(ギーゼン大学)が行っていた『年報』である。実験的に解明できた事実のみを端的に記すやり方で、それが科学的記述の典型例となっていく。それ以前の知的探求は、いずれにしろ『百科全書』が基本となる。自分自身で明らかにしたものではなく、すでに解明されていた事実や知見を網羅的に書き込み、一つの知の集合体として記述を行っていた。だがリービッヒ以降、科学的な記述は、余分なことは記載せず、先行者の知見と自分の明らかにしたことを峻別し、新たに明らかにできたもののみを記すことになった。こうして科学と哲学とは、探求の方法も記述の仕方も分離していくことになる。この後、哲学と別れた科学をさらに拡大していくとき、自然主義が生まれる。

自然主義にはいくつものタイプがあった。たとえば科学内の特定の概念を取り出し、そこを中心にして世界像を組み立てるようなやり方である。オストワルドは、「エネルギー」という語を取り出して、科学法則とは独立に、この用語を世界論として展開する要の位置に置いた。同じ時期にドイツの生物学者ヘッケルも、進化論を中心として、一貫した科学的世界観を提示している。いずれも科学的世界を知的世界論に一貫して拡大する仕組みで述べられている。つまりその時代の科学的説明の範囲を超えて、世界について一貫して科学的に説明するという作業が行われている。

**科学一元論** ヘッケルの場合、進化論に特有なことだが、伝統的な宗教教義との戦いや、心霊学説との戦いも、同時に進めなければならなかった。そこに持ち出された「旗印」が、「一元論」(モニズム)であり、19世紀の終わりには、モニズム運動は、一つの社会活動であった。ここで起きていることは、科学的啓蒙であり、科学であることが有力な世界観であることを主張するものである。ヘッケルは、誰も見たことのない最小の生物単位を「モネラ」と命名し、そこからすべて

の事象の進化論的な形成を描いたのである。こうして科学的世界観を一貫して世界論にまで拡大することは、すでに科学的であることの限界をおのずと超えてしまっているのである。

また特定の法則そのものを世界論に拡大していくような議論もあった。たとえばハーバード・スペンサーは、進化を、人間を含むあらゆる事象に適応し、宇宙進化論のなかでの人間の在り方を考察する仕組みを構想している。スペンサーは「進化とは差異の増大である」という原則を一貫して説明原理として活用するのである。差異の増大では、奇形や疾患や退行も差異の増大に含まれるのだから、進化の意味を少し変更しなければならない。つまり差異性の増大は、世界の多様性の主張ではあっても、生物の高次化ということとは異なる。

スペンサーの構想では、渾沌とした様な世界から、個々の個物が出現することを進化の基本的な局面だとしていた。だがひとたびある歴史的条件下で個物が出現したのちには、同じ仕組みでそれ以上の進化を考えることは、実は困難なのである。

**方法的手続き** さらに方法的手続きをそのままの仕組みとして展開するような「自然主義」がある。たとえば機械論をあらゆる領域に適応して、機械論的な世界像を描くのである。この場合には、すでに世界像は機械論的なものであり、世界像の基本方針は決まっているのだから、そこから多くの科学法則的な定式化を導くこと、それによって機械論の内実をキメ細かくしていくことが課題となっている。これはデカルト自身が実行したことである。

このとき機械論は、できるだけ少数の要素から一貫して世界を組み立てること、ごく少数の要素の関係に、「定常的な規則性」があることが要求される。そしてこのやり方で進んでいくことができれば、まさにそのことによって機械論そのものはそのつど吟味され正当化される。機械論は、当初は世界観であると同時に、方法的な手続きを刷新するものであり、いわば「発見の科学」だった。デカルト自身は、運動量の保存則、光の屈折の法則等の科学的な成果も出している。

この機械論という構想は、次々と新たに発明される機械をさらに新たなモデルとすることができるのだから、つねに新たな展開の可能性に開かれている。また機械をモデルとすることによっていわば、現象を可視化することができるという点が、既存の知識に対して、圧倒的な強みとなった。たとえば「心臓」について考えようとする、解剖を行って心臓の構造を調べることになるが、それでは心臓の動きについてはわからない。そこでポンプをモデルにして、心臓の動きを考えるのである。ポンプという機械は、心臓の動きを拡大鏡にかけるようにして、可視化してくれる。またポンプの新たな改良型は、さらに細かな心臓の動きについての知見をあたえてくれる。機械論的世界では、ギリシャ、ローマをつうじて獲得されてきた哲学の言語表現(テクニカル・ターム)に代えて、機械こそが世界

の仕組みを直示する原理となった。

デカルトは、液体の微細粒子分析するさいに、微細粒子は「ウナギ」のようなものだとしている。このあたりがデカルトの可視化の才能である。言葉で、「柔らかい微小粒子」とか「隙間のある微小粒子」とか言わない。言葉で言うのではなく、端的に「物」を比喻として活用するのである。物であるから、「ウナギ」という語は直喩である。物が物の性質を表している。こうして機械論は、比喻の範囲を変え、世界の仕組みを変えていった。言葉は人間の思いを浸透させた「隠喩」から、物そのものが事実を直示する「物言語」となったのである。機械論は、ヨーロッパで生まれたものだが、産業革命の進行とともに、世界中に拡散し、人間の身体も機械であり、ラ・メトリによって人間の魂や精神さえ、機械だと言われた。

**科学の拡張** さらに科学的な原理のなかに、科学としては法則定立できないような科学の限界で設定された構想がある。「エントロピーの法則」(熱力学第二法則)もそうであり、「宇宙生成論」(ビッグバン)のようなものもその例である。

この手法のなかには、科学法則として実証科学的ではないものが含まれる。というのも現実性そのものが新たに出てくる場合には、そもそも計測的な実証科学の手前の事象を扱っているからである。現実性の範囲が変化していく仕組みは、「自己組織化」の議論では広範にみられる。あらたな現実性の出現こそ、世界への問いの仕方の変更を迫るものであった。

こうした傾向は、1950年代から始まり、1980年頃まで多くの科学者が参加して進められた。いわゆる「システム科学」の時代であり、多くのスター科学者が生まれた。フランスでは、プリゴジン、ドイツではハーケンやアイゲンがノーベル賞を受賞した。この時期のシステム科学では、日本での参戦者は多くなかった。理由はよくわからないが、日本的には、こうした発想は馴染みが少なかった。この時期のシステムの発想のなかに、カオス理論があった。そこではいくにかの才能のある日本人の物理学者がいたが、それでも大きな業績が出たわけではない。

この時期の科学的な構想には、いくつも応用可能なものがあつた。量子力学を手掛けたシュレディンガーは、エントロピーの増大する力学的なマクロ傾向に対して、「生命」はそれに反する現象であることを指摘していた。そこから「負のエントロピー」という用語を提示していた。こうした言葉は、いつも一つの比喻である。有効に活用できる比喻は、発見につながる喚起力をもつはずである。負のエントロピーという要素の実体があるとは考えられない。そうなるとこの語は、あるシステムの運動を示しているはずである。語は、手続き的な展開可能性をもつ分だけ、成功する語である。

「自己組織化」の議論は、機械論とどこが異なるのか。機械論では、世界は基

本的に機械として出来上がっており、機械的な規則と機械的な要素の力学的運動から説明される。要素は直線運動と円運動ならびに相互作用だけから一貫して組み立てられるのである。それに対して、自己組織化で問われたのは、「運動のモード」である。このテーマが主題になったとき、哲学は一つの大きな試練を迎えている。

哲学の主要な手掛かりは、言語である。言語のなかで、普遍化されたものが「概念」である。概念を明確にしていく作業が、哲学の基本的な作業に組み込まれている。ところが運動を表現する言語は、基本的には動詞であり、動詞はきわめて数が限られている。運動を言葉で論じるためには、そもそも言葉が足りていない。しかも運動にはいずれにしろ変化が含まれているが、変化そのものを認識で捉えることはほとんど実行できない。認識で捉えることができるのは、「変化の結果」だけである。運動は直接知覚することはできず、認識は運動の外形について知りうるだけである。こうしたことから運動についての哲学の道具立ては、圧倒的に不足している。

**運動の多様性** そのため新たに道具立てを作り出していかなければならない。運動のなかで典型的なものをカテゴリー化して、そこに新たな運動のモードを設定していくのである。するとそれまで見慣れていた現象のなかに、カテゴリー化できるようなものがいくつもあることがわかる。たとえば「渦巻」や「竜巻」は、典型的な運動のモードの一つである。これらは一般に「散逸構造」と呼ばれた。たとえば川の流れの中で、川底の起伏のかたちから小さなゴミが引っかかり、そのゴミの周りに回転運動ができ、小さな渦巻ができることがある。こうした新たな事物の出現が、「創発」と呼ばれる。

こうしたプロセスのきっかけは、なにかの「偶然」である。このタイプの運動の開始には、開始を告げる特定の要因もなければ、開始とその後の展開をもたらす原因は、もはや存在しない。

また川底の起伏にゴミが引っかかったとしても、そこから渦巻が形成されることもあり、また形成されないこともある。プロセスの進展には分岐があり、分岐の地点では、「揺らぎ」が含まれる。プロセスには一義的な決定関係は存在しない。そのためプロセスの進行を定式化すれば、「あるプロセスが、次のプロセスの開始条件となるようにして接続したプロセスの連鎖」ということになる。

渦巻は、出現しては消滅し、また出現するということを繰り返しており、渦巻そのものは運動のモードの類型である。人間の認識は、運動のなかで形成された持続的な「形」を捉えることに適合している。だが運動そのものは感触として感じることはできても、それを直接認識によって捉えることはできない。「持続的な形」とは、運動の副産物である。認識は、ながらく副産物を本質だと捉えてきたのである。渦巻の形は、一定時間維持されるだけの運動の副産物である。しか



も渦巻の形は、実はそのつど形を変え続けている。原則同じ渦巻の形はない。渦巻を形成する運動は、非周期的であり、非規則的である。こうした運動のモードは、カオス運動の特徴である。

渦巻が生じた場合、いくつかの偶然が重なって、さらに大きな渦巻が形成されることもあり、大きな渦巻が当初のきっかけとなった川底の配置さえ組み換えてしまうことがある。この場合には、初期のきっかけからなんらかの運動の形(渦巻)が形成されるだけでなく、この運動のモードが初期のきっかけさえ組み換えてしまう。創発のきっかけさえ組み換えて進行する運動は、もはや初期条件からも、運動の向かう先からも決定されはしない。この局面まで進んだ運動のモードは、すでに「オートポイエーシス」に突入している。

こうしてみると哲学にとってはいまだカテゴリー化されていない運動のモードがかなりたくさんあるという予想が立つ。しかも言語から概念化したのでは届かないような事象が多い。言語から組み立てた運動の代表的な定式化が、ヘーゲルの「弁証法」であった。弁証法は、言語に見られる肯定・否定の仕組みを運動の論理へと仕上げている。骨組みだけを取り出してみれば、弁証法では、否定を介して自分自身の限界を自覚的に捉え、まさにそれによって自分自身の限界を超えていくこと、さらにはそのことをつうじて先行する自分自身の在り方を自分の「契機」として内的に含むこと(止揚)によって、次の段階へと進んでいくというモデルを組み立てたのである。弁証法は言語の肯定・否定をダイナミクスとして活用しているが、運動はまさに運動を継続することで、それじたい多様化していく。そのため運動のカテゴリーは、まさに自然科学から材料を援用し、そこからカテゴリー化していくことになる。

**哲学の課題** この局面で自然主義的な態度は、経験を拡張するうえでも、新たな経験のカテゴリーを導くうえでも有効な科学的構想であり、同時に経験のモードだと考えられる。再度整理してみる。(1)新たな現実性の出現を内的に組み込んだような仕組みを導入することで、哲学は一種の「終わりのない学」として、つねに局面を変えていく。また(2)原因にも、目的にも解消されない、プロセスそのもののなかに入ることによって、経験は視点の転換とは異なる仕方で、新たな経験のモードへと踏み込んでいくことができる。(3)経験はプロセスのさなかを生きることによって、さまざまなシステムに内的な動きを追跡し、そこに含まれた運動の特質を明るみに出すことによって、そのシステムにおいてさらに可能な選択肢の出現に向けて、提言を行うことができる。

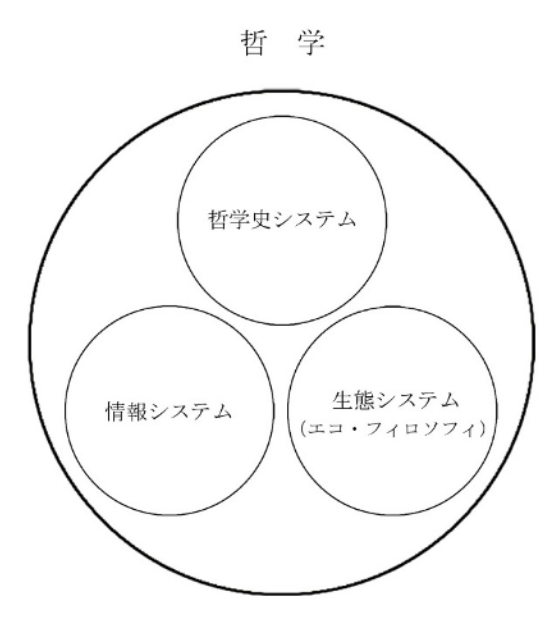
こうしてこのタイプの自然主義は、哲学がこれまで試みたことのない企てに入ることができる。哲学は、自己組織化を手掛かりにすることによって、新たな構造を手にすることができる。運動のモードの探求は、新たなカテゴリーの発見につながり、経験の可能性を拡張していくための不可欠の手続きである。それと同

時に、新たな運動のモードの解明に向けて、個々の経験科学の探求に随伴し、そこに新たな課題を見出したり、新たな選択肢を見出したりする。哲学特有の「問いの設定」の延長上で、現場の科学に対してもいまだ設定されていなかった選択肢の設定を提言していくことができるのである。ここで起きることは、科学と哲学の循環的な相互反省であり、そうした循環がそのつど拡張されながら、螺旋的に拡大していくことである。

### 3 どのように哲学を進めるのか

カテゴリーを明示していくことは、論理学の課題であり、論理は一般に「世界の関節」である。それは現実性が可視化されるさいの最も強力な規則である。論理的なカテゴリーは、創発するシステム、さらにはシステムの分岐に応じて、そのつど見いだされていくのだから、カテゴリーの一覧表は、開集合であり、原則完結しない。だが開集合であってもカテゴリーのネットワークは、次元として一つの領域を占める。

そしてそれを最も見えにくいシステムや、新たなカテゴリーの解明見込みがあるものを選択し、実行してみせなければならない。それを題材として考察していくのである。現実性は、そのつど出現し、多様に分岐する。一般にそれがシステム(体系)の姿である。だがそのつどの探求では、ターゲットを絞っていかなければならない。哲学も、そのつど個別研究を必要とする。その意味では、哲学はたしかに「時代の子」である。この個別研究の事例として、時代的な緊急性のあるものを選択することになる。そこにはエコ・フィロソフィーのシステム(生態システム)と、情報システム、さらには、哲学史のシステムを時代的な課題として設定できるように思われる。



内部に描かれた円で示される探求領域は、個別のプログラムであり、各論的なシステムである。時代的な制約を負いながら設定されているので、探求領域の入れ替えは可能である。それぞれのシステムの今日的課題を掲げながら、そこで示されている事柄を明示し、そこに内在する新たな論理のカテゴリーや、規則性をもつ構造を見出すことができれば、外側の哲学そのものの円環に移行され、哲学そのもののシステムを拡張していくことができる。その結果、外側の哲学そのものの姿がまったく変わってしまうこともある。まさにそれこそ歓迎されるべきことでもあり、かりにそれが起きれば、哲学のメタモルフォーゼである。

エコ・フィロソフィでは何をシステムの局面として取り出せばよいのか。もっとも波及効果があり、かつさまざまな側面が見え、しかも展開可能性のある事態を取り出せなければならない。通常語られているのは、地表付近の二酸化炭素の総量の増加であったり、地表付近の温度の上昇による地球規模の温暖化である。あるいは海洋に流れ出る「プラスチック・ゴミ」の激増であり、分解されないプラスチック・ゴミが、海洋生態系の直接悪影響をあたえるという議論である。そうしたトラブルを含んだ事象は、ただちに目に付きやすく、また対応もただちに決まっていく。排出二酸化炭素量を下げ、分解されにくい合成繊維製品の比率を下げるという方針がただちに決まる。そういう場面で哲学的な問いとなるためには、どういう切り口で生態系を見ることが必要かという問いである。

また、時代の先端で変化し続けているシステムにも課題を設定することが必要となる。たとえば「情報システム」である。情報システムは、どのように小さな

機器にも制御系として含まれている。温度調整を行うサーモスタットにも、情報の自動制御系が含まれている。しかし制御系は、基本的には「調整機能系」であって、「駆動系」ではない。その意味で、情報システムは単独に作動するシステムではない。そうなると情報系をどの面で切り取れば、そのシステムの特質が浮かび上がるのかを構想しなければならない。これらの二つは、現実の課題に対しての提言を行うと同時に、さらにシステムの固有性を取り出し、新たなシステム論理の可能性を取り出すことに寄与することができる。

そしてさらに活用の仕方を考案しなければならないのが、「哲学史」である。哲学の歴史をそれとして知りたいという基本的な欲求はあるのかもしれない。だが哲学史を、さまざまな構想の萌芽が含まれた「可能性の宝庫」だと考えることはできる。あるいはそう考えた方がより豊かに「哲学史」に向かい合うことができる。哲学が、完結した知識の体系であることは、原理的に不可能である。ヘーゲルは、自分の体系構想によって「哲学を終わらせる」と宣言してもいる。だがヘーゲルの体系によって、哲学そのものの局面は大きく変わったが、哲学は終わりはしなかった。キルケゴールによる実存主義や、マルクスの構造主義的システム論、ダーウィンにみられるような実証主義的進化論等々が、まったく異なるシステムの在り方を求めて、圧倒的に多様化してきた。これ以降、哲学は「世界総体を説明する」という課題をあっさりと放棄したのである。これらの三つのシステムを組み合わせ、展開可能なシステムの構想とすることができる。

**生態システム** 地球生態系を考えるうえで、最大の特徴となるのが、「水」である。地球そのものが、「水の惑星」と呼ばれるように、生態系の最大の構想要素である。水はどこにあるのか、という問いは、奇妙な問いである。海にあるという回答がただちに用意されているからである。だが水は、温度によって姿を変え、固体(氷)にも気体(水蒸気)にもなる。ということは氷の姿で、陸上にもあり、水蒸気の姿で大気中にもある。そして見落としがちな事実だが、水は土中に保存されている。水は大地の中や下を流れている。日本であれば、土中を掘り進めば温泉に当たる。多くの水道水は、雨水を溜めて使えるようにするか、土中を深く掘り下げて水脈に当たるかである。河川のように表面を流れる水は、降った雨の残り部分、土地が吸収しきれず、吸収することもなかった残り部分なのである。この土中の水が、陸の生態系をささえている。

水の生態学的局面を、分析的に取り出すと、(1)海洋の水——これは地球全体の温度調整を行い、蒸発して大気の水蒸気を提供し続ける巨大な母体である。この水は地球の母体となるものである。(2)陸中の水——これは大地に潤いをあたえ、大地全体の温度調整として機能し、植物の生育をささえ、大地を少し掘り進めば、多くの人々が濾過された飲み水を手に入れることができる。これは大地のなかの水である。(3)大気中の水蒸気——これは生態環境に多様性をもたらすための緩衝材

として機能している。大気中から湿度がなくなれば、たとえば人間であれば、味覚も臭覚も形成されない。湿度は五感の形成にとって欠くことができない。これは生活環境の水である。(4)河川の水——これは生活領域を形作り、周囲に生産活動の集積地をもたらす。工業地帯の多くは、川の近くに立地している。これは生産活動用の水である。(5)生体内の水——これは生物学的活動の場所を形成しており、細胞の中の7割程度は水である。生体内部環境の水である。人間で見れば、若い間は、水分が豊富に蓄えられ、身体の7割程度は水である。加齢とともにこの水分比率は下がり、個人差はあるが、60歳程度で水分保有比率は、5割程度だと言われている。こうなればこういう人たちは、夏場に注意を怠ると、「熱中症」になる可能性が大きくなる。

こうしてみると生態系は、水とともに動き、水の循環とともに個々の生物の生活が営まれて、水を保存することで生命一般の持続可能性が維持されていることがわかる。水の制御管理については、現在さまざまな問題が起きている。

地表付近の温度上昇とともに、世界各地の気象に大きな変化が出ていることはまちがいない。だが問題は、それ以上にたとえば大雨が降ったときに、地中に保存することのできる水の量が減っていると考えられる。いわゆる世界各地に広がる「砂漠化」である。工業用水として活用して、世界中のいくつもの湖が干上がっているが、それ以上に地中にあったと考えられる地下水湖が枯れていると考えてよい。現在砂漠になっているタクラマカン砂漠は、シルクロードの通る交通の要所の一つであった。シルクロードは、人の足で歩けば、かなりの日数がかかる。シルクロードを進むものは、川沿いを進むしかない。その川が、タリム川である。最後の氷期から、現在の間氷期へと遷り変わる頃には、盆地のほぼ全域がカスピ海のような極めて広大な湖となったと推定されており、盆地の地下にはアメリカ五大湖の10倍にもなる大きさの地下水源が存在する可能性が指摘されている。

かつての遊牧民たちは、場所を移動しながら、遊牧を営んでいた。移動しながら、地下を掘り進むと、数メートル下には、地下の水脈が通っていた。それを汲みだして、生活水にしていたのである。ところがタリム盆地の端の山脈の麓あたりにある水源の近くの水を掘り出し、汲みだして、灌漑用の水や工業用の水として使ってしまうと、地底湖は瞬く間に枯れて、砂漠化する。砂漠化した土地は、土の目が詰まり、固化して容易には水を蓄えられなくなる。かりに雨が降っても地表を流れ出してしまう。地表をコンクリートで覆った都市部でも同じような事態が起きる。砂漠化した土地を緑地化することは、もはや容易な作業ではない。水の生態系で、大きな問題の一つが、地中に保存される水量の極端な減少である。

亜熱帯地方では、年間の約半分は雨が降らない。そうすると水の保存や水路の形成には、別の選択肢が必要となる。ダムを作って水を溜めるだけでは、瞬く間に干上がってしまう。たとえば戦前に日本人鳥居信平が、台湾の高雄市の南側に

手掛けたダムの水路は、地下ダムであり、地下水路である。水路は、川のように地表を流れるものばかりではない。トンネルに似た仕組みで、地下に水路を作れば、蒸発も防ぎ、伏流水として土中の水の維持にも貢献する。

水についてのもう一つの最大の問題が、水は生活環境維持装置であるばかりではなく、それじたいで「資源」でもあることにかかわっている。飲み水の供給だけではない。農業用、工業用で見ても、「資源」なのである。

生活環境維持装置としての水には、本来国境はない。だが「資源」ということになれば、水には国境が生じる。アジアの水の源流はどこか。それがチベットであり、インダス川、ガンジス川、揚子江、黄河、メコン川のようなアジアの主要な河川の源流が、ここにある。中国の前首相である温家宝は、「水不足は中国の生死を分かち」と言い、インダス川等の上流に、約 7000 ものダムを建設してしまった。上流を抑え込むという中国の原理がここでも発揮されて、上流を管理したものが川を制圧するという発想である。そして下流域、とりわけインドでは水不足になっている。

またメコン川はチベット高原から始まり、中国の雲南省を通り、ミャンマー・ラオス国境、タイ・ラオス国境、カンボジア・ベトナムをおよそ 4200 キロにわたって流れ、南シナ海に抜ける。メコン川は、典型的な国際河川の一つで、数多くの支流がある。そこに中国がダム建設を始めた。メコン川は下流域との水資源の活用を巡って協議の必要な国際河川である。本流・支流周辺各国では、日用品の取引などの小規模な貿易が行われている。河川は、自然にひかれた物流のゾーンであるため、中国は、源流を抑えること、ダムによってそれぞれの制御局面を変えていくことを実行している。

水には本来国境はなじまない。水は国益だけに照らして、活用して良いものではない。こうなれば水の管理のための国際機関が必要とされる。実際、安全な飲み水を確保できない人たちは、世界中に 6 億人いると言われている。中国国内でも、地方に行けば、上水道は高価なので、近くの農業用水を飲み水に使っている住民が多い。飲み水は、大気中の酸素と同程度の生命維持機能をもつ。水を、資源のように経済価値に換算することは、本来できないのである。

情報システムについて。情報は、単独のシステムではない。PC で数学的な演算を実行させるとき、オペレーションを続けて、演算の結果を短時間で容易に算定する。このとき演算だけが作動するのではなく、オペレーションそのものを作動させているいくつものプログラムがある。多くは PC に内蔵されたプログラムである。自動的にオペレーションが続いているように見えながら、そのオペレーションの作動をもたらすプログラムは自動的に動いている。これはごく一般的な作動プログラムであり、「作動の順番」、「条件的分岐」、「繰り返し」を含んでいる。情報には、情報を成立させるプログラムや情報と連動するプログラムがつね

にある。

情報では、視覚情報、身体情報、言語・記号情報を区別しておいたほうが良い。同じ情報でも異なる性質をもつからである。情報ネットワークで問題になるのは、言語・記号情報である。これはネット型になる場合には、情報量、情報速度、情報価値が主要な変数となる。情報量と情報速度は、5G、6G、7Gと順次格段に進行するが、それじたいはしばらくすれば生活上での慣れが来てしまう技術である。生活上でただちに慣れが来るものは、たとえ短期的に目覚ましい革新に見えても、それじたいは大きな変化ではない。ネット型の情報でより大きな影響を持つのが、ネットワークの規模であり、プラットフォームを誰が握るかを競う競争である。これは情報社会学の問題であり、情報経済の問題である。

同じ「情報」という名称でも、多くの場合、異なることが言われている。色についてみると、裸眼で色相互の違いから約 35000 程度の色合いの区別はできる。これは人間の眼の識別による。AI センサーでは、さらに細かく区別できる。とするとその区別に相当する自然言語は存在しないだけでなく、記号を活用したとしてもその区別に対応させる認識をもつことができない。センサーは映像のまま分析を行い続けることができるが、その分析は、言語情報に落ちてくることはない。AI センサーは、自分のプログラムを詳細にする方向でさらにプログラムそのものを分節させ、判断を求められればデータに合わせた判断を行う。だが人間にはそこで何が起きているのかが分からない領域が拡大していることになる。これが人間の能力からみた AI の「臨界点」である。

触覚性情報では、また別の問題が生じる。机の上をゆっくりとなぜる場合と、一定の速度をもってなぜる場合では、判別される机の起伏やざらつきは、まったく異なってしまう。そのことは身体運動の維持に必要な限りでの認知しか行わず、身体行為にとって「余分な」情報は、おのずと「無視」されることによる。早足で歩きながら、足の裏でこまごまと地面を認知していたのでは、とても歩行はできない。歩行の維持にとって不要な認知的情報は、おのずと無視される。感知可能性を決めているコードが変化して、情報とならなかったのではなく、むしろ情報を「潜在化させてしまう」ような「無視」が働いていると考えたほうが良い。

無視とはつねに「創造的無視」である。触覚は、視覚とは異なる仕組みで働いている。これが身体運動と認知が連動する仕組みであり、視覚的認知情報と身体動作は、情報による指示でつながっているわけではない。そのため逆に単独で取り出された情報は、奇妙な仕方で運動とつながっていく。情報は、無視とは別の仕方で出現する構造的な不自然さを備えている。

運動のさなかでのセンサーではまた別の問題が生じる。移動しながら眼前の物体を捉える場合、人間の認知では、自分自身と物体の間の衝突までの時間を知覚している。物が飛んでくるときに接近の度合いは、衝突までの残り時間で知覚さ

れ、たとえば走り幅跳びの踏切板のように身体をそこに合わせる場合にも、残り時間が知覚されている。ところが人工的センサーは、地図上の位置情報と位置の変化だけで物の接近や移動を捉える仕組みを採用せざるをえない。

というのもセンサーにとって、時間はあらかじめ外側に設定された座標軸だからである。物体の接近と衝突までの時間は、空間的な距離の縮小で二次的に割り出されるだけになる。ある意味で情報センサーは一度も主体的であったことがない。主体性はずねに2次的に割り当てられた被駆動体である。このことはAIセンサーには制御変数の一つが最初から欠落していることを意味する。この事態の別の側面から考え直してみる。時計は、精確に時を刻み、AIも精確に時を刻む。時を刻むことはできるが、それじたいでは時間経験はしていない。間違いなくAIは「時間的ゾンビ」である。ごっそりと経験の一部が欠落しているのである。テクニカルには、AIには選択的に記憶を制御する仕組みがなく、選択的に忘却し、記憶を再組織化する仕組みがない。

さらにAIシステムの場合、制御情報変数の獲得だけではすまない場面がある。動く車の運転の細かさに対応するための運動制御の技能の獲得が必要となる。道路脇を歩く歩行者が反対方向から来る自転車を避けるために、道路の中央にいくぶんか出かかったとき、それを察知してそのつど停車したのでは、車の運行とは言わない。センサーによる感知に対して、運動体はずねに複数個の対応可能性をもつ。AIではセンサーによる識別の技能向上と、モーターでの対応可能性は、一対一にはならない。センサーとモーターは異なるプログラムとして設定されると思われる。そうするとプログラム間の連動である「カップリング」の仕組みをどのように設計していくのが、重要となる。そしてそこには一対一の対応関係がなくても、作動を維持できる仕組みが必要となる。

AIプログラムは、ある手続きに進むさいに、複数個の可能な手続きがあり、その手続きの選択が、その次の手続きの選択に影響をあたえ、この繰り返しのなかで有効な選択とそうではない選択が決まってくる仕組みが含まれているはずである。この手続きの進行の有効/無効の区分が、AIの行う「判断」と呼ばれる。オートマトンに複数個の分岐が入れば、それぞれの分岐で、自動的に進むことのできる回路を探り当てているはずである。そのときセンサーの有効性を決めるさいには、データの細かさ、データの整理の速さだけが問題になるのではなく、モーターのプログラムを、どの程度改善するのかを指標する「カップリング回路」と、その指標(変数)が必要になる。

センサーのデータだけ細かくなって、モーターのプログラムが改善されなければ、実質的な駆動体としては粗暴な運転しかできないことになる。そしてこれは気の遠くなるような課題だと、現時点では予想される。誰もいない直線の夜道を延々と走る場合には、国際線の飛行機や大型船舶と同じ扱いでよい。だが自動運



転自動車では、事情が異なる。

AIは、こうした場面での試行錯誤を減らす仕組みが組み込まれていない限り、学習能力だと呼ばれないことになる。自動運転車の場合、試行錯誤とは事故が起きてもおかしくない状態のことである。AIは事故を起こしながら学ぶことはできない。しかしその試行錯誤の幅が一定程度含まれ続けることがなければ、学習の幅は維持されようがない。ゲームのプログラムの自己形成とは異なり、プログラムの試行錯誤には損傷が含まれる。ここがAIの一つのジレンマである。事故の可能性を減らせば、学習の幅が狭くなりモーターの改善の可能性は狭まる。他方モーターの改善の可能性を広く設定すれば、事故のリスクは高くなる。これはAIのカップリングのさいの「試行錯誤のジレンマ」とでも呼ぶべき事柄である。

AIの場合、情報処理だけであればどんどんと高度になる。だが運動制御は、それはそれで固有にプログラム化される。そのときセンサー側のデータ処理速度と、モーター側の処理速度は、簡単には対応しない。AIによる自動運転自動車は、正直に言えば、学習の仕方が狭すぎるのである。

おそらくAIは、多くの変数を欠落させた状態で、2次的に有効に機能する状態を見出していくに違いない。まぎれもなくそれは新たな学習の仕方だが、人間がそこから何かを学ぶには、あまりにも乖離が大きすぎる。特定の能力を過度に利用することは、他の能力の発現を抑制する。この宿命を最初から背負っているのが、AIである。

**哲学史・哲学教育のシステム** 哲学史は哲学の記念碑を配置した博物館だと考えることはできない。ヘーゲルは、「哲学史を愚者の回廊」だと揶揄していた。哲学の知識を身に着けても、それだけでは意味がない。あるいは哲学の知識それじたいも意味がない。その意味では、哲学は知識ではなく、「哲学するという経験」の獲得でなければならないことになる。人は哲学を学ぶことはできず、哲学することを学ぶことができるだけである、というのがカントの基本的な指針である。

哲学の課題は、哲学的な知識を身に着け、哲学的な物知りになることではない。むしろ経験の仕方あるいは経験そのものの作動範囲を広げていくことである。そのことを経験の可動域を広げることだと言ってもよい。哲学的な知識は、そうした経験の可能性の拡張に向けてなんらかのきっかけをあたえることができれば、哲学教育はそれとして成立し、哲学の学習としても有効である。そしてさらに経験の可動域の拡張と同時に、経験が新たな局面を迎え、それまでの経験の全域を再編するところまで進むことができれば、「経験のメタモルフォーゼ」である。そのとき新たな「創造的主体」が形成されるのである。

哲学史は、活用の仕方に応じて、そのための材料を提供してくれる。そこにはいくつもの側面がある。個々の構想に含まれた謎をそれとして取り出していくこ

とのなかに、新たな事柄が見えてくることがある。あるいは論理が別様の展開可能性をもち、裏側に別の事態が含まれていることが明らかになることもある。あるいは体験レベルでの探求の仕方を開発することによって、それまで経験として明るみに出すことのできなかつた事象を明らかにすることもできる。

たとえばライプニッツの「モナド論」というのがある。ライプニッツの晩年に創り出された構想である。モナドは、世界の最小単位で、世界内の最小の主体の設定だと考えてよい。モナドの備える能力は二つであり、ひとつは世界を映し出す「表象能力」であり、もう一つはモナドの運動を支える「欲求」である。複数のモナドが、協調して活動できるためには、モナド間の連動の仕組みがなければならぬ。それが「予定調和」である。各モナドの運命は、あらかじめ決まっている。のちにどのように大きな変化に見舞われようと、それはあらかじめ定められた運命的本性が発現し展開されたものである。こうしたモナド論の設定を、著者であるライプニッツの議論に照らして、詳細に検討することはできる。このタイプの議論は、総体の構想として整合的に組み立てられることは容易ではなく、過不足なく完結することも難しい。そこで通常は哲学的解釈によってできる限り、整合性をあたえ、豊かな構想に仕上げることを目指すのである。こうした作業は、最低限の文献研究であり、一切の哲学的考察の必要条件でもある。

モナド論は、多元論の究極形態のような外観をもつが、そこには構想の内部にも多くの謎と課題が含まれている。モナドは、それぞれが世界を表象するのだから、それぞれから見えている世界をもつ。たとえばミラノのドームをそれぞれのモナドから見れば、異なった見え姿をもつはずである。個々のモナドは、異なった位置から世界を捉えれば、異なった世界を見ていることになる。そのときモナドが、どのような位置を占めるかが、決定的な意味をもつ。モナドは、最小の活動単位として設定されている。だがそれが世界内に存在するのであれば、すでに特定の位置を占めているはずである。モナドが「生きている」ということと、「特定の位置を占める」ということは、地続きの特質である。モナドが世界を表象するというとき、特定の位置からの表象にならざるをえない。モナドの能力として、「世界を表象する能力」と「欲求する能力」が設定されているが、これらを成立させるためにはさらに「世界内に位置を占める」という基本的な事態を追加する必要がある。これはモナドが世界を認識する能力だけではなく、世界内に存在するための特質である。

モナドの二つの能力のうち、「欲求能力」には、本能的な飢えや渇きを感じる能力から、感情(アフェクト)や情感まで含まれると考えてよい。そのとき感情と世界の表象とは無関係な独立性をもつとは考えにくい。世界の表象は、多くの場合感情に彩られている。そのときハラハラする驚きを含んだ世界や、退屈な世界というように「感情価値」に彩られて、世界は表象されていることになる。表象

と欲求は、独立の作動する系だが、密接に連動してもいる。この連動性を考慮に入れることによって、モナドははじめて世界内の「個体」なのである。こうしてモナド論のような意欲的で冒険的な構想であっても、その内部から多くの課題を引き出すことはできる。これも哲学史の活用法の一つである。

哲学史の別の局面を取り出してみる。ヘーゲルが、自分の体系構想で「哲学の終焉」を宣言したとき、哲学そのものの大きな転換があった。哲学は、改めてみずからを問わなければならなくなった。そのとき哲学には、いったいそれは何をすることなのかという問いがつねに付き纏うようになったのである。

ヘーゲルの弁証法は、自分自身の知識の限界を認識することによって自分の経験をさらに高次に形成していくという仕組みが含まれている。このとき大前提となるのが、否定され克服された過去の経験が、新たな自分自身の経験に内面化され、組み込まれていくという仕組みである。一般に、「止揚」と呼ばれるものである。これが認められれば、経験は過去を含み、より高まり、より広範囲となり、そのあげく「絶対精神」に至れば、世界総体を自分自身と同一なものとして捉えるようになる。本当にこんなことは起こるのだろうか。

認識をつうじて否定が起きたとき、多くの場合には、別のやり方が試行錯誤される。たとえばコロナ・ウイルス(COVID-19)について、当初は「人一人」感染は起こらないと言われていたが、広範囲な「人一人」感染が起きることは認められ、しかもすべての感染者が周囲の人に感染させるのではなく、一定範囲の人だけが、次々と多くの人に感染させることも判明してきた。そして周囲の人に感染させる無症状感染者と、周囲の人に感染させることのない無症状感染者を区別する明確な科学的指標が、現時点ではないことも明らかになった。こうした事実が、今回のウイルスへの対応を難しくしており、一方では多くの人たちの気の緩みをもたらし、他方では感染者の範囲を限定できないという事態を招くことになった。既存の知識の否定が起きるとき、すでに語られていたことは、放棄されて、別様に組織化されるが、新たに見えてくる見え姿は、そのつど組織化されるのであって、過去の知識が内的に組み込まれるのではない。各知識は、そのつどの「最善の対応可能性」を模索しているのであって、過去の知識を自分自身の元に組み込むかどうかは、二次的なことである。

ヘーゲルは、まったく無駄なところに力点を設定している。こうして弁証法の不可欠の条件である、過去の経験の内的な組み込みは、事態をまったく取り違えた議論であることがわかる。否定された経験を内的に組み込み、経験そのものが拡大し、肥大するという経験のあり方は、ただの誤解である。

このときそれぞれの組織化された知識は、固有の形態と位相領域を形成するのであり、それを反省的に考察する観察者から見れば、知識は多元的となる。それぞれの構想はまったく独立なのではなく、相互に交叉し、クラウド型に広がって

いる。多元論的な知識のさらに新たな局面へと進むように、知識の形成を行うことが、哲学的な模索であり、哲学の課題でもある。

だが経験が吟味を受けながら、進展していく場合の経験のプロセスはどのようなものとなるのか。弁証法の場合、知識はつねに一面的であり、その面では恒常的に前に進んでいく以外にはない。しかし経験がさらに詳細で微妙になるように、分節しながらなお進み続ける場面でも、なお前進し続ける以外にはない。これも弁証法に類似したプロセスを進むだろうと思われる。たとえば感情のシステムは、何度も同じ感情に立ち返ることで、さらに詳細なものになっていく。経験のプロセスの進行は、視点を切り換えるように局面を変えながら進むだけではない。同じ感情的経験の詳細化を推し進めるようにも、前に進んでいくことができる。反復のプロセスのなかにも、詳細な活動の襞は出現し、経験は何度も同じ場所を通過しながら、微妙に異なる経験を実行する。

こうなれば負の弁証法であり、ヘーゲルの後にキルケゴールが進んでいく領域となる。弁証法は、さらに拡大する方向だけではなく、内的に経験の分節を詳細にする方向でも進んでいくことができる。こうして弁証法のような方法的な論理であっても、まったく別様に活用し、新たな局面を開いていくことができる。

さらにフッサールによって創始された「現象学」は、まったく別様な展開の仕方を含んでいる。現象学は、体験的直接性にかかわる知の分析であり、感覚知覚のレベルですでに成立してしまっている知についての解明である。解明の作業も体験的な直接性のレベルにあるので、体験的直接性を帯びた経験のさなかで、それじたいを解明しなければならない。このとき記述のための「隙間」が必要であり、この隙間を開く方法的な手続きが、「現象学的還元」と呼ばれる。この手法は、身体や感情や体験的確信のような多くの領域で応用することができるが、同時に手法そのものが微妙に改変されていく。日本を代表する現象学者の新田義弘(1929-2020)は、「現象学は一つの運動である」と語っている。

たとえば物の知覚と「渦巻」や「竜巻」のような動きながらかたちが作られていく動態性の知覚は、まったく異なるものであり、後者では「運動感」という異なる能力の関与がある。身体を論じるには、身体に固有の能力を見出していかなければならない。メルロ＝ポンティは、身体を「知覚」になぞらえて考察し、身体は「知覚するもの」(能動性)であると同時に、「知覚されるもの」(受動性)であるような、「両義性」をもつと定式化している。しかし身体は、知覚に見られるような「認知能力」としてよりも、むしろ「それじたいで運動するもの」である。そうなるとうした運動性という特質に接近するような考察の仕方を考案していかなければならない。現象学は、対象領域によって考察の仕方を変えるだけではなく、同じ対象でも接近の仕方を変え、新たな考察の力点を工夫していかなければならないのである。

感情も、認知ではなく「それじたいで動いている」という運動の感触がある。そうになると感情についての考察では、それじたいで運動するものと運動を感じ取る感触の二種類のもが含まれなければならない。そうした仕組みになっているのが、触覚である。現象学は、ながらく視覚をモデルとして考察を進めてきた。人間の感覚知覚のなかでは、視覚がもっとも優先的で、もっとも高度な能力であることは間違いない。だが運動するものへの考察は、むしろ触覚をモデルとすべきだったのである。

こうして現象学は、事象の解明のための手法を考案し、新たな前進のための回路を見出すことによって、新たな歴史を形成するのである。哲学は、こうした解明の仕方の開発をつうじて、経験に自由度をあたえ、経験の可能性の拡張を行い続ける。それはとりもなおさず、経験の自己陶冶の仕組みでもある。この自己陶冶の場所こそ、「哲学教育の現場」なのである。

哲学史は、過去を知り、知識として配置されるだけではなく、つねに新たな課題の中で模索を続ける創造的な作業でもある。そこでは性急な知識の統合を括弧入れし、つねに知識も経験も、それじたいを拡張する可能性へと開かれていることに賭けていくのである。そしてそれこそ、現代の哲学の姿である。



## 5 情報という現実性

情報は単独のシステムではない。それはエネルギーやエントロピーが単独のシステムではないことと同様であり、さまざまな活動態の「断面」に留まる。エネルギーは測るための枠を必要とする。この枠のなかの開始点と末端で成立しているとされるのが、「エネルギー保存則」である。またエントロピーはあらかじめ系が設定されていなければならない。大域的な開放系では、エントロピーを語りようがない。エントロピーは、その系のなかで「極大」となって終わる。一切の運動を欠いた平衡状態となるのである。

通信技術から見たとき、エントロピーと情報は、類似したかたちで定式化できる。内在的な不均質性の度合いが問われるのだから、同じ定式化を活用しても問題はない。だがエントロピーはある系のなかで極大で終わるのに対して、情報は無限に拡散するよう見える。ここに情報の特質がある。

また情報は、何かについての情報でもあり、別のものにかかわるある種の「志向性」をもつ。その意味では、意識や言語に近い性格をもち、世界大の現実へとかかわっていく志向的な可能性をもつ。その点では言語や記号と同様に、ただ平行して作動する多くのシステムの一つなのではない。底引き網のように、網はそれとして稼働するが、網目に引っかかるものは何でも絡めとっていく。この絡めとる網目の大きさを自在に調整できる点が、情報と自然言語の違いである。

網のように世界の現実と絡み合っていく点が、情報の志向性であり、一般的には「何かについての情報」という側面である。他方情報は、自動的に作動する。情報は次の情報に接続されるものは、どのようなものであれ、次の情報を生み出す。精確に言えば、次の情報が生み出され、既存の情報と接続するものは、情報ネットワークのなかに組み込まれ、それとして「情報」となる。ベイトソンの言う「差異を創り出す差異」こそが、情報であることになる。この段階では、「情報ナルシス」という特質が現れてくる。情報はただ別の情報と接続することで、それとして成立する。こうして情報以外の現実性につながる回路と、情報相互につながる回路での分岐は極端に進む。それが情報システムである。

情報は、ネットワークとして、それじたいの内部に訂正可能性をもたない。何かが出現し、それに接続可能なものであれば情報として活用される。そして接続可能性が見込めないものはいずれ消えていくだけであり、いわばゴミになるだけである。それじたいに一切の選択性をもたないものは、定義上「ゴミ」である。

言語・記号一般と同様に、情報も現実とは一対一対応はしない。一つの現実を

別様に表記することは表現の可能性を高める。だが誰にも理解できない表現になれば、情報ネットワークに留まることはできない。しかし特定の間人もしくは受け取り手にだけ通じるように改変することはできる。これが「暗号」である。軍事や政治的な陰謀で繰り返し活用されてきたが、文学的な作品ではっきりしたかたちで登場したのは、ポーの「黄金虫」である。ここではアルファベットの統計的な出現頻度に合わせて数字を置き換えていくもので、トリックとしては初級のものである。またごく普通の日常言語的表現に、こっそりと二重の意味を込めるように裏の意味を込めることもできる。これも古くから繰り返し用いられているもので、通常の日常表現に同時に、こっそりと裏のメッセージを込めるやり方である。

そうした裏のメッセージが込められていることに敏感に反応してしまうものがある。ナッシュ均衡を定式化したジョン・ナッシュは、普通の新聞の文章に特殊なメッセージが込められていると読み続けており、自分だけに宛てられた秘密の指令だと読みとっていた。ナッシュの伝記的な作品である『ビューティフル・マインド』では、いくつかの単語は文法的な配列とは異なる輝きを示してつながってしまっている。

他方、情報はネットワークとして疑似自律的に作動し、そこで固有の現実性を創り出していく。一般的には芸術的な創作ですでに実行されているものである。このとき情報と情報制御機構を活用して、現実そのものの内実と範囲を変えていくことができる。事実、「仮想現実」や「拡張現実」において、現実性の幅が決まらなくなっている。そのとき同時に経験のモードも変わっていくはずだが、経験そのものを有効に拡張できるものや、現実性をより豊かにしていくものの内実を決めることが極めて難しくなっている。精確に言えば、経験を有効に拡張できず、世界の側の選択肢を広げることもない莫大な情報が飛び交うようになっている。つまりガセネタやゴミ情報の氾濫である。

こうした場面で、何が哲学的な課題となりうるのかという問いが生じる。そしてそれを明示することは簡単ではない。課題を明確にできないのであれば、すでに哲学は困惑と当惑のなかに巻き込まれている。哲学の課題の一つが、筋違いの議論を別様に転倒し、課題の方向性を設定し続けることである。また新たな現実の形成へと向けて、どのような選択肢があるのかを構想することである。つまり状況を前にして、前進可能な問いに転換していくこと、さらにはどのような展開見込みがあるかを構想として提示していくことである。

さしあたり情報ネットワークのなかで、個々人の欲望がどのようになっていくのだろうか。欲望の変質と行く先についての検討を加えておきたい。欲望にかかわる限り、精神分析的な議論との重なりが大きくなる。統合失調症や躁鬱のような脳神経系の変質を含む病態は、とりあえず除外される。また精神分析は、言



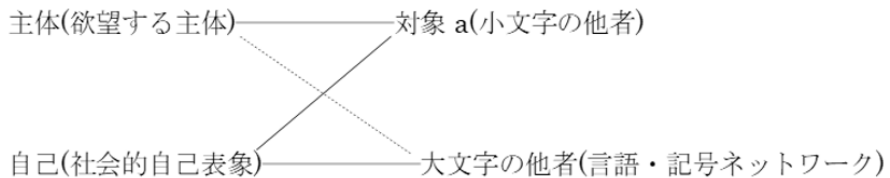
語的な語りを治療法の軸としており、身体の振る舞いや運動を活用することはほぼない。つまり精神分析こそ、情報ネットワークに適合的な枠組みをあたえてくれるのである。

欲望は、現実性の拡張に応じて、大幅に姿を変える。つまり変貌していく欲望の在り方に焦点があたるように議論を組み立てなければならない。そのためには構造的な図式に変えて、変貌し続けるシステムに置き換えていかなければならない。さらに情報ネットワークの加速度的変化のなかで、人々の行動はどのように変化していくのかについて考察を加えておきたい。総体として、こうした課題設定は、社会精神病理学の装いをもつと思われる。

また情報は単独のシステムではないが、そのことの内実を詰めてみる。自動運転ロボットは、センサーとロボットを別建てでプログラム設定しなければならない。この二つのプログラムは、それぞれがAIのなかでより詳細になっていくに違いない。センサーのプログラムは固有に進化し、モーターのプログラムはそれとして進化していく。それぞれの進化速度は大幅に異なり、進化の幅もそれぞれで異なる。そのときプログラム間の連動をどのようにしてリセットし続けるのかが問われてくる。問われるべき局面がもう一段階上がってくる。そのさいの理論的見通しについて考察しておきたい。

## 1 情報ネットワークの欲望

情報ネットワークのなかでの個々人の欲望の変化について考察しておいた方が良いと思われる。だがこれを論じるためのぴったりの構想が見当たらないのが実情である。というのも情報は、そもそも感情の制御に適合的に作られたものではない。だが二次的に感情の変化をもたらしてもいる。そこで便宜上ラカンの精神分析を拡張して活用することにする。構造主義者であるラカンの最も一般化された構造的な仕組みは以下のようなものである。



これだけの基本要素を設定しておけば、心的活動のどこに無理が来て、どこに歪みが生じるかを論じることができる。欲望する主体には、それじたいの作動の

理由も到達点もない。欲望は、ただ作動する。この特質は、たとえば空腹には理由がなく、また満たされてもいずれ空腹はやってくる。始まりの理由も、終わりの理由もない。活動態を捉えるさいに、アリストテレスは、活動の行きつく果て、すなわち目的を捉えなければならないと考えていた。だが欲望や本能的な欲求には行く着く果てはない。それは生きていることそのものに行く着く果てがないことによる。死は生きていることの向かう果てではない。ヨーロッパ思想のなかにいくつか大きな誤解があるが、「生は死に向かう」というのもその一つである。植物が途中で枯れてしまうことは良くある。しかし植物は枯れることに向かっているわけではない。また自己組織化を基本とする世界では、何かが出現することにも理由はない。事象は事象だから出現するのであって、そこには理由は不要である。そうした理由もなく行く果てもない活動態が、欲望である。

ラカンが性的欲求を軸に欲望を考えていたと思われるが、本能的な欲求である食欲、排泄欲、睡眠欲にも基本的に違いはない。しかも付帯的な欲求が次々と分岐していくことは可能であり、情報ネットワークではそうした欲求の変質はいくらでも起きる。また欲望の作動のモードも変質していく可能性がある。ここでは構造主義的な発想に変えて、システムの構想に転換することが求められている。

情報ネットワークが拡大し続けることで目に付く形で違いがでるのは、大文字の他者である。大文字の他者は、基本的には自然言語と文化的な記号の複合体である。ラカンの設定としては、自然言語とその派生態からなる単独のネットワークだと考えてよい。そして言語の特質から見て、これは音声言語のネットワークであり、身体的振る舞いとともなうネットワークである。そのため大文字の他者には、裏側で身体的な振る舞いが張り付いている。ラカンの後期の分類で、象徴界(言語的意味世界)、想像界(イメージ的世界)に並ぶ現実界(身体を含む非言語的世界)は、大文字の他者の裏側にある。

この言語的ネットワークでは、欲望や欲求は、こうした言語が語られる環境のもとで形成され、制御される。ここには人間固有の生育的な能力形成が想定されている。ここは人間学的な発想で考えておいたほうが良い。このとき欲望は言語を全面的に自分の制御下に置くことはできない。逆に言語は、欲望を自分のなかに取り込むことはできない。だが両者は密接に連動する。欲望と言語的ネットワークは、密接だが相互に外的である。そうした関係が「外密」である。システム的には「カップリング」と呼ぶべき関係である。

そして両者の境界に「無意識」が出現する。この無意識は、言語からはどのようにしても到達することはできず、また言語の合理的な制御にも落ちない。だが言語からは明確に規定できない関係で密接につながっている。欲望する主体から見れば、言語は放棄する可能性がないように、みずからに降りかかってくる。そしてそれがどのように経験に組み込まれたのかも知りようがない。幼少期の言語

習得期では、言語はなぜそうしたもののなのかもわからず、また選択的に拒否することもできない。つまりおのずと降りかかってしまっているものが言語であり、経験と言語との関係そのものは、経験からも言語からも明らかにならない。未決定な関係のまま密接性が維持されているのが、欲望と言語的ネットワークの関係である。

そこにさらに情報ネットワークという巨大な仕組みが入り、多くの場合文字情報と映像表現を中心とする表現手段をつうじて、際限なく平行する多平行ネットワークに変質していく。こうした言語的ネットワークの情報化にともなう欲望そのものの内実と作動のモードの変化が問われる。

この変化にはいくつものモードがある。情報ネットワークの作動に対応して、欲望そのものの作動モードが変質する場合がその一つであり、たとえば次になにかがもたらされるといふ「情報の飢」に恒常的にさらされることで、経験は別の作動のモードへと巻き込まれてしまう。そこでは言語と経験のかかわりの変容が起き、経験のモードそのものが変容する。目覚めれば、SNSに接続し、なにかが伝えられていないかを確認する。こうして経験の基本的なモードに変化が及ぶ。経験はいつも待ち受けモードとなる。

その延長上に、情報反応性の反射反応が広範な広がりを見せる。まず相手の話を聞く力がなくなる。話をじっと聞き、言葉や言葉の意味ではなく、言葉をつうじて相手の経験を取るような聞き方ができなくなる。自分の経験を動かすようにして相手の経験と連動させるのではなく、経験の手前で、情報という断片化された言葉に反射反応する。そしてただちに「騒ぎ」を起こすのである。

おそらくこの延長上では、一般的に言う「理解」さえできなくなる。こうした在り方を情報ヒステリーと呼んでおきたい。この場合、経験に奥行きも懐の深さもできず、言葉に反応し、すでに持ち合わせた自分の枠のなかに配置することを理解に置き換えていく。欠落しているのは、「じっと聞く」「経験に落ちるように聞く」「自分の経験のなにを作動させるかを感じ取るように聞く」というさまざまな聞く経験のモードである。

それを欠落させるために、多くのことがわからなくなる。情報を受けて、言葉を振り回すことだけはできる。相手の言葉を聞き、反応しているようだが、いつも反射反応なので、経験そのものが微妙になることも、こなれていくこともない。そしてしばしば周囲からはまったく理解できないような挙動が出現する。

ときどき電車の中でも見かけるような光景がある。電車通路のなかで、スマホからイヤホンで何か音楽を聴いているような女性がいる。30歳前後の眼鏡をかけ髪をポニーテイルのように結わえた小柄のかわいい女性である。電車が駅に近づき、つまづくように停車したとき、この女性の後ろにいた中年男が電車のなかでゆられて、この女性の背中に少し触れた。この中年男は、右手で吊革をもち、

左手でカバンを抱えている。この女性は突然振り向き、「テメエー、ナニスンダヨー、ケイサツニツキダズゾ、オリロ」と叫び始めた。周囲にいた人の半分は、何が起きたのかという怪訝な面持ちであり、もう半分は「またキレタ」といううんざりした顔である。

この女性は居場所がなくなってその駅で下車してしまった。スマホで音楽を聴いているのだから、その状態で発声すれば度起こした大音声となる。しかも電車の中で自分だけで「閉鎖系」を作っており、そこが侵害されたと感じれば、度を越した反応が出る。明らかにヒステリー性の反応である。スマホがらみの情報には、情報一般にふさわしい公共性がない。情報と言いながら特殊な閉鎖性を作る。そこに予想外の介入があれば、ほとんど理由も結末も理解を絶した振る舞いが出現する。いわば「キレル」という事態が頻繁にこともなげに出現する。情報は一般に量的に増大すれば、増大局面に反比例するように、視野も経験も狭くなる。

言葉に対して、敏感感応する場面は、基本的に病的には「神経症」である。神経症全般は、『精神医学診断表』からは項目としては姿を消し、「人格障害」のひとつ項目に配置されている。いわゆる社会的な不適合の集合体である。神経症の構造的な特徴は、(1)言語行動や行動一般にことごとく裏面で「自己正当化」が伴っていることであり、(2)言葉の範囲と現実性の範囲がほぼ重なっていることである。自己正当化の構造的な支えができている場面まで進んだものが、神経症性妄想、すなわちパラノイアである。一般に神経症は、フロイト、ラカンとも特定の言葉の抑圧から生じると考えている。現代の神経症の特質は、特定の言葉を抑圧している自分自身への自己正当化に力点が移動している。この自己正当化をつうじて、「演技性人格障害」や「自己愛性人格障害」へとこともなげにつながっていく。神経症は、病的に見れば、統合失調症にもうつ病にも背景的な一部として出現する広範な病理である。それは作為的な自己維持にかかわる無理のことであり、それが行為の無理となって出現する病理である。

情報の受け取りは、あらかじめ予期の範囲が極端に限定されている。情報は次の情報の待ち受けの予期しかもてなくなる。そこには他者も環境も自然もすべては作動する情報の外に自動的に区分される。予期があらかじめ限定されていれば、経験の幅も弾力もほとんどが失われてしまう。

情報ヒステリーは、恒常的に特定の枠で情報を待ち受けていることがベースにある。たとえば送られてくるメッセージとともに、あらかじめ待ち受けの枠が用意されており、それが作動すれば自動的に、機械的に反応するのである。あらかじめ絞り込まれた予期の枠に対応するような情報が流されるようになり、その情報に反応するのだから、情報量は増えても経験はどんどんと狭くなっていく。この事態は広範に見られるもので、SNSでは多くの場合、情報量の増大が、経験の狭まりをもたらす。

待ち受けの枠には、自己主張の枠と、自分が自分自身で禁じている項目とがある。特定の自己主張の枠に引っかかれば反応する場合は、反復性の反射反応であり、いつも同じパターンで、いつも同じような反応を繰り返す。「また同じことを言っている」という反復の基本形が出現する。ここに情動の固着が入る。反射反応だからそのつど当人はすっきりはしているのだろうが、周囲からすれば、なんでわざわざというようなことを繰り返す。これは本人の自動的な情動の繰り返しであるから、言ってみれば、情報・情動ナルシズムである。これが出たときには、その人物は物事をもはや精確に捉えることはできないと考えてよい。

ここでは精確に言葉を捉えることが問題なのではなく、経験は特定の感情を繰り返すことに向いてしまっており、ときとしてこの感情に合うように言葉を作り替える。ただ同じ感情を繰り返したいだけなので、すでに経験は終わっているが、SNSに垂れ流せば少数の共感者はいつもいるので、安心を得るためにはSNSに垂れ流すのが手っ取り早い。情報ネットワークには、固着の集合的な支えが恒常的に用意されている。

他方、自分自身で禁じている項目に引っかかれば、反射性の「大演説」となる。大演説の垂れ流し場所が、SNSである。この大演説は、誇大妄想性のものにはならない。誇大妄想は、フロイトの言う「投射」を介することがほとんどである。

フロイトは「シュレーバー症例」の分析末尾で、投射を定式化している。骨子となるのは、(1)自分の感情を別様なものへと作り替え、自分の感情に自分で気づかないようになること、(2)作り替えた感情が、内発性のものではなく、自分の外からもたらされたものというように外に由来を転化するのである。たとえばある男が、ある女性に好意や思い入れ抱いていたとする。ところがその女性が自分に思いを抱いているので、自分はそれに応じているだけだと、感情の質もしくはモードを入れ替える。感情の由来は、自分自身ではなく、外からもたらされたものに作り替えられる。そしてその女性が行う振る舞いや身振りや言動のなかに、自分に寄せられる思いの証拠を、感覚知覚をつうじて際限なく確認するのである。自分自身の感情の制御に代えて、その女性への「観察」で置き換える。感情の制御は容易ではないが、観察によって際限なくその女性を捉え続けることは、認識の本性にかない、際限なくリビドーの備給を続けることができる。そのため感情を観察という認知へと振り向けること、さらにそれによって仮構された自分の感情を繰り返し確認するのである。フロイトであれば、「被愛妄想」と呼ぶべきものである。これだけのエネルギーが備給されていれば、行動は誇大であり、発話は妄想性を帯びる。

そして情報化社会では、このタイプの誇大妄想は背景に退き、反復性の固着行動となると予想される。誇大妄想の場合、たとえば本当にあの女性は私への思いを抱いているのだろうかという疑念はつねに何度も付き纏い、それを何度も否定

していく。この否定に妄想の強靱さが作られていく。そうした鍛え上げられた妄想に代えて、何度も同じことを繰り返す情報ナルシスが前景にでる。その一部が、ストーカーとなる。

感情の発露は、なんらかの行動を帯びる。その行動に、不釣り合いなほどの大袈裟な振る舞いが出現する。ある美大系大学の公開講座で、受講生の女性が、不当な内容の講義を受けたということで大学当局を訴え、それを聞き入れない大学当局を民事で訴えた。見せかけは、「訴訟狂」である。「訴訟狂」と「演説狂」は、典型的な妄想の表現モードである。

この公開講座の外部講師には、刺激的な作品を作り続けているアーティストが並んでいる。いわゆる「取り扱い要注意」というアーティストである。こうした講師の講義を聞き「急性ストレス性障害」になるほどの衝撃を受けたとの訴えがなされた。当然のことながら、大学は個々の講師に要望をいちいち出すことはしない。そうすると何が訴えの内実なのかを掴むことは難しい。押し問答の末に、大学当局と公開講座の運営係が自分の要求を聞き入れないので、民事訴訟に及んだというのが、事件のあらましである。

一般的に考えれば、聞きたくもない講義を聞かされたのであれば、それ以上聞く必要もなく、その場合には大学当局の事務局に掛け合っ、受講料を払い戻すように交渉することができる。公開講座で募集に応じて参加したのであるから、それを取りやめるのである。次に自分の希望する講師陣を挙げて、次の機会にはそうした講師を呼ぶように努力してほしいと要望を出すこともできる。自分の意向に合わない講師の授業が行われたことに不満をもつことは不自然ではないが、それが公開講座を運営する大学のミスだということにはならず、また事態の改善を求めることは不自然ではないが、民事での筋違いの訴えに直接つながるものでもない。本人の主張と法的な社会的制度への訴えの間には、どうしても無理が生じている。

そしてそれは多くの場合、自分自身の選択肢を減少させていることから生じている。いわば欲求は発現の回路を極端に狭めている。そして妄想の初期症状の一つである「訴訟狂」のかたちを取る。自分自身の選択肢を減らすことによって出現する不釣り合いな挙動は、感情のもう一つのモードを表している。それが情報・情動[0, 1]モードである。情動は本来度合いをもつ。強い情動、ほどほどの情動、弱い情動のように、度合いがある。それは一般に強度性と呼ばれるものである。ここから多くの選択肢が出現する。ところが情報に浸透された情動は、[0, 1]という両極化の作動モードを帯びる。情報のなかに含まれる[good, but]という価値感情によって、度合いの判別が効かなくなり、[0, 1]のいずれかに両極化していく。場面ごとの選択肢を自分で消していくのである。これを場面ごとに積み上げていけば、言説レベルでは両極化した言説が出現し、その果てで、唐突な「訴訟

狂」が出現する。

ここには個人的な事情もからんでいる。この女性受講生には、ヌード芸術は崇高なものであるべきだという思いがある。美大生に対して、かつてヌードモデルとして自分の身をさらし、報酬の支払いを受けてきた自分自身の前史への自負もある。その思いは一般的な個人の思いとして尊重されるべきである。だが他者に強制するようなものではなく、また他者にそれに合わせるように思いこむべきものでもない。この女性に見られる「自己愛性の傾向」は、他者への余分な思い込みとなり、過度な筋違いとなって出現する。

一般的に見れば、「固有なものは、どのようなものであれ、固有性として尊重されるべきである」。これは「弱者は、弱者として尊重されるべきである」と置き換えても良い。私は個人的には、可能な限りそうであってほしいと思う。しかしそれは個々人の固有の関係性のなかでしか維持されまいだろうという思いもある。一般的な社会原則として述べることも、他者に半強制的にそれに同意するよう求めることも、困難である。個々人のネットワークのなかで、徐々に形成されるべき社会的配慮ではあるが、社会的規則として設定されることはない。これが社会的存在のバランスというかたちでしか成立しない事象の固有性である。個々人の個性にかかわる事象は、おおむねこうしたものである。自己愛性の傾向は、このバランスを崩すことでしか維持できない。

欲望と情報ネットワークとの関係で、情報は、文字情報と映像情報をつうじて膨大な量のものが流されるが、こうした情報が自然言語の発話と異なるのは、情報には語られざる内容がほとんど含まれないことである。自然言語の発話では、まさに語らないことによって意味を帯び、語らないことによって意味の膨らみと奥行きが形成される。その領域が膨大にあるからこそ「言葉」であり、「語り」なのである。常日頃 SNS で経験を動かしているものは、逆に多くのことがわからなくなる。

そして情報ネットワークの作動の速度が速いために、情報の授受に対しては、敏感感応が起きる。この速度への対応不全が、情報ヒステリーである。この速度への対応に反復的に応じようとするのが、情報・情動ナルシスである。そのとき経験に奇妙な特質が生じ、そのモードが情報・情動[0, 1]である。一般的に考えれば、欲望と言語の間には、緩やかでしかも密接な関係しかない。これが「外密」であった。だが主として、情報の速度を基調とする情報側の変化によって、欲望は出現の仕方を否応なく変えざるをえない。この変化は、いずれは欲望そのものの変化をさらに生み出し続けていくに違いない。

副次的に、感覚神経不全でしかないものが、情報ネットワークで別様に拡張され、別様な効果を生み出すこともいくらでも起きることである。こんな事件があった。ある学生にとって同じ風景が一日に何度も浮かんでしまう。意識の制御と

は無関係に、非志向的に浮かんでしまうのである。非志向的な想起という PTSD に広く見られる神経機能不全である。一日に何度も同じ風景が浮かんでしまう。そこでその学生は、像として浮かんでくる同じ人物に向けて、メールを発信し続けたのである。内容は、「あなたはどのような死に方をしたいですか。それを私に伝えなさい。そうすれば私がそれを実行してあげます。」この文面をマシンに残しておき、同じ想起像が浮かぶたびに、同じ文面をリピートで想起像に浮かぶ人物に送り続けたのである。一日に 20 回を超える頻度である。起きていることは、単純な想起障害である。この事態が SNS につながってしまった。

こうしてこの文面を送り続けられた人の居住する東北地方の県警からパトカーがやってきて、この学生は都内で逮捕され、移送された。21 日間の留置場での取り調べの後、近くの市の精神病院に移された。ここで管轄が警察から保健所に代っている。この学生は警察の留置場に置かれ、最後の段階では地検になんどか連れていかれて、立件が難しいと判断されている。精神病院に移されて以降、ひと月ほど経ったところで、私はその病院まで面会に行った。大学関係者の誰かが面会に行かなければ、病院を退院した後の学業への復帰について、詳細に検討することはできない。精神病院の回廊を進む途上で、散歩していた本人にばったりと出会った。本人の目つきに不自然さはあるが、挙動にはおかしなところはない。ただ社会復帰までには少し時間はかかると感じられた。おそらく服用している治療薬の影響もある。本人に、調子はどうかと私は尋ねてみた。本人は「病院のご飯より、留置場のご飯の方が美味しかった」とだけ無造作に答えた。

ラカンの図式的な構想のなかで、際立っているのが、対象 a である。対象 a は、心が不安定となり、不安な状態になれば、経験のどこかに出現して、経験に支えをあたえようとするようなある種の安定化のための変数である。通常は消えていて、現前化することはないが不安定状態のなかで出現する。

いま眼前に鏡を置き、自分の像を映してみる。映っている像のなかで、自分の姿を消してみる。眼だけが残る。さらに眼の形も消してみる。そうすると鏡のなかからこちらを見ている「まなざし」だけが残る。外から自分自身を見ていて、なにかのきっかけで出現する「まなざし」のことを対象 a だと考えておいてよい。ある意味で自分自身の経験の分身であり、経験に外からまとまりをあたえる以上、経験にとっては超越論的な原理である。そうした原理が経験のなかから立ち上がってくれば、反省的な自我に類比した超越論的原理となる。ところが対象 a は外からやってくるのだから、外から介在するかたちで経験はまとまりを再度獲得することになる。

そして対象 a は、多くの場合それじたいでみればほとんどとるに足りないほどのものなのである。たとえば耳のピアスであり、髪を束ねるカチューシャであっ



たりする。意識の焦点化をとまなうなんらかの具体的なイメージであれば、対象 a になることができる。多くの日本人にとっては、ほとんどかかわりのない原理なのかもしれない。自分の経験のまとまりを支えるような外的イメージをもつ必要はないことが多いのである。なぜラカンが対象 a を強調していたのか。それは構想のなかにこっそりと部分-全体関係(換喩的關係)が組み込まれ、全体をまとめ上げるような原理を想定しているからである。

システムの考えれば、システムは作動し続けることによってそれ自体がそのつどまとまりを形成する。そこにはあらかじめ全体を取りまとめるような原理は不要であるだけではない。むしろそんなものはない方がシステムの動きはスムーズになる。システムは緊急時になんらかの支えを必要とする。そう考えるのが構造主義的な発想である。そんなものはなくても、システムは作動をつうじて自己治癒する。ラカンの場合不安定さが嵩じたときに出現するものとして、対象 a を設定している。そしてこれが古典的な自己治癒モデルであり、支えを回復するというモデルなのである。

全般的に考えると対象 a は、自分自身の「原風景」のようなものに近く、いつでも思い起こそうとすれば思い起こせるものである。想起しようと思えばいつでも想起できるものに近い。これは経験全般にとって重要な意味をもっているのだろうか。昨日の晩御飯の風景を想起してみる。ある断片的な場面が思い浮かぶ。しかしその5分前の風景もあったはずであり、5分後の風景もあったはずである。イメージ記憶は、いつも特定の場面の切り取りから成立している。この切り取りの理由はよくわからない。固有の意味が含まれているとも思えない。ただそうした個々の場面をとまなうイメージがあることは間違いない。

そして情報ネットワークのなかでは、記憶に残るような断片の表現が優先されていく。それをうまく設定することは、作品を何度も経験したいというリピートの欲求につながっていく。その場合、対象 a は、作品作りのテクニカルに活用すべき変数の一つになるのである。それは記憶にかかわっている。あるいは個人史にかかわっていると言ってもよい。そしてそのなかに経験全体にとっての彩をあたえるようなイメージ像はあるに違いない。だがそれがどのように経験の安定化や経験の自在な作動に関与しているのかはよくわからない。

私にも思い起こそうとすれば思い出せるイメージ像がある。保育園の砂場でくたくたになるほど遊んだ夕暮れに、西日を受けてまぶしそうに遠くを見ている自分自身のイメージ像である。それが何を意味し、何を支えているのかと問うてもほとんど不明である。一時的に意識の全域をまとめるほどの効果があるとも思えず、また非志向的に浮かんでくるほどのものではない。ラカン自身は、対象 a の内容を、乳房、糞、声、まなざしだとしている。

対象 a はどこかで意識の深層に触れるものでなければならない。そして文化的

な要素のなかで、意識の状態をリセットして、状態を変えていくものだと拡張解釈すると、対象 a の機能性がにわかにならなくなる。通常はごく常識的な普通の人であるのに、なにかのきっかけで「まるで人が変わったように特殊な状態になってしまう」ことにかかわる要素がある。この場合、対象 a はもはや防衛的なものではなく、むしろ当人をトランス状態に移行させてしまうようなものである。宗教的なものであれ、芸術的なものであれ、この場合の対象 a は感覚的確信に満ち、平均以上に能力をさらに発動させるように働く。情報ネットワークが、そうした要素の起動にかかわることはあるに違いない。そしてそれは犯罪にもかかわるような場面まで敷衍することができそうである。

かつての「少年 A」は、「バモイドオキ神」という自分のための神をもち、「アングリ」という自分自身のためだけの儀式をもっていた。少年 A の中学生時代である。それらをとおして犯罪を実行し続ける自分自身を安定化させていたのである。そして犯罪を続けているときも、社会に対して、サカキバラセイト(酒鬼薔薇聖斗)を名乗り、発信を続けた。この局面では犯罪性向はよくわからないが、特殊なトランス状態が起きている。

対象 a の範囲を防衛的働きの範囲を超えて拡張していくことは可能である。その場合には、言語そのものの在り方も言語の意味も変えてしまう。あるいは言語の裏側を支えている身体行為を全面的に別様に組織化することもある。つまり対象 a は自分自身を組み換えるほどの威力をもつ範囲まで入れることはできる。

シュレーバー症例のなかでシュープに至る局面で、シュレーバー自身のイメージの確信は、「女になって犯されたら、素晴らしいことだろう」というのがある。大学の演習の時間に、この話をしながら感想を聞いてみたら、男子学生で夢のなかでそうした情景は何度も出てきたというものや、いつもそうした思いをもっているという男子学生が数名いた。

あるいは「言葉で食事について語るのと、言葉を食べることは等しい」というような事象的なイメージが語られることもある。この場合には、口腔の作動で、空気の調整(語ること)と咀嚼の強さ(噛むこと)が、同じ活動態の別の局面での現われとなる。対象 a を拡張していくと、統合失調症の範囲まで経験を広げることができる。統合失調症は、言語的な秩序の解体などではない。それは末端の結果だけを見ているのである。むしろあるイメージをきっかけとして、ラカンの図式そのものを組み換えるような活動を行うことがある。統合失調症の圧倒的な多様さは、構造的な図式そのものの解体を意味している。言語の解体は、すでに言語的構造の特徴ではなく、別様のシステムが作動し始めたことの副次的な結果である。それは言葉が出現する場所で働いているシステムであり、そのシステムに自分の経験を連動させようとすれば、たとえ精神科医であっても特殊な訓練が必要となる。

ラカンの図式で、左下に配置された「自己」は社会的な自分の像である。社会のなかで、自分自身だと他者に振り向けられた像をもたないのであれば、社会存在としてやっていくことはできない。これは他人向けに作られた自分自身の像である。そして情報ネットワークのなかで、この「自己」の像が、一通りで決まらず、偽装や仮装に満ちたものとなり、ときとして分裂したまま使い分けるといったような事態も起こりうる。

YouTube の画像には、時として、アニメ風のパーソナリティが配置されることがある。「三千院心」「カップえんちょー」「みいたん」「AKARI」等々は、原稿を読み映像身体の定型の振る舞いはあるが、印象画像に近い。それでも公的に作り出された「自己」である。情報内容、雰囲気、論調に応じてキャラが出るように設定されている。情報ネットワークのなかでは、代理自己や匿名自己、偽装自己は、ごく普通のものとなる。SNS のなかでは偽装された自己と現実の自己との乖離は、ごく日常的なものとなる。

東京新聞の女性記者 M は、官房長官への筋違いの大演説質問で有名で、本人の固有名でハラスメントの名称が作られるほどだった。SNS では、ターゲットとなるものがあれば、ただちに仁義なき戦いが起きる。仁義なき戦いの大半は、便乗組である。そのとき女子中学生の発起人名で、M 記者支援署名の SNS での呼びかけがなされ、膨大な数の支援署名が集まった。ところが女子中学生が発起人とされたこの呼びかけを行ったのは、実際には 50 代のただのおばさんだったことが判明し、呼びかけアカウントはただちに削除された。こうした騒ぎを繰り返しながら作動を続けるのが、情報ネットワークの特質である。韓国ネタを発信し続けた「三千院心」と「カップえんちょうー」は、YouTube 当局に送られた集団的なクレームに晒されて、コンテンツが削除されたり、発信活動が停止されるといった事態が起きた。「カップえんちょー」については、本人名の偽造コンテンツが何種類か配信され、チャンネル乗っ取り騒動まで起きた。

ネットワーク用の「自己」の仮構はいくらでも可能であり、生身の自己の悲惨さに対応して、ネットワーク用の自己は「過激な姿」をとる。犯罪になるほどの過激な言論をネットワーク内で行うものを捕まえて見れば、無職で一般社会では誰からも見向きもされないような人物だったりする。SNS の自己と一般社会の自己が乖離したままになることは普通のことである。社会的存在としての自己は、社会内に実現される自己像のことではもはやなく、代償自己、偽装自己、演出自己等々の機能性に粉飾されたものになっている。

こんなふうに考えていくと、ラカンの図式も総体としてほとんど変質してしまうことがわかる。欲望する主体のなかの食欲、性欲、睡眠欲、排出欲のような基本的な欲求だけではなく、小さいがいくらでも肥大化できる欲望が次々と生み出

され、現実を覆ってしまうのである。たとえそれらが付帯的な見せかけをもともとも、本人の行動を強く促すのであれば、無視できないほどの要因となる。

また大文字の他者は、任意に作動を続ける枝葉のようなもので、どの程度の広がりや進行しているのかをおそらく誰も見分けることができない。ミニネットワークは際限なく作り出され、同じ日本語を使っているのだからメッセージは通じるはずだという期待も、気づいたときにはスルーされてしまうほどの分岐が進行する。これらのネットワークに応じて、欲望の形態も変化していく。

こうした場面で、対象 a も、経験が不安定になったときの防衛的な役割を果たすだけに留めることは、むしろ不自然である。内実として、対象 a は一つに留まる必要もない。むしろ経験をさらに弾力をもたせ、より有効に作動させるためにどのようなイメージをもちうるかという課題に対応するように再設定したほうが良い。経験の安定化ではなく、むしろさらに新たな創造性と生産性に向けてどのようなイメージが有効かという問いのもとに設定できるような経験の範囲に、対象 a を置いたほうが良いのである。こうなれば、大文字の他者(言語・記号)も、対象 a も、自己もことごとく変貌したものになると予想される。

**手続き的経験と理解** 現代の情報化による変化のなかに含まれるいくつかの精神病理的変容にかかわる共通の事柄がある。SNS は、基本的に理解可能性だけに向けられたメッセージからなる。数学講座や初級力学講座のようなものは、適合性が低い。ここに知識のわかりやすさや伝達しやすさの問題ではなく、知のなかに含まれるモードがかかわってくる。数学、物理、論理、システム、経済、法等々は、手続き的な知識である。精確に言えば、手続き的経験である。この手続き的経験で獲得されるのは、技能である。これはたんなる理解されて記憶されるような知識ではない。最も極端で単純な事例で言えば、自転車に乗ることは技能の修得であって、知識の理解ではない。自転車の乗り方は「分かっているが、乗ることができない」という事態は、知能の在り方を取り違えた筋違いのかかわりなのである。記号論理学を学び損ねた学生がときとして質問にやってきて、回答の仕方を覚えるのですかという。これこそまさに筋違いの経験である。

経済や法の知識も、現実に関与する自身の行為に対しての選択肢と指針を提供するものであって、言葉として「需給バランス」や「サプライチェーン」という言葉を理解することではない。少なくとも、こうした語に対しては仕組みのなかにどこに変数や選択肢があるのかを探るような理解の仕方をしなければ、ただの言葉を覚えることに留まってしまう。

とすると SNS の言説では、経験の動かし方が身につかず、言葉の理解しかもたらされない知識が飛び交うことになる。見かけ上の情報量は多いのに、経験がとて狭い者たちが大量に出現する可能性がある。多くの情報を振り回しながら、経験はほとんど動いておらず、結局のところ「ほとんど何もわからない」者たち

が生まれていく。それが SNS 時代の情報である。

教育現場では「アクティヴ・ラーニング」がしばしば語られる。教員の側からの知識の伝授だけではなく、学生の参加を促すことが必要だという趣旨のことが説明として付け加えられることが多い。しかしこれでは授業形態のモードを示しているに過ぎない。必要なことは、授業をつうじて「手続き的経験」を修得することであって、これは知識を理解することではない。手続き的経験の必要条件は、「分かること」だけではなく、「できること」であり、経験を行為として実行する能力である。異なる選択肢の可能性を感じ取り、別様にも進んでみることができるという経験の習得と、立場や観点から意味を理解するということはまったく別のことである。

手続き的経験は、経験を一つの行為として実行する。それに対して、理解は提供された知識を配置し、場所をあたえることである。そして経験にその位置価値をあたえることである。その場合、経験のなかに配置された知識は、すでに消費ネタになっている。手続き的経験は、別様に進んでみることの素材として、知識を受け取り、それを別様に進むことの手掛かりとして活用するような経験の仕方である。情報化社会では、間違いなく、手続き的経験が減少し、消費ネタ理解が増えていく。

**語句敏感感応性** そのさい経験は新たな選択肢へと向かって展開していくのではなく、言語的な理解によって次の発信をどうするのかに力点が移ってしまう。経験はきわめて小さな幅のなかをさらに小さな起伏を求めて作動するようになる。ここに「情報の飢え」が生じる。

ここには大小の病的な言動が出現する。語に反応する「語句敏感感応性」や、語への固着をともなう「語句原理主義」と呼ぶべき事態である。言葉は事実や現実をなんらかのかたちで表現するものである。語句をそのままとることはなく、語句とともに発せられた現実の輪郭を感じ取っていくことが、一般的な語句の経験である。

ところが語句そのものに経験が収斂し、語句が何か特定の事柄を含んでいるかのような経験の硬直が起きるのである。このときどこに選択肢があるのかという経験の流動性が消えてしまう。それを欠けば経験の基本性格が失われてしまうのだが、本人はそのことを感じ取っている様子はなく、また欠落していることに思い至ることもない。「語句敏感感応性」は、奇妙な緊張を抱えていて、自分自身の言動の訂正可能性をほとんどすり減らしてしまう。

語句に関連づけられる意味や出来事であれば何でも持ち出すことができるために、情動的支離滅裂が常態化する。論理性も事柄の関連性もほとんどないまま、語句がかりに連想的につながるものであれば、あらゆることが持ち出される。

そのあげく誰から見ても信じられないほどの言説が飛び交う。多くの情報を持

ち合わせているように見えながら、学習の能力も減退してしまう。多くの経験が持ち込まれているように見えながら、学習そのものが減退するために、かかわらないほうが良い、言いたいだけ言わせて放置したほうが良いと感じられる広範な発信とそれに対応する人々が出現する。信じられないことだが、誰にとってもこうした人物は複数周囲にいる。

恒常的に嘘を平気で言うが、「サイコパス」に見られるようなその場しのぎのでたらめではない。むしろ本人はどこか一生懸命なのである。真偽や事実/非事実、あるいは論理的に整合であるかどうかは一切問われることもなく、また本人はそれを吟味することもできず、ともかくも相手が反応してくれるまで、何でも持ち出し続けるのである。反応欲求とでも呼ぶべき奇妙な振る舞いにまわられている。そうして多くの人は、こうした人物には積極的無視によってしか対応できないことにやがて気づくことになる。それらの発言は反応することを求めている言説と発信なのだから、反応しないことが最善なのである。

**サイコパス** サイコパス(精神病質)は、いまだ精神医学的な規定も明確になっていない病態である。犯罪者のなかにも一定頻度で含まれているが、犯罪者であるからサイコパスであるわけではない。逆にサイコパスだから犯罪者というわけでもない。だがいくつかの理由からサイコパスは、なんのためらいもなく、またいささか唐突に、犯罪に踏み込んでしまう。また人格障害(社会的適応障害)ではあるが、明確に責任能力はある。犯罪そのもののもみ消しも画策する程度には、犯罪もしくは犯罪状態への対応能力はある。

ロバート・D・ヘアは、心理家として刑務所で面談を行ううちに、奇妙な犯罪者の一群がいることに気づくようになった。そして統計的に多くの精神疾患の症例を集めて、そこからいくつかの特徴的な指標を取り出したのである。それによってサイコパスの輪郭は、かなり明らかになった。ところがヘアの資料は、すでに犯罪者と認定されているものから多くのデータを収集しており、サイコパスのなかでも特異な一群の症例を扱っている印象を受ける。この病態は、多くの症例から詳細な分析を行わねばならない。というのもサイコパスは犯罪にかかわる頻度が高く、かつ周囲の人が犯罪に巻き込まれる頻度も高い以上、できる限り多くの人に理解可能なレベルまで病態に届かせなければならないからである。たとえばヘアの記述に以下のようなものがある。

レイ(仮称)は、私ばかりか誰をも欺く信じられない才能をもっていた。おしゃべりがうまく、嘘もかんたんにつき、それがあまりに流暢だったり素直だったりするので、ときにはもっとも経験豊かで猜疑心の強い刑務所職員でさえいつとき警戒を解いてしまうほどだった。私が会ったときには、前科がいっぱいあり(あとでわかったことだが、その後も前科がふえつづけた)、成人

してからの人生の半分以上を刑務所で過ごし、しかもその犯罪の多くは凶暴なものだった。それでも彼は、更生する用意があることを私や私などより経験豊かな人たちに納得させ、打ち込めるものを見つけたので犯罪に対する興味が完全に薄れたと信じこませた。レイは果てしなく、のらくらと、あらゆることについて嘘をついた。嘘と矛盾する点をファイルに見つけてそれを指摘しても、彼は少しも悪びれなかった。あっさりと話題を変え、まったくちがう方向に話をもっていった。

こういう風に描かれると、ただのおしゃべりで嘘つきで、ペテン師のように読めてしまう。そして誰も身近にもそうした人がいる、と思い起こされる。ただしそのとき思い起こされているのは、ほとんどサイコパスではない。サイコパスの難しさは、一つ一つの特徴を取り出すとその程度の人間なら身の回りにもいると思いがたることである。そしてそれによって理解しやすい人間類型へと接続して、誰もわかった気になれるのである。

そして特徴として取り出されるものを列挙すると、「口達者で皮相的」「自己中心的で傲慢」「共感能力の欠如」「ずるくごまかしがうまい」「浅い感情」「衝動的」「行動のコントロールが苦手」「責任感の欠如」「反社会的行動」というような項目が並ぶ。しかしこれらは問題成人ではあるが、一定頻度で出現するような問題成人であるようにも見える。

先のヘアの引用文章で、こうしたレイのような人物も、自分の言葉を最初から疑っているような人を相手なら、もはや欺くような話はしなくなるであろう、と推測できる。むしろ警戒するはずである。またその程度の能力は備えている。いつも同じようなパターンで話すような「妄想様」人間ではない。にもかかわらず自分の話術のなかに簡単に相手を巻き込めるという自信と自負は、人並み外れたものがある。多くの場合、この自信と自負は隠されているが、最終的に本人を支えているのは、現実社会のなかで配置できないままになっている本人自身の由来の不明な「プライド」である。

実際にサイコパスに会って話してみればわかるが、強い自己愛性人格障害とそれが満たされない現実の社会への不満が含まれており、それは自分自身の仮構へとつねにつながっていく。おそらくサイコパスにとって、SNS はまたとない住処なのである。

**売名欲求** 大文字の他者は自然言語を基本とするが、発話は特定の人物による特定の人物からの発話であり、声や身振りをともなっている。そして特定の情景や特定の音声言語に反応し、この反応した経験を押しとどめ安定化する仕組みの一つが、主体が自分自身で及ぼしている「抑圧」である。できるだけ反応しないように押しとどめている状態を、「落ち着いた意識」だと自己認識している場合

が多い。

ところが情報ネットワークに流れる夥しいコンテンツは、多くの場合、受信者の集合は特定されず、無作為に放り出されていく。また発信する側も、時としては匿名であり、場合によっては偽名である。精確には誰が発信したのかもわからない。誰が発したのかもわからず、受け取り側も不特定多数で宙空吊りになったコンテンツが流れるのである。

発信する側は、こうした状況下で発信したコンテンツに反応してもらいたい欲求がある。おそらく自分が発信しているにもかかわらず誰も応答しないのであれば、肩透かしであろうし、ひとときの寂しさもあるだろう。とすれば虚偽であろうが、事実と異なることであろうが、誰かに反応してもらいたいという強い欲求が働く。それは身体的な反応を呼び起こすほどの効果をもった発信となる可能性が著しく高くなる。つまりピンボールまがいの効果をもつ発信を行うのである。反応してもらいたい欲求は、伝統的に語られる「承認欲求」とは別のものである。ある情報に反応があることは、次の情報の作動に加担できることであって、別段承認しているのではない。Good という応信は、次にも引き継ぐことができるということであって、内容の良さのことではない。

言説は、事実や正当性を競うのではなく、次の反応を期待して、反応があることを目指してなされることになる。このとき発信者には、内容とは別の「自分を知らせてもらいたい」「自分の声を聴いてもらいたい」という思いが込められることになる。仮想名(無記名)の発信と不定集団の受信ネットでは、ともかくも発信する側は「知らせてもらいたい」という欲求が前景化する。伝統的な承認欲求に促されてはいるように見えるが、実際に起きることはいわゆる「売名行為」である。

「売名行為」では、発信する思いと発信された内容に大きな乖離が含まれ、発信する思いは理解可能だが、発信された内容はそれにまったく対応しないというような事態が起きる。「私の思いを知ってほしい」という願いは理解できても、その内容はバカバカしいほど希薄なことが多い。

デッドボールまがいの発信が行われれば、ただちに騒ぎとなり、両軍の全選手が飛び出してきて、乱闘となる。場合によっては、観客席のファン同士も乱闘を始めることがある。そして場数を踏めば、これもただの「見せ物」であることはただちにわかる。一般的に言えば、プロレスのようなショーの一部である。ショーであれば、その場が過ぎれば、ひと時の騒動で終わりである。ただし野球の場合、この騒動の起因となった選手や行為は処分対象となる。それは審判団が行う業務である。だが SNS には、こうした審判はいない。

なにか事件が起きれば、ただちにそれに便乗したい欲求が恒常化する。一般には「炎上」と呼ばれる事態である。炎上があれば、通常の火災であれば、放火犯がいる。この放火犯が特定できないのが、SNS である。炎上の便乗は、実際の火



事現場でもしばしば起きる。炎上の仕組みは、局所的に急速に広まるインフルエンザに似ている。誰が最初にインフルエンザを持ち込んだのかが特定できない。そうすると感染が収まるのを待つしかない、というような事態にもなる。インフルエンザの場合には、周囲は予防接種をして広がりを防ぐ。ところが「炎上」はまさに炎上機会を待ち望む欲求に、好機をあたえるだけになる。

**現実と情報** 自動車同士の狭い道路での接触事故を想定する。二人の当事者がいる。事故であれば、警察を呼び、契約している保険会社に連絡を入れ、人の身体に損害がない限り、民事に留まる。この場合には警察は不介入である。保険会社が双方の間に立ち、責任割合を決めて、支払いの仕組みを確定してそれで終わりである。このとき事故の当事者が、警察や保険会社に連絡を入れると同時に、SNSに相手を批判する投稿を行ったとする。この投稿は、現実の問題解決にはまったく不要で、かつときとして余分な騒動を創り出し、問題を別の方向へと変質させる場合がある。

言語表現は、あらかじめ反応することが見込まれる範囲に集中する傾向が生まれ、この傾向は言語表現に対して、「敏感感応性」という特質を広範囲に生み出してしまふ。これは作為的に作り出された「反射反応」のことである。ひとたび閾値を更新した反応性は、次々と敏感感応域へと進んでいく。周囲からは何故反応しているのかわからないようなことが起きる。あるいはなにか度を越していると感じられる反応が起きる。過度の反応に対して、さらに敏感に反応するネットワークが出来上がっている。「敏感感応性」は、ネットワークのなかで増幅される方向で半ば自動的に進行する。

欲望は、言語表現と通信の仕方に多くのチャンネルをもつようになる。見も知らない二人が、挨拶を交わすように二人だけのコミュニケーションを形成することもあれば、誰も見向きもしないような発信を延々と繰り返すことも起きる。誰も受け取らない発信は、大演説となり、ただ流されているだけになる。また特定の人物に向けての訴えとなり、それが執拗に繰り返される。演説狂と訴訟狂は、「妄想病態」の頻繁に見られる外形的特徴である。これが SNS に流れ出すようになり、妄想性病態は、ごく月並みなありふれた光景となる。実質的に演説狂は、消滅する。つまり発信の平均水準が、すでに演説性を帯びてしまっている。だが訴訟狂は、特定の誰かを訴えるのだから、繰り返し炎上のネタとなる。訴訟狂の欲望は過度に満たされ、訴訟の味を覚えたものは、繰り返し同じタイプの訴訟を実行するようになる。

**演技性人格障害と自己愛性人格障害** 情報ネットワークは、それに反応してくれる人の連鎖で成立する。すると偽装してでも、反応のありそうな発信を行ってしまうという欲求に巻き込まれてしまう。事実や内容を超えて、反応を求める方向に向かうので、そこに不可避的に「演技性」が絡まってしまう。「演技性人格

障害」は、恒常的に平準化されたものとなる。演技性人格障害の最初の項目が、「注目されていないければ、面白くない」という内容であり、このとき自分と情報ネットワークというごく単純な社会関係だけになってしまっていることがわかる。ここでは裏側で、実生活上の選択肢の不足が起きている。

朝起きて散歩すれば、散歩の途次、近所の人たちとの挨拶から始まる。コンビニの店員との軽い挨拶をし、お昼前にはスーパーに買い物に行く。そこでも軽い立ち話をする。こうした日常の社会像と、演技性に装われたネット上の社会像は、確実に乖離していく。日々の日常で正規の職も決まらず、鬱積にまとわれた社会像の青年が、ネット上の像として、まっとうな演説を行ったり、特定の人物を繰り返し攻撃したりする。自己という社会像には、ネット回路に応じて確実に乖離が含まれるようになる。

その場面で出てくるのが、「自己愛性人格障害」である。内容は、自分は社会にとって貴重な人材であり、重要な人たちとかかわるべきであり、本来そうした人たちと交わるべき人間だと確信しているように、自分自身への過大評価と、多くの場合普段は覆い隠されているプライドからなっている。そしてそれを満たそうとすれば、確実に本人にとっての本人自身の余分な作為が生じる。大文字の他者が分岐し、小さなネットワークが形成されることに応じて、自己の像は内在的な解離性を帯びる。

こうしていくつかの典型的な特徴が浮かび上がる。

(1) 情報ネットワークは、小さなネットワークであり、外交機密も特許情報も社内機密も顧客情報も基本的には、ネットワークのなかには出現してこない。情報ネットワークは、あらゆることに開かれているように見えながら、ごく狭い現実しか扱うことができない。しかもほとんど重要性のない情報である。そのためSNSの経験は、気づいたときには視野が狭まり、ガセネタを知識だと勘違いする強い傾向が生まれる。時として政治家のメッセージがツイッターに流れることがある。どういう反応が起きるのかを観測気球のように探っていくメッセージがほとんどで、公式発言ではない。

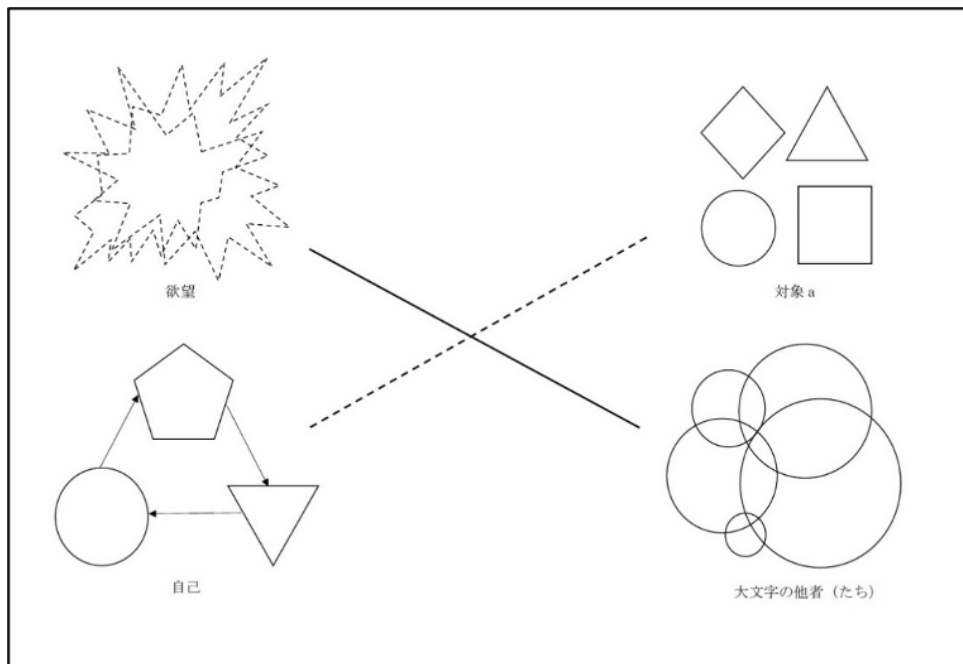
(2) 情報ネットワークへの関与の比率があがるにつれて、行為の選択肢が減少していく。「わかること」と「できること」の乖離が生まれ、この領域では行為の選択肢を増やす方向での試行錯誤の訓練を積む機会を、おのずと放棄していることになる。評論家のようなことを述べる人たちは増えるが、その裏側で、新たな経験の回路に踏み出す機会はおのずと失しなわれてしまう。そして個々の表現は、立場や観点から繰り出される「政治性」を帯びる。言葉に反応して、ただちに「差別用語」だと認定して騒ぐようなことはごく普通に起きる。たとえば「ハゲ」という言葉は、お笑い系の芸人が売りネタとして使ったり、それなりの風貌をそなえたジャーナリストがトレードマークとしてつかったりする。他方元国会

議員が、自分の運転手に「このハゲ」と呼んだりする。言葉は、使われる状況や環境を離れては意味がない。それにもかかわらず言葉を単独で取り出し、その語の社会的価値を勝手に自分で決めてしまうのである。そこに軽度のイデオロギーが出現し、社会病理が発生する。言葉の単離は、情報ネットワークの特徴の一つでもあり、それを差別用語だと認定することが社会的主張だと思い込んでいる人たちが出現する。そこで起きることは、錯誤と固着の繰り返しだけなのだが、本人にとってはそれが一つの充実となる。

(3) 欲望は、食欲、性欲、睡眠欲、排出欲のような基本的な欲求以上に、本来であれば測定誤差のような欲求がそれじたい肥大して、大きな比率を占める。しかも行為の選択は限定されているので、欲求と行為の間には筋違いのつながりが次々と創り出される。これらの欲求のなかには、自己承認欲求、他者攻撃欲求、被害者意識欲求等々の欲求が含まれ、自動的に肥大する。これが固着という現象になる。同じ欲求を繰り返してしまうことは「反復脅迫」に見えるが、起きていることは、同じ欲求への固着である。朝起きてただちにスマホを覗き、時間が空けばスマホを覗き、いわば慣性の法則にしたがうような惰性的行為が生まれる。これは情報刺激への飢えを生み出し、飢えが次の飢えにつながるような仕組みとなっている。「情報待ち受け欲求」という新たな欲求が出現する。持続的に仕事をし、自分を追い込みながら仕事をするという経験の仕組みにとって、情報待ち受け欲求は、実際には相当に大きな妨害になっている。おそらくまとまったかたちで本を読む者たちが激減する。

(4) 社会のなかでどういう自己像をもつかは、社会生活を行う上では欠くことのできない生活の知恵に属する。ただし情報ネットワーク上の自己像と現実社会のなかの自己像は、極端にずれたものとなる。ここには演技性人格障害と自己愛性人格障害の広範な裾野が準備されている。

こうしてラカンの図式に変容をかけて以下のような図式となる。



## 2 作動する情報と身体の中の情報

情報は間違いなく、単独のシステムではない。PC で数学的な演算を実行させるとき、オペレーションを続けて、演算の結果を短時間で容易に算定する。このとき演算だけが作動するのではなく、オペレーションそのものを作動させているいくつかのプログラムがある。多くはPCに内蔵されたプログラムである。自動的にオペレーションが続いているように見えながら、そのオペレーションの作動をもたらすプログラムは自動的に動いている。これはごく一般的な作動プログラムであり、「作動の順番」、「条件的分岐」、「繰り返し」を含んでいる。情報には、情報を成立させるプログラムや情報と連動するプログラムがつねにある。

またPCのオペレーションの結果は同じであっても、どのようなプログラムが動いているのかを判定することはできない。同じ結果を出すPCが同じプログラムを実行していることにはならない。つまりオペレーションの結果とプログラムの間には乖離があり、どのようにして同じ結果が出たのかもわからない。オペレーションの作動の結果は、同じプログラムが作動したことの証拠にも論拠にもならない。

かつてクリプキが『ウイットゲンシュタインのパラドックス』で議論した、「自分一人で規則に従うことはできるか」という問いの立て方は、実は「自分だけの

規則」は果たして可能かという問題ではなかった。自分だけの規則を「規則」と呼んでよいかどうかという問題でもない。クリプキは、とても重要な問題に気づいていながら、問題の核心を取り違えていた。この問題の要点は、たとえ正しい回答を出している場合であっても、どのような規則に従って正しい回答を出したのかが決まらない、という点にあった。2000 年前後に日本で盛んに議論していたことが、AI によって別様に拡大されたかたちでさらに明確になった。58+67 という演算を行って正しい解答を出しても、どのような規則によってその解答に到達したのかが決まらない。AI がまったく異なる規則で同じ解答を出すことは、ほぼ自明なことである。

ネット型経済価値の代表が暗号通貨であるが、暗号通貨を使って多くの店舗で活用できても、その範囲では汎用性の高い「商品券」に留まってしまう。ガス、水道料金のような公共料金の支払いに使えたり、納税に使うことができなければ、社会的な公共性を獲得するところまでには進むことができない。また通貨に留まっている限り、金融商品にはならない。各種債権は金融商品であるが、債権を暗号通貨で発行したり、暗号通貨そのものが債券であったりすることはない。

同じ「情報」という名称でも、異なることが言われている。色についてみると、裸眼で色相互の違いから約 35000 程度の色合いの区別はできる。これは人間の眼の識別による。AI センサーでは、さらに細かく区別できる。とするとその区別に相当する自然言語は存在しないだけでなく、記号を活用したとしてもその区別に対応させることはできない。センサーは映像のまま分析を行い続けることができるが、その分析は、言語情報に落ちてくることはない。人間の眼でも同じことが起きているので、この視覚像と言語的表記の関係のギャップに奇妙なところはないのかもしれない。だが問題はその先である。

たとえば医療現場で撮られた CT スキャン像の比較から、センサーは独自の読み取りを行うことがある。センサーの眼は、人間の裸眼以上に優れているのだから、センサーの分析は人間とは異なるものとなり、人間とは異なる判断を下すこともできるようになる。それを人間は一つの「有効な示唆」として受け取り活用することができる。さらにその先で、センサーの判断から人間はどのような学び方ができるのかが問われる。センサーはおそらく有益な示唆の一つを提供してくれるに違いない。しかしそのことがセンサーにしかできないのであれば、人間の経験はつねにセンサーを重要な示唆を提供しつづけてくれるもの以上にはならない可能性が出てくる。

一般に、PC データ処理が有効であるのは、通常の人間の経験の範囲内で、それまで人間の判断ではうまく処理できなかった領域へと AI が踏み込んでくれる場合である。作者レンブラントという名前が着いている絵に、どこかレンブラント本人以外の方が書いたものなのかという問いに対して、レンブラントの絵の特

徴を読み込ませて、そこから外れるものを指摘させることはできる。著者名というのは、代表名であって、近現代的な「作者」とは異なることは良く知られている。そこで AI に判定させて、一つの絵のなかのどの部分は別の人が描いたのかを判定させるのである。

こうした事態は人間の予期の範囲内にあり、およそ想定でき、AI の指摘する判定も理解可能なものである。ダ・ヴィンチは天才的な画家だが、絵にはあまり関心がなかったと見えて、本人が描いた作品は、はっきりとわかるもので 14 点しかない。それ以外に、部分的にいくつかダ・ヴィンチが手伝ったと感ぜられる作品もよく知られていて、それは人間の眼でもはっきりとわかる。そうした理解可能性の範囲にあるものを AI で改めて分析させて、AI の判定だとして提示することはできる。

第一級の国際雑誌『ネイチャー』に投稿された論文で、社会の複雑性と宗教的信仰の推移をいくつもの指標から分析したものがある。社会的複雑性の指標を、人口、領土、行政のレベル等でおさえ、宗教的信仰については、儀式の頻度やモード、超自然的信仰の有無などの指標を盛り込んで、データベースを設定して解析をかけてみる。一般的には宗教的信仰が獲得されて後、高度な共同体が作られ、それによって社会的な複雑さが形成されてくると思われていたテーマ領域である。実際に AI に分析をやらせると、社会の複雑さの増大が、宗教的信仰の獲得に先行していたという事実認定を AI が行った。

従来の人間的解釈が、AI によって覆されたと話題になったことがある。しかし同じデータベースを使って、指標を少し変えるとまた別の結論が出た。AI をつうじた議論で盛り上がりが見られることは、それじたいは望ましいことだが、こうした議論の範囲では、すべて理解可能な範囲にある。タイプの異なる論じ手が増えてはいるが、それでもすべて理解可能なのである。この段階では、知識や見方の数は増えているが、人間の経験が広がったわけではない。

**理解の彼方** センサーの行った分析から、人間はどのようにしたら経験を上げていくことができるのだろうか。ごく単純に言えば、先ほどの CT スキャン像の見方やその分析について、人間は何を手にするすることができるのだろうか。おそらく視覚像とその分析、またそれらとは直接は接点のない人間の言語への変換の問題であり、プログラム間の変換の可能性をめぐる問題が生じると予想される。これは人間の眼そのものの限界に対応している。

AI センサーは、自分のプログラムを詳細にする方向でさらにプログラムそのものを分節させ、判断を求められればデータに合わせた判断を行う。だが人間にはそこで何が起きているのかが分からない領域がある。

自然言語の特質は、自分でもやってみることができるということ、基点としており、それが学習の基本でもある。人間の経験にとって実行可能性のないもの

から、学ぶことはできない。AI がたとえ素晴らしい提言を行ったとしても、人間の実行可能性を超えたものは、受け入れるか拒否するかのいずれかになる。これが人間の能力からみた「臨界点」である。CT スキャンの像から、AI の出すデータを受け取り、「およそこんなことを示しているだろう」という理解可能性が及ぶ範囲がある。そこを超えてしまうと「何が言われているかがわからない」という理解を超えた範囲に到達し、そこからやがてそれを受容するか、拒否するかのいずれかしかない状態へと進んでいく。これが臨界点である。対応に[0, 1]が出現してしまえば、そこでの人間の能力の形成はもはや期待することはできない。また理解を超えた領域での AI の判断が、正しいのか間違っているのかわからないのである。情報は技術的には[0, 1]の組み合わせで作られているが、経験はそうした仕組みにはならない。ここでは情報と経験の乖離は、構造的な必然性がある。

**身体情報** 身体と視覚センサーとの落差は、さらに大きい。というのも身体に本来的な触覚性の情報は、視覚情報とはまったく別のモードで作動するからである。触覚情報は、たとえば机の上のざらつきや起伏を感じ取り、区分する場面では、およそ 4000 種程度の区別ができる。認知的に判別できる度合いは、かなり細かい。視覚的に色の違いは、35000 種程度可能だと言われている。色の違いの認定に比べれば、オーダーが一桁劣るが、それでも相当に細かな認知ができる。この色の識別の場合でも、光の量や対象の周辺の明るさによって、大幅に変化する。

感覚は、感知可能なものと感知可能でないものを区分する働きである。これが感覚のコード形成である。そしてコードの枠内で、さまざまな細分化が起きる。ここがプログラムの認知である。音の場合には、50 ヘルツ程度の低周波は、音として聞こえないが、振動として皮膚で受け取っている。高周波の場合にも音としては聞こえないが、脳神経系が関与し受け取っている広大な領域があり、ことに 20 キロヘルツあたりに、脳にとってとても快感をもたらす波長域があることが知られている。一般には、コードは安定しており、コードの内部で認知が差異化をつうじて詳細になる。故美空ひばりが、「か」の音に対して二重の振動数で発声していたことが、今日ではわかっており、それが美空ひばり特有の情感を作り出していたことも知られている。

ところで机の上をゆっくりとなぜる場合と、一定の速度をもってなぜる場合では、判別される机の起伏やざらつきは、まったく異なってしまう。そのことは身体運動の維持に必要な限りでの認知しか行わず、身体行為にとって「余分な」情報は、おのずと「無視」されることによる。早足で歩きながら、足の裏でこまごまと地面を認知していたのでは、とても歩行はできない。歩行の維持にとって不要な認知的情報は、おのずと無視される。感知可能性を決めているコードが変化

して、情報とならなかったのではなく、むしろ情報を「潜在化させてしまう」ような「無視」が働いていると考えたほうが良い。無視とはつねに創造的無視である。触覚は、視覚とは異なる仕組みで働いている。これが身体運動と認知が連動する仕組みであり、視覚的認知情報と身体動作は、情報による指示でつながっているわけではない。そのため逆に単独で取り出された情報は、奇妙な仕方で運動とつながっていく。情報は、無視とは別の仕方で出現する構造的な不自然さを備えている。

**哲学の困惑** このことは伝統的な認識論に、重大な異論を申し立てることになる。実はアリストテレスからカントまで、基本線では「視覚」をベースにして哲学の構想が組み立てられている。心穏やかにして身体や感情を動かさず、世界を精確に捉えるという認識の仕方は、アリストテレスではテオリア(観照)と呼ばれる。個物を作り上げる質料—形相の二つの要素で、質料を客観から受け取り、形相を主観性に備わったカテゴリーに置き換えて、両者が対象として構成されるという仕組みに転換すると、カントの認識論となる。このとき認識は、物から触発を受けて質料を受け取り、主観性という加工の仕組みを用いて、表象を形成する。認識は表象にまでは及ぶが、物自体に到達することはない。素材となる質料を受け取り、それを認識が加工するという仕組みは、視覚がこうした認識のベースとなっていることを意味する。

他の感覚であれば、基本的に直接接触であるため、物とぶつかり、物の舌触りがあり、物に由来する感触があり、物からの振動がある。物に触れ、それを感じながら、自分の手を感じるという仕組みになる。これが身体をベースにした認識の基本である。このとき物に触れて「感じる」という働きと、触れている自分自身の手を「感じる」という二つの働きは、まったく異なっていることがわかる。一方は対象認識であり、他方は身体内感である。ここでは視覚をベースにしたこととはまったく別のことが起きている。

哲学が「行為」をうまく語るができない理由がここにある。視覚と身体行為とは、繰り返し連動そのものを形成し続けなければならない領域である。そして多くの場合、行為の遂行にとって無駄な認知を回避しながら認知と行為の連動は形成される。この場合には、認識から行為が誘導されるだけではない。

現在のセンサーは、視覚情報をデータ化するのだから、身体運動への適合の場面では、いずれ従来型のモデルとは異なる課題が生じる。たとえばアメリカのイチゴ農家では、イチゴ取入れの大型機械が活躍している。センサーがイチゴを見つけ、見つけたイチゴに触手を伸ばして熟れ具合を認定して、その触手がイチゴを摘み取り、大型機械の後ろに備えた籠に入れていく。この場合には、センサーで読み取る能力は幾分かずつ細くなるが、モーターの動きはまったく同じパターンである。センサーから受け取ったデータを忠実に実行していただくだけである。



自動運転制御装置も、事情は同じである。

自動運転機器の最大のものは、航空機である。離陸と着陸以外は、航空機は自動で運行している。船舶も似たようなものである。公海上を運行する船舶は、他船舶とすれ違う場面以外には、設定された航路を自動的に進むだけである。この自動制御の場面は、一般のオートマトンの制御と同じで、リスク変数が一定値を超えなければ、同じ作動を繰り返してよいというプログラムで成立している。リスク変数の数もごくわずかで良く、別の飛行機の移動を近距離で感知したとか、海のなかに巨大な生き物の往来を感知した場合には、警報音が鳴り、そのとき場合によっては自動運行を手動に切り替えて、操縦士が運航を担う程度でよい。センサーは新たなデータや判断を獲得していくが、それによってモーターの作動の仕方がさらに詳細になるわけではない。

ところが陸を走る車では、制御変数の種類と数は、比較にならないほど膨大である。閑散とした田舎道を走っている間はまだよい。都市部に入れば、対向車、信号、横断歩道をする人と動物、予想しにくい自転車の往来、高層ビルから発せられる微弱な電磁気、時として生じる落雷による電波障害と短期停電等々では、制御しなければならない多くの要因がからんでくる。衛星からの位置情報は、いつでも攪乱させることができ、また意図的に誤情報を流すこともできる。ロシアとウクライナのクリミアをめぐる戦争のときには、ロシアによるセンサー攪乱によって、ウクライナのミサイルや地上兵器は、徹底的に無力化されてもいる。

そのつどリスク変数が閾値を超えて警報音を発するのであれば、場合によっては自分で運転したほうがましだということにもなる。それでも学習能力のあるAIであれば、こうした変数に対応するための技能を順次身につけて行くだろう。実際スウェーデンで行われているように、無人街路清掃車は、歩行者のほとんどいない時間帯に、信号だけは守りながら、単純労働を繰り返している。しかしこれは電線を使って走る電気電車の運転手を無人にするものの延長上にあるだけである。

この範囲内でも相当に難しい問題は実際に起きている。たとえば対向車線のある交叉点で、自動運転自動車が右折するためには、対向車線を反対向きに走ってくる車をセンサーで敏感に察知し、右折可能かどうかを判定しなければならない。相手の車の速度と速度の変化率、交差点までの距離(時間)の縮小の度合いを読み、右折可能かどうかを瞬時に判定しなければならない。当然のことながら横断歩道をわたる人間は、同時に捉えていなければならない。センサーの処理をしなければならないデータは多様で膨大である。高度なセンサーの開発と学習機能の高度化には、まだまだ隙間が多すぎる。京セラの開発した高度センサー「LiDAR(ライダー)」は、赤外線反射とレーダーを組み合わせ、障害物を認識する仕組みだが、相手の動きを読むプログラムがどこまで形成されるのかは不明である。

**情報の時間** 移動しながら眼前の物体を捉える場合、人間の認知では、自分自身と物体の間の衝突までの時間を知覚している。物が飛んでくるときに接近の度合いは、衝突までの残り時間で知覚され、たとえば走り幅跳びの踏切板のように身体をそこに合わせる場合にも、残り時間が知覚されている。ところが人工的センサーは、地図上の位置情報と位置の変化だけで物の接近や移動を捉える仕組みを採用せざるをえない。というのもセンサーにとって、時間はあらかじめ外側に設定された座標軸だからである。物体の接近と衝突までの時間は、空間的な距離の縮小で二次的に割り出されるだけになる。ある意味でセンサーは一度も主体的であったことがない。主体性はつねに2次的に割り当てられた駆動体である。センサーには、基本的に時間経験がない。このことは制御変数の一つが最初から欠落していることを意味する。

**センサーとモーターのカップリング** 制御情報変数の獲得だけではすまない場面が、次の段階である。動く車の運転の細かさに対応するための運動制御の技能の獲得が必要となる。道路脇を歩く歩行者が反対方向から来る自転車を避けるために、道路の中央にいくぶんか出かかったとき、それを察知してそのつど停車したのでは、車の運行とは言わない。センサーによる感知に対して、運動体はつねに複数個の対応可能性をもつ。

AI ではセンサーによる識別の技能向上と、モーターでの対応可能性は、一対一にはならない。センサーとモーターは異なるプログラムとして設定されると思われる。そうなるとプログラム間の連動である「カップリング」の仕組みをどのように設計していくのが、重要となる。そしてそこには一対一の対応関係がなくても、作動を維持できる仕組みが必要となる。

この問題は複雑で根が深い。人間の発達過程で考えてみる。人間の場合、歩行が実行できるようになるのは1歳前後である。その手前では、移動能力がないまま認知能力は形成されていく。言語音を聞き取ることができるようになるのは、かなり早く、生後4ヶ月程度から聞くことはできるようになると言われている。視知覚で人物を見分ける能力も形成されている。センサー側の能力の形成は、運動能力とは独立に形成されて行く。歩行できるようになるとセンサーと歩行能力の連動を形成しなければならない。このときセンサー側の能力も、運動能力に合わせて再度形成される。物の運動を知覚するさいには、運動獲得以前には、ある物が別の物の陰に隠れたり、ある物が別の物を隠したりする「遮蔽」の知覚から行われている。ところが運動能力が獲得されると、物の運動は、ある位置から別の位置への移動で知覚されるようになる。物の運動は、空間的な位置座標で行われるようになる。空間や位置移動の獲得は、みずから運動することができることに遅れてくる。すると物の運動の知覚でさえ、センサーのプログラムを作り替えて、センサーとモーターの連動を形成しなければならない。この事例だと、モー

ターの能力形成に応じて、センサーのプログラムさえ組み換えていることになる。

人間の能力形成でみれば、運動能力の向上に応じて、認知能力は改変され新しく組織化される。そのとき運動の制御に活用されている情報が、生態的環境情報である。運動の速度調整や運動方向の調整に活用されているのが、オプティカルフローである。これは運動しながら認知されている情報であって、静止したセンサーが捉えた情報を元に運動が促されるのではない。オプティカルフローは、たとえば長い廊下を歩きながら、壁の通り過ぎていく度合いや変化の度合いのことである。変化についての情報は、AIだと微小時間記憶をもとに組み立てられるのだと思われるが、変化率にはおそらく当分対応できそうにない。運動するものにとって、運動の調整要因となるのが環境情報であって、環境情報から動きが作られるのではない。このあたりがAIと作りがまったく異なる点である。環境情報から動きが作られるように誤解が生じたのは、最晩年のギブソンが、「アフォーダンス」という誤った命名をしたからである。この誤解は、ギブソンのそれ以前の業績や成果を台無しにするようなものでもあった。情報から行為が促されるのではなく、行為のさなかで行為選択と行為制御のために活用されるのが、情報である。そしてAIではこうした情報の処理は、これからの課題であるように思える。

モーターは、身体とはまったく別の作りをしている。実際にはモーターは駆動体であって、それによって動かされる身体は、たんなるボディである。ところが人間の身体は、触覚性の認知を備えた自分自身で動くものであり、たんなる被駆動体ではない。水の中で水泳の動きをするとき、水から押される感触をうまく活用するのでなければ、泳ぐことさえできない。こうしたことをセンサーで捉えることは容易ではない。身体の表面にセンサーを付けることは異なることであり、身体の動きのさなかで生じる感触こそ、感じ取られるべきものである。こうしてみるとAIによって形成される自動運転自動車には、多くの変数が欠落していることがわかる。

AIプログラムは、ある手続きに進むさいに、複数個の可能な手続きがあり、その手続きの選択が、その次の手続きの選択に影響をあたえ、この繰り返しのなかで有効な選択とそうではない選択が決まってくる仕組みが含まれているはずである。この手続きの進行の有効/無効の区分が、AIの行う「判断」と呼ばれる。オートマトンに複数個の分岐が入れば、それぞれの分岐で前に自動的に進むことのできる回路を探り当てているはずである。そのときセンサーの有効性を決めるさいには、データの細かさ、データの整理の速さだけが問題になるのではなく、モーターのプログラムをどの程度改善するのかを指標する「カップリング回路」と、その指標が必要になる。センサーのデータだけ細かくなって、モーターのプログラムが改善されなければ、実質的な駆動体としては粗暴な運転しかできない

ことになる。そしてこれは気の遠くなるような作業であると現時点では予想される。誰もいない直線の夜道を延々と走る場合には、国際線の飛行機や大型船舶と同じ扱いでよい。だが自動運転自動車では、事情が異なる。

カップリングの典型事例で考えてみる。典型例として、ゲノムとタンパク質の連動がある。この場合には情報上の指令は、ゲノムからだけなされる。だがゲノムの作動のためには、RNA や多くのタンパク質の支えが必要である。ゲノムは、必要なタンパク質を作りだすが、そのさいには2, 3割のまがい物のタンパク質が作り出され、それらはたんぱく質の活動ネットワークに組み込まれることはなく、再度分解されて次のタンパク質合成の材料として活用される。つまりこの程度のミスは、生物学的な試行錯誤のなかに含まれる。その場合には、既存のタンパク質とは異なっているとしても、それでも有効に機能する末端のタンパク質が含まれていてもおかしくない。

ところがAIは、こうした場面での試行錯誤を減らす仕組みが組み込まれていない限り、学習能力だと呼ばれないことになる。自動運転車の場合、試行錯誤とは事故が起きてもおかしくない状態のことである。AIは事故を起こしながら学ぶことはできない。しかしその試行錯誤の幅が一定程度含まれ続けることがなければ、学習の幅は維持されようがない。ゲームのプログラムの自己形成とは異なり、プログラムの試行錯誤には損傷が含まれる。ここがAIの一つのジレンマである。事故の可能性を減らせば、学習の幅が狭くなりモーターの改善の可能性は狭まる。他方モーターの改善の可能性を広く設定すれば、事故のリスクは高くなる。これはAIのカップリングのさいの「試行錯誤のジレンマ」とでも呼ぶべき事柄である。

AIの場合、情報処理だけであればどんどんと高度になる。だが運動制御は、それはそれで固有にプログラム化される。そのときセンサー側のデータ処理速度とモーター側の処理速度は、簡単には対応しない。人間の身体では、広範にデータを捨てる仕組みが備わっている。いわば「無視」と呼ばれるものである。無視があるので、プログラムのリセットが効く。AIによる自動運転自動車は、正直に言えば、学習の仕方が狭すぎるのである。おそらくAIは、多くの変数を欠落させた状態で、2次的に有効に機能する状態を見出していくに違いない。まぎれもなくそれは新たな学習の仕方だが、人間がそこから何かを学ぶには、あまりにも乖離が大きすぎる。特定の能力を過度に利用することは、他の能力の発現を抑制する。この宿命を最初から背負っているのが、AIである。

## 参考文献

- 大海悠太他「身体知研究会」『人工知能研究』(2019年9月)629-634
- ギブソン『生態学的視覚論』(古崎敬他訳、サイエンス社、1986年)
- クリプキ『ウィトゲンシュタインのパラドックス』(黒崎宏訳、産業図書、1983年)
- 佐々木正人・三嶋博之(編訳)『アフォーダンスの構想』(東大出版会、2001年)
- 佐々木正人・三嶋博之(編訳)『生態心理学の構想』(東大出版会、2005年)
- シャノン『通信の数学的理論』(植松友彦訳、ちくま学芸文庫、2009年)
- 高岡詠子『チューリングの計算理論入門』(講談社、2014年)
- 西垣通『AI原論』(講談社、2018年)
- フロイト『フロイト全集 11巻、「症例シュレーバー」その他』(新宮一成他訳、岩波書店、2009年)
- ヘア『診断名サイコパス』(小林宏明訳、ハヤカワ文庫、2000年)
- 松尾豊『人工知能は人間を超えるか』(角川書店、2015年)
- メルロ＝ポンティ『見えるものと見えざるもの』(伊藤泰雄他訳、法政大学出版、2014年)
- ラカン『エクリ』(宮本忠雄他訳、弘文堂、1981年)
- ロンバート『ギブソンの生態学的心理学』(古崎敬他訳、勁草書房、2000年)



## おわりに

初出一覧は以下の通りである。

1. 哲学という希望 ————— 書下ろし
2. 自然という現実性 ————— ‘Toward the 22nd-Century World Philosophy: Philosophy as a Research Program’ (『国際哲学研究』9号、41–50頁、2020年。)
3. 世界という現実性——一つの科学哲学的考察 ————— 『国際哲学研究』別冊11号「新実在論の可能性」、93–115頁、2019年。
4. 経験という現実性 ————— ‘Toward the 22nd-Century World Philosophy (II)’ (『国際哲学研究』10号、9–22頁、2021年。)
5. 情報という現実性 ————— 『国際哲学研究』別冊13号「情報 技術 現実性」、21–48頁、2020年。

ここでの論考は、現代において哲学の可能性をどのように開いて見せるかにかかわっている。哲学は、つねに果敢な企てであろうと試みているが、どの程度の突破力があるのかは、ずっと後の時代にならなければ判明しない。それでも何かを企て続けなければならない。こうした企てのなかから、人間の経験のなかに何かが育ってくれることを願うばかりである。